

## 創刊のことば

こころの未来研究センターは、2007年4月の設立から1年半を経た2008年11月、鴨川にかかる荒神橋のもとに新築された京都大学稲盛財団記念館に研究の場を移すことになりました。センターのこの新しい門出を記念して、定期刊行物『こころの未来』を創刊いたします。

こころとからだ、こころときずな、こころと生き方。この3つの研究領域と、それらをつなぐ融合領域を探求のフィールドとして、センターに集う研究者は、日々多様な研究プロジェクトに取り組んでいます。この冊子には、その研究活動から生みだされた成果報告や研究論文、こころをめぐる研究エッセイ、対談など、さまざまな読みものが掲載されます。この冊子が今後永く、こころの未来研究センターとこころに関心をもつ多くの方々をつなぐメディアとして育ってゆくことを期待しつつ、創刊のことばといたします。

こころの未来研究センター長 吉川左紀子

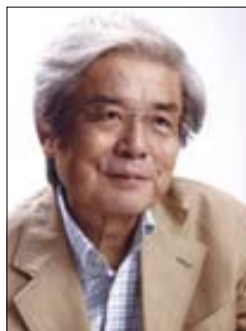
こころの未来  
KOKORO RESEARCH CENTER  
KYOTO UNIVERSITY

2010 vol. 5

目次

創刊のことば		吉川左紀子
01 巻頭言	こころ	養老孟司
02 西島安則先生インタビュー	美と知を楽しむ心	西島安則+吉川左紀子+鎌田東二
11	西島安則先生追悼	
12 研究プロジェクト	〈モノ〉の表情・眼力の実証研究—統一	渡邊克巳
14 研究プロジェクト	近代技術的環境における心性の変容の図像 解釈学的研究	秋丸知貴
16 研究プロジェクト	こころと身体をつなぐメディアとしての味覚研究： 食の「質」をふまえた食教育の検討	荒牧麻子
18 研究プロジェクト	発達障害への心理療法的アプローチ	畑中千紘
20 研究プロジェクト	平安京生態智と癒し空間の比較研究	鎌田東二
22 論考	オペラが描く「こころ」	佐伯順子
26 論考	眠って見る「夢」を遊び楽しむ	高田公理
30 論考	こころと脳	加藤忠史
34 論考	ロボットを通じて考えるこころの未来— 認知発達ロボティクスの挑戦	浅田稔
40 ワークショップ	日本の若者の問題についての心理学的・社会的 考察：日本における外国人研究者からの視点	トゥーツカ・トイボネン+ビナイ・ノラサクンキット+ カール・カッセゴール+マイケル・ジーレンジガー+ 内田由紀子
48 センターの動向	(2010年4月～9月)	
編集後記		

# こころ



養老孟司

## TAKESHI YORO

心という言葉、私は好んで使うことはない。一般によく使われるから、仕方なしに使う。

1つには、意味が多義的なのである。言葉はたいていそうだが、それにしても心という言葉は意味が広すぎるような気がする。「どこにでもいるということは、どこにもいないということだ」。これはセネカの言葉だという。神は遍在する。そういう思想に反論したのかもしれない。

西行の『山家集』のなかにある、「心」を含んだ歌を拾ったことがある。たくさんあったが、見ているうちに、西行が心をいかに強く実在と見ているか、その感覚が伝わってくるような気がした。もはや私は、西行の言葉の世界には住んでいない。

心という代わりに、私は意識と表現する。意識はおそらく仏教由来で、その意味では昔から外来語的な抽象性を持っていたのであろう。般若心経には、無意識界という言葉があったはずである。

もちろんこれは1つの単語ではないかもしれない。でも意と識をつないで使うのは、たいへんもったいなことなのだと思う。コンピュータ的になら、入出力のことだからである。

いまでは昆虫も寝ることがわかってきた。ということは昆虫にも寝ている時間と起きている時間があるということで、起きている間はいわば「意識」があるということになる。それを虫の心といってもいい。虫採りをしていると、たしかに心があるなあと、なんとなく思う。珍しい虫を見つけたら、目を合わせてはいけない。虫屋はそんなことをいう。目が合うと、逃げてしまうのである。よそを見ているフリをして、サッと捕まえる。

心でも意識でも、どちらでもいいか。まあ一般向けに表現するなら心で、専門的な意識かなあ。そんなところで適当にごまかしておくか。歳をとると、万事にそういう解決が多くなるのである。



# 美と知を楽しむ心

西島安則先生  
インタビュー

Yasunori Nishijima

京都大学元総長の西島安則先生は、高分子化学の研究で世界的な評価を受ける一方、京都市立芸術大学学長、京都市産業技術研究所所長なども務められた。先生の「美と知を楽しむ心」はどのようにして生まれ、展開されたのか、お話をうかがった。

聞き手

吉川左紀子 (こころの未来研究センター長)  
Sakiko Yoshikawa

鎌田東二 (こころの未来研究センター教授)  
Toji Kamata



吉川左紀子



鎌田東二



西島安則

## 阪神淡路大震災と多言語FM局

吉川 西島先生、今日は「こころ」というテーマで、先生の思い出に残るエピソードなどお話しいただけるでしょうか。

西島 はい。ひとつは阪神淡路大震災です。あ のとき(1995年1月17日午前5時46分)、神戸の西のほうにゴム工場などがあって、外国人の労働者とその家族の皆さんがたくさん住んでおられた。それが、震災で住んでいるところが潰れてしまって、夜明け前で暗くて何も見えないし、みんな心細い思いだったのです。私の日本人の友達も、夫婦で寝ていたところに上から梁が落ちてきた。2人とも動けないけれども、何とかして互いの指の先でも触りたい。両方から手を伸ばすんですが、どうもがいても1センチも動けなかった。脚は折れたものの、幸い、いのちは助かりました。

私の友達 は日本人ですから言葉の問題はなかったけれども、非常用のラジオなどは用意してなかったから、状況をつかむのに苦労したそうです。ましてや外国人であれば、日ごろ使わない言葉、例えば炊き出し、水の配給、自衛隊がお風呂を用意しました、といったことをいくら日本語で言ったってわからない。それで、私は日本に住む外国人に情報を伝えるための放送があればいいなと考えたんです。

当時は、多言語放送なんてまだ考えられていませんでした、いまではもう当たり前ですが。しかも、英語や中国語ならだれでも考えますが、日本に働きに来ている日系ブラジル人が話すようなポルトガル語なんかの放送はまったくありませんでした。

考えてみると、京都大学、大阪大学、神戸大学、あるいはほかの大学でも、外国から客員教授とか留学生としてたくさん来ておられて、奥さんや子どもさんを連れてきている人も多い。その奥さんや子どもさんた

ちに助けてもらえば、多言語放送ができるんじゃないかと思ったのです。

それで、関西電力の友達といっしょに、多言語FM局をつくろうではないかと呼びかけたところ、賛同者がたくさん集まって設立が決まりました。

みんなで話していると、滋賀県には日系ブラジル人が1万数千人住んでいらっしゃるそうなんです。そこで、スタジオを大阪南港の大阪ワールドトレードセンターに置いて、電波は生駒山の山頂から送信して、大阪府と神戸、京都、大津、奈良まで届くようにしたんです。

放送局の名称は、コミュニケーション(COMMUNICATION)、コラボレーション(COLLABORATION)、アンド、ラヴ(LOVE)、その頭の文字2つずつをとって「FMCO・CO・LO」になりました。

吉川 「FMCO・CO・LO」ですか。

鎌田 それはすばらしい。いいお話ですね。

西島 大部分は大阪の企業が時間を買ってくれて、一切CMは入れないということで放送を開始したんです。するととても評判がよくて、もっとコマ数を増やしてほしいとか、できたら24時間放送してくれとか、いろいろ要望が出てきました。

しかし、みんなのためだと言ってお金を出してもらうのも、非常事態のときはいいけれども、ずっと続けることはできません。そこで、商品名を言わずに、「今の時間は株式会社〇〇の提供によるものです」と、時間を買ってくれた企業名だけを言うことになりました。

## 外国人ボランティア

西島 みんなよくやってくれてましてね。関西電力からは「FMCO・CO・LO」の経営者を出してくれましたし。公共放送は、番組審議会を作って年に何回か報告しな



「FM CO・CO・LO」創設時のスタッフのみなさんと  
ロゴマーク (提供: 関西インターメディア株式会社)

いと政府が許可しません。そこで、梅棹忠夫さんが審議会議長、私が副議長になって一緒にやりました。

私もあまり知らなかったんですが、ディスクジョッキーというのは、やってみると面白いらしい。それで、ボランティアでもやりたいという人がたくさん出てきたんです。

鎌田 いくつかの言語があったんですか。

西島 アジア・太平洋を中心とする14カ国の言語と、英語、ハングル語、中国語です。マレーシア、ベトナム、タイ、スリランカなどアジアの言語は多かったけれども、案外、フランス語とかイタリア語は抜けていたんです(笑)。

吉川 関西には、アジアの人たちが圧倒的に多いんでしょうね。

鎌田 ニュース、報道などは多言語でやって、ディスクジョッキーは日本語でやるんですか。

西島 外国語と日本語と両方ですね。バイリンガルの人が多かったから。ディスクジョッキーは頭がさえていて日本語が美しい人も多くて、中にはNHKに引き抜かれた人もいます(笑)。

タイ出身のある方は、最初の放送で幼稚園の運動会のことを話していました。「みなさん、座布団を持ってきてください」と先生に言われて、その理由がわからなかった。運動会へ行ったら、座布団をずらっと敷物みたいに並べて、その上に座ったり、そこで歌ったり踊ったりする。そういうふうには、子どもを通して、日本のことをいろいろ学んだ、と。ときどき日本人について厳しいことを言ってくれたのもよかったですね。

吉川 ボランティアの人たちは先生とはお知り合いだったんですか。

西島 だれか関係者の知り合いだったかもしれませんが、私の知っている人はいませんでした。みんな関西に住んでいる外国人のボランティアです。そのころは、大学でも、日本にご主人が研究で来たときに、いっしょに来日される家族のフォローはほとんど何もできてい

なかったと思います。

吉川 京大は当時からたくさん外国人の方が来られていましたね。

西島 そうです。京大は対応が非常に早かった。修学院や宇治に外国人教師や留学生のための宿舎をつくりました。

鎌田 西島先生が設置に尽力された国際交流センターもありますね。

## ロゴマークはハート

鎌田 「FM CO・CO・LO」という局名は、西島先生のネーミングですか。

西島 みんなでわいわい話しているうちに出てきたんです。

吉川 震災のころ、日本に住んでいる外国人の人たちは、母国語の放送を聞いて、どれだけ励まされたことかと思います。

西島 来日する歌手のあいだでも知られるようになって、関西に来たら「FM CO・CO・LO」に出演して帰ろうというようなことになってね。スペイン語、ポルトガル語、インドネシア語など、ボランティアの人たちにずいぶん助けてもらいました。

鎌田 私の友達に喜納昌吉という沖縄の音楽家があります。彼は阪神淡路大震災が起きたときに、何かボランティアをしたいと思いついたんです。自分にできることは歌うことなので、とにかく神戸の被災地の公園に行っただけですが、みんなが悲しんでいるときに歌を歌っていいものかと、最初、迷ったのだそうです。ところが、思い切って三線<sup>さんしん</sup>を弾きながら『すべての人の心に花を』などを歌い始めたら、みんな大喜び。自分の歌がこれほど人を励ますのか、普通のコンサートよりもずっとみんなに感動されたと言っていました。

西島 極限状態になったとき、ころは日ごろよりもっと感度が上がって、より純化されるんでしょうね。ものは全部壊れているんだから、しょうもない欲も何

もない。あとはころだけです。そういうところで、ころが洗われる音楽を聞くといいですね。

みんなで集まってわいわい言っているときに、ロゴマークを決めようということになりました。「FM CO・CO・LO」には「LOVE」とついているからハートにしようと言って、ピンク色のハートを描いて、まわりにピッピッと短い線を描き加えた。そうしたら、メンバーの中でも、このマークはちょっと子どもっぽいんじゃないかという人もいましたが、結局、それに決まりました。ハートのマークというのは非常に国際的なんですね。

吉川 そうですね。

鎌田 これはまさにころの未来研究センターのマークのようです。

## 千年前の「心臓」の模型

西島 「ころ」について、もう1つ思い出したことがあります。私が京大総長だった1989年ごろに、日本心臓病学会の学術集会在京都で開かれたので、歓迎の辞を述べに行きました。そのあいさつの中で、「みなさん、時間があったら京都の西のほうにある清涼寺というお寺に行ったらどうですか」とお誘いしました。

清涼寺には靈験あらたかなお釈迦さんの仏像があります。お釈迦さんがインドから旅立たれるときに、像を彫ろうということで、真心を込めて梅檀の香木で彫ったと言われている釈迦像が中国にある。儼然というお坊さんが宋に渡ったとき、それを桜の木で模刻して、986年に日本に持ち帰ったのが清涼寺の釈迦如来像です。

このお釈迦さんは「生身の釈迦」といわれ、見ていて血が通っているような感じがするんです。多くの人にとっても好かれていて、宗教の立派な教義じゃなくて、お釈迦さんがこっちを見てくれはったので救われたとか、そういう人がたくさんいる。私も何度か拝見しに行きましたが、ちょっと艶<sup>つや</sup>があって赤くて、じっと見ていると、木で彫った像とは思えないくらい身近に感じるのです。

その釈迦如来像は、昭和28年に国宝指定のために調査が行われました。そのとき、背中にそれまで一度も開けたことのない蓋<sup>ふた</sup>があって、それを外してみたら、体内に五臓六腑の模型が入っていたんです。

鎌田 今から千年も前に、そんな解剖学的な知識があった。

西島 私も見ましたが、心臓、胃、腸、肝臓、脾臓など、あの時代にもう解剖学的に捉えているんです。五

著作権保護のため  
表示できません

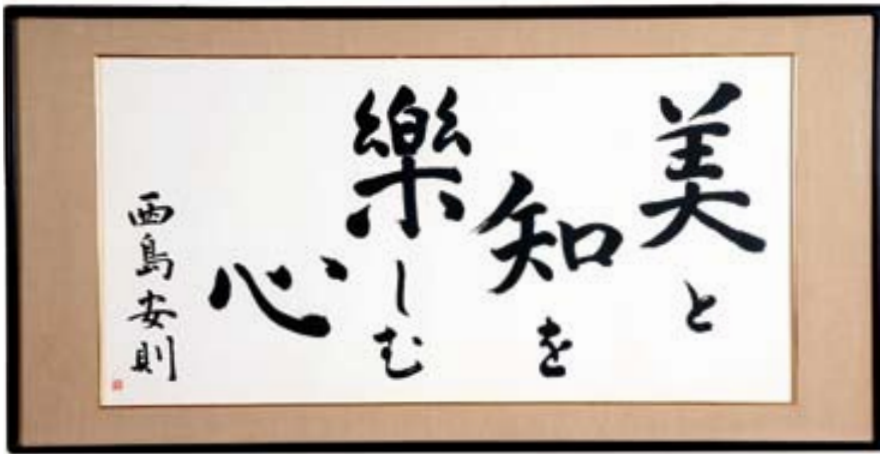


清涼寺の釈迦如来像と体内に入っていた五臓六腑の模型のレプリカ。右上の赤いものが心臓（所蔵：清涼寺）

臓六腑の模型が、絹で縫い合わせた、中に詰め物をして、立体的にできている。心臓はハートに似た形で、真っ赤に染めた絹でできています。

私は先ほどの歓迎のあいさつのときに、心臓は昔から真っ赤だと捉えられていたという話をしたんです。そうしたら、「その寺はどこだ」ということで、学会の公式のツアーではなしに、自然発生的にみんな清涼寺に見に行きました。

学会の人たちはその模型を見て感激してくれました。「心」という字は明らかに「心臓」の形から来ていますが、どうして千年も前に胸のところにハートがあるとわかったのか。ヨーロッパで血液の循環を発見



京大会館に掛けられていた西島先生の書の額(京大会館は2010年7月25日に閉館)



西島兎四朗氏の作品

したのもっとあと、十何世紀ですからね。

鎌田 14～15世紀ぐらいから後でしょうね。16世紀のベサリウスとか、17世紀のウィリアム・ハーベイとか。

西島 ハートが赤だったというのは、記録には載っていないけれども、中国では内臓の腑分けみたいなものがあったんでしょうかね。

鎌田 陰陽五行がそういう説をとっていますね。五臓六腑の「五」は「五色」、陰陽五行の木・火・土・金・水となり、色では青・赤・黄・白・黒で、臓器では肝・心・脾・肺・腎となります。

西島 そのへんになると、古代ギリシャともつながりますね。

吉川 心臓病学会のみなさんは本当に感激したでしょうね。

西島 心臓の研究をしている人は、こころの研究をしていると思っているのかどうかわかりませんが。心臓が大事だということは、たぶん何かあると心臓がドキドキするとか、興奮するとか、一番感じやすいから、そこから来ているのと違いますかね。本当は脳が大事なんだという考え方は、だいぶ後になってから出てきたのではないかと思います。

## 鑄物師の父

鎌田 先生は京都大学の総長を定年退官されたあと、京都市立芸術大学の学長になられました。そのころ、よく色紙に「美と知を楽しむ心」と書かれていたそうですね。

西島 京大総長を辞めるとき、京大会館の事務局長が、大きな和紙を持ってこられました。筆も用意してあるし、墨も磨ってある。ぜひ何か書いてくださいというのです。これは名誉なことやし、京大会館にもずいぶんお世話になったから、書きましょうとお返事し

ました。そのとき、ほとんど無意識に書いたのが「美」、それから「知を楽しむ心」でした。

それを大きな額に入れて、京大会館2階のロビーのところに掛けてあったんです。書家が書かれる字とは違って面白い字やと言われました。褒めてもらっているのかどうかわかりませんが(笑)。

吉川 私もその額を見たことがあります。

鎌田 「美」を最初に持ってこられたのは素晴らしいですね。先生は、芸術に対する関心がずっとおありだったんですか。

西島 そうですね、小さいときから。

鎌田 音楽とか美術とか、どんな芸術ですか。

西島 親父(西島兎四朗氏)が鑄物師だったんです。その影響を受けました。京都の真ん中へん、五条の1筋北に万寿寺通という通りがあって、お寺の道具とかを売っている。親父はそこでいわゆる唐金(青銅)をやっていました。京都は仏像だけでなく、お茶とか生け花とか、いろいろな文化の歴史があるでしょう。だから、お釜や鍋、器、花入れなど、唐金で造ったものの需要があったんです。

私は中京区丸太町に住んでいた子どものときから、いつも親父の職場におりました。たとえば、花瓶を鑄込んで仕上げたあと、焼き肌をつけるために、もういっぺん高温に入れるんです。それから「炭研ぎ」といって、炭に水をつけて表面を研ぐ。炭も、あまり柔らかいのではないし、硬いのもいけない。桐や朴の木の炭で表面をつるつるにして、それから漆を塗ります。漆も独特の深みがあって面白い。それぞれ専門の職人さんがいて、うちに来てもらって5～6人でやっていたんですが、私はそんなようすをいつも横で見ました。

親父は自分の作品といえるものは1年に1回ぐらいしかつくらなかった人なんです。

鎌田 1年に1回だけですか。

西島 うん、いのちをかけてつくるのはね。

鎌田 芸術家肌の方だったんですね。

西島 そうですね、日展にも出品していました。戦時中に、親父のことを伝統的な技法を継承している人だと国が認定することになった。親父は、それからちょっと嫌になったんですね。というのは、国はあちこちのお寺などから金属を集めて、それを流用しないようにハンマーか何かで壊して、「これを材料にしてください」といって持ってきたのです。職人は、銘なんか入ってなくても、ぱっと見たら、昔こういう名人がいて、その人がこれをつくったんやとか、みんなわかる。親父は、自分の技術を高く評価してくれるのはありがたいけれども、だからといって、心から尊敬している大先輩が作った作品を潰して、それで自分の作品をつくることはできんと言てね。

鎌田 それはわかります。先輩に対するリスペクトですね。

西島 そうなんです。結局、伝統的な技法に対する考え方が国のお役人と全然違うんです。それで、びっくりしたけれども、最後は家の蔵の中に大事にしまっていた自分の作品も、お国のためならといって全部供出してしまった。そこで、私はここまで来たらもう親父の仕事は継げないと思って、京都一中（現在の府立洛北高等学校）を卒業したあと、海軍機関学校へ行ったんです。

## 人間・環境学研究科創設

鎌田 それは昭和17～18年ごろですか。

西島 そうです。海軍機関学校は舞鶴にありました。ワシントン海軍軍縮条約か何かで海軍の規模が日本はアメリカの5分の3に決まってしまった。できている戦艦も、それを超えているものは処分をしないとイケない。

海軍機関学校は、せっかくつくったけれども処分しないといけない戦艦などの鉄骨を持ってきて、それで建てたんです。そこでわれわれは、「鉄の重さで戦争をするのと違う。海軍機関学校の教育を通して世界一の海軍になるんだ」ということで、ふつう考える以上に厳しく教育された。また実際、レベルが高かったんです。私は終戦になってから旧京都帝国大学を受験して工学部へ入ったんですが、工学部で習うことはもうおおかた勉強していました。

海軍機関学校はレベルが高いはずで、教官の3分の2ぐらいは京大の若手の優秀な人が来ておられた。先生方は、海軍の学校で働いたら、変なところへ徴用されないですむし、自分の学問の後継者を鍛えるという

喜びもある。そんなことで、いい教育をしてもらいました。

そのころの経験から、大学も今のようにいろいろ分けて、それぞれが専門でやるんじゃないかと、1つの全体として研究・教育すべきだと考えていました。そこで総長になったとき、田中美知太郎さんのお弟子さんで、ギリシャ古典が専門の藤沢令夫先生に会いに行きました。私はもうあと4～5年でここを去るんやけど、今のように、理科系はお金がたくさんある、文科系はないからとか、そんなことを言っているようでは京大もだめになる。一番大事な哲学を中心に置いて、自然科学も社会科学もいっしょになった研究科をつくらうやないかと。藤沢令夫さんも賛同してくれて、2人で何年もかけて議論をしていきました。

そうすると、いわゆる学問のランチを絡み合わすというだけではなしに、結局、人間はなぜ生きるのかというところへつながってくる。そんな議論を経て、藤沢さんは亡くなられたけれども、人間・環境学研究科をつくったんです。

この研究科は、医学部でも、薬学部、農学部、工学部、文学部でも、日本中どこの学生でも受験できる。受け入れるほうも入り口を狭くしない。あとき、よくやってくれたと思うけれども、20数種類の入試問題をつくりました。医学、哲学、社会学から、自然観というのかな、そういう入試問題が全部選択なんです。日本人は、戦争のために学問をするような時代を越えてきたんですから、これからは生きるための大学にしようという思いでした。

鎌田 それが人間・環境学研究科になった。大きな理想ですね。設立の理由がこころの未来研究センターみたいです。

吉川 本当にそうですね。私はずっと、このセンターからみて一番近い感じがするのは人間・環境学研究科だなと思っていたのですが、今の先生のお話をうかがって腑に落ちました。

## 職人の技術

鎌田 幼少期から工学部に入られるころのことに話を戻しますが、先生がお父さんの鋳物師としてのうしろ姿を見られていたときに、ある意味では、技術と芸術と、先生が後に専攻されることになる工学や化学が、全部ミックスしていた。実際の鋳物をつくっていくときに、芸術的要素、技術的要素、工学的要素、いろんなものを感じ取られた。それが、工学や化学のほうへ行かれるひとつのベースになったのでしょうか。

西島 そのとおりです。今のように何でも分けてやる





京都市の岡崎公園にあるゴットフリート・ワグネルの顕彰碑

ようになってから世の中はおかしくなった。坩堝<sup>るつぽ</sup>の中で金属が熔けるのでも、親父が温度を計っているのを見たことがない。炎の色で見ているんでしょうね。そんなに大きな装置ではなく、家の蔵の前のちょっとしたところでやっているようなものですからね。金属をコークスで熔かして、流し込む型のほうも、松炭か何かで真っ赤になるぐらい焼いてある。鑄口から熔けた金属を注ぎ込むのを私も手伝いました。型のほうが十分に温度が高くなかったら、入口のところで金属は固まって入らなくなってしまう。ちょうどマッチングして、隅から隅まで熔けた金属が入るようにしなければいけない。それは型の大きさによっても違う。1人で覗きながら、「さあ、今や」というようなことを言うんです。

鎌田 名人芸ですね。

西島 まあ、技術ってみんなそうでしょう。

明治維新のころ、ウィーン万国博覧会（1873年）などで日本の陶磁器や織物などを出品しました。そのとき、いわゆる見世物的なものではなく、本当に好きな人が「ああ、いいな」と思うようなものを出品しないといかんと言ってくれたのは、1868年に来日したゴットフリート・ワグネル（Gottfried Wagner: 1831-1892）です。京都は彼にもっと恩義を感じてもいいと思うんですけどね。彼は本当に日本の芸術に惚れていたんです。日本がお雇い外国人学者として呼んだのではなくて、自分で長崎へやって来て、有田焼とか萩焼とか、各地の焼き物を見ながら京都へ来ました。

私は京都市産業技術研究所の所長をしています、ここにワグネルの時代から続いている釉薬<sup>うわぐすり</sup>の研究資料があります。これはとても貴重なものです。

その中に、釉薬の見本が何千枚とあるんです。こんな宝みたいなものは隠さないで公開しようということになって、数年前から研究所のホールで毎年入れ替えながら一部を展示するようにしました。見本の横に、これはどういう元素が混ざっているか、何度で焼くか

といったデータも置いて見てもらっています。

今年の初めごろまで、京都市産業技術研究所に行くと、音が「コンコン、コンコン」と響いていました。あるとき、何やろうなと思って音のする部屋に行ったら、職員の方が高さ6cmぐらいの金属製の三角錐の中に原料をたたいて詰めている。焼き物を焼くとき、その熱量を計るゼーゲル<sup>コン</sup>錐をつくっているんです。これは1886年にドイツのゼーゲル（Hermann August Seger: 1839-1893）が考案したもので、それが日本に伝わって、ワグネルなんか改良した。ちょっとずつ原料の混ぜ方が違うゼーゲル錐を窯の中の棚の上に3本とか4本並べておく。たとえば4本のうち3本が熱で融けて立てなくなって1本は立っていると、それで作品の焼け具合がわかるわけです。今まで、日本中の焼き物の窯からうちの研究所が注文を受けて造っていました。でも、このごろは窯や温度計がよくなり、ゼーゲル錐の必要性も薄れてきたので、今年で製造をやめることになりました。

京都は清水焼や京焼やと言うけれども、九州から瀬戸内海、あるいは日本海を見ても、それぞれの窯にはその土地の粘土がある。でも京都は、これが京都の焼き物の始祖やという粘土はありません。だから、京都の古い焼き物屋さんでも、みんな家の床下に日本中から買い溜めた粘土が置いてあるんです。

鎌田 そんな話を聞くと、西島先生が京大の総長から京都市立芸大の学長になられたこともうなずけます。あそこには陶芸科があって、釉薬などを研究している人たちもいるし、陶芸を創作している人たちもいます。そういう人たちと西島先生の関心や研究は、いろいろ接点があったんですね。

西島 私は芸術的な才能はないけれども、みんなが何を思っているか、なんで悩んでいるのかというのはだいたい想像がつくんです。

鎌田 芸術家の悩みがわかる、ところが伝わってくる。人間・環境学研究科をつくるときにも、藤沢先生と何年間も哲学問答のような対話をされた。

西島 藤沢さんとの関係で、田中美知太郎さんの本も読みました。私は京都学派とか、そういう人たちのことはあまり知らないのですが、藤沢さんとその先生の田中美知太郎さんなどを見ると、やっぱり学問というのは二代も三代も続いてだんだん磨きがかかってくるのだなと思いました。

吉川 西島先生も、大学では高分子化学を研究されましたが、その根っこには、優れた鑄物師だったお父さんから受け継いだ何かがあったのではないのでしょうか。

## 高分子の世界へ

西島 百年ぐらい前に、高分子は存在する、いや、そんなバカなものはないという議論が最高潮に達したのですが、両方とも譲らない。本当の化学では、元素とか分子に分解できて、それから反応させて物をつくって初めて存在が証明できる。高分子といわれているものは、エックス線をかけても結晶も見えないし何もわからないではないか。そんなものが存在すると考えるのはどうかしているのと違うかというわけです。そういうことで、高分子に対する批判は非常に激しかった。

その前にブラウン運動の発見がありました。スコットランドのロバート・ブラウン (Robert Brown : 1773-1858) という植物学者が植物の性について研究を進めていました。さまざまな花の花粉を集めてきて、その花粉を壊すと微細な粒子が出てくる。それを顕微鏡で見たら、さかんに運動している。ブラウンは最初、これは花粉の粒子が生きている証拠だと考えました。それなら枯死した植物の花粉ではどうかと調べて観察したところ、まったく同じように激しく動き回る。では鉱物の粉末、火山灰ではどうかと次々に調べた結果、生物・無生物を問わず、すべての微粒子が水中で激しく運動していることを確かめたのです。それで、彼は「花粉の中の粒子について、1827年の6月、

7月、8月に行った顕微鏡観察——生物と無生物の中にある活動的分子の一般的存在について」という長いタイトルの論文を発表しました。この観察には多くの科学者が関心を寄せ、「ブラウン運動」と呼ばれて研究されていきます。私はこのブラウン運動からスタートしたんです。

アインシュタイン (Albert Einstein : 1879-1955) は1905年に「ブラウン運動の理論」という論文を書きました。あれを読んだら、面白い。この微粒子の運動は、液体の分子が熱運動によって粒子に不規則に衝突することよるとして、熱の分子運動論による理論をたてたんです。アインシュタインは超然としているところがあって、これが本当にわかったら、熱とは何かがわかるというようなことを書いている。

私はそれを読んで、じゃ、高分子にブラウン運動はあるかと考えた。そして、分子が巨大な高分子は、全

体としてはでんと構えているけれども中は動いているということ、卒業論文が何かで初めて書いたんです。そうしたら、ブルックリン工科大学のヘルマン・マーク (Herman Mark : 1895-1992) 教授が、面白い論文だから一緒に研究しないかと誘ってくれました。それで、1953年に第1回フルブライト留学生としてヘルマン・マークのいるニューヨークのブルックリンへ行ったんです。

鎌田 学生時代にそういう新しい発見とか研究分野を切り拓かれていたのですね。

## 国際色豊かな研究環境

西島 ふつうニューヨークといったらハドソン川とイースト川にはさまれたマンハッタンを思い浮かべますが、その南側にブルックリンがあります。古い街の一番北の端にブルックリンハイツという地域があって、そこにブルックリン工科大学高分子研究所がありました。初めて着いたとき、そこからイースト川に架かるブルックリン橋が見えて、その向こうにニュー

ヨークの摩天楼がある。これはものすごく景色のええところやなと思って、そこで下宿を始めました。

鎌田 日本人はなかなか海外に行く機会がなかった時期ですね。

西島 いまは1ドルが80何円と言っていますが、当時は闇だと400円

でもドルは買えなかった。とにかく、お金がなくてね。ところが、「ベルリッツ」という英語学校がニューヨークにあって、だれかが頼んでくれたんだろうと思うけれども、日本が戦争中に国内でやっていた科学特許を英訳したいと言ってきた。ヨーロッパやアメリカなかだと、特許の書類は研究論文のように書かれていて、それを読めばちゃんと納得できるのですが、日本の特許はそんなことはなくて、読んでもよくわからないように書いてあるんです。

だから、それを英語に訳せと言われても、日本語が読める人間でもよくわからない。しかし、よく読んでみると、化学に関する話で、しかも、合成繊維とか、デンプン、タンパク質とか、身近にそれを研究している人も知っているの、そんな人たちに相談しながら、英訳して注をいっぱいつけて提出しました。そうしたらえらく評判がよくて、もう生活費は全然心配しなく



でもよくなった。翻訳して、晩にタイプを打って、朝、投函すると、その次の日ぐらいに小切手が来るようになったんです。

毎日ブルックリン橋を見ながら、同じ年ぐらいのイタリア人とフランス人と日本人とドイツ人とで、「お金ができたなら1軒の家を借りて一緒に住もうや」と言っていたので、みんなで住むことになりました。

鎌田 みんな研究者ですか。国際色豊かで楽しいですね。

吉川 今の時代に、そういう環境をもう一度つくらないといけませんね。

西島 そうなんです。あのころは、若い者が研究しようと思ったって、実験器具も何もなかったんだから。

鎌田 そういうハングリーさも必要ですね。今はもう何でも全部そろっているような時代ですが……。

西島 それから、当時はアメリカ人が世界のお役に立つのを誇りに思っていた。第2次世界大戦のとき、自分たちがめっちゃくちゃやったんだからね。ヨーロッパでも絨毯爆撃なんかやった。ナチスが、ドイツ人、フランス人、イタリア人の、いわゆる近代をつくった頭脳を押さえようとしたから、みんなアメリカへ逃げていきました。

鎌田 50年代ぐらいは、アメリカは贖罪意識というか、大きい戦争をした後の反省みたいなものが強くて、そういう時代の持っている、ある種、貧しいけれどもここはピュアで、助け合っていきましょうというようなところがあったんでしょうね。

西島 全部の国民が贖罪意識を持っていたわけではないと思うけれども、世の中に対して、もっと建設的なことをしないとみんなだめになってしまったやないかということから、自然科学の研究者をずいぶん歓迎してくれたんです。

吉川 アメリカの一番いい時代でしょうね。

西島 そうですね。そのころは、アメリカ人がいまよりもっと清らかな気持ちを持っていたと思います。アメリカについて一般的には言えませんが、少なくとも50年代のニューヨークは、ミュージカルにしても、いいものがたくさんできています。

鎌田 私は西島先生のお話をお聞きしながら、宮沢賢治の精神や活動を思い浮かべていました。宮沢賢治は、『農民芸術概論綱要』の中で、「近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直観の一致に於て論じたい」と書いていますが、芸術と宗教と科学は一体のものとして捉えなければいけないと考えていたと思うんです。それに非常に近いなと思います。



イースト川に架かるブルックリン橋(©2008 Koichi Miyase)

西島 宮沢賢治といえば、私が最初に京都市立芸大の学長をしていたとき、フランスの国立高等装飾美術学校の学生と、京都市立芸大の美術学部デザイン科の学生がいっしょになって、宮沢賢治の「注文の多い料理店」とか「なめとこ山の熊」などの絵本を作ったことがあるんです。フランスの学生が原画を制作し、京都市立芸大の学生が本の装丁デザインを手がけるということでやったら、とてもいいセンスのものができました。さすがに、感性と知性がひとつになって、新しい時代を拓こうとする若者の心は素晴らしいと思いましたね。

その次は、京都市立芸大の学生がフランスの寓話作家ラ・フォンテーヌの作品をもとにして原画を制作し、フランスの学生が装丁デザインをするという企画も行われました。この原画とブックデザインをセットにして、京都市立芸術大学学生会館ホール、京都芸術センター、福井市美術館、花巻の宮沢賢治記念イーハトーブ館、それからパリやイタリアのボローニャなどで展覧会が開かれて、大好評でした。

それを実際に印刷して刊行しようと言ったのですが、財政が厳しくて、そこまではできませんでした。本当はそういうことがいちばん大切なんですけどね。いつか実現させたいものです。

鎌田 それはぜひ実現させてほしいですね。

今日は「FM CO・CO・LO」から高分子化学まで、こころの未来にとってヒントになるお話をたくさんいただきました。

吉川 本当にいいお話をたくさんうかがうことができました。ありがとうございました。

(2010年7月22日、こころの未来研究センターにて。インタビュー写真：坂井保夫)



西島安則先生は、2010年9月3日、虚血性心疾患により83歳で  
ご逝去されました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

#### 西島安則先生ご略歴

- 1926年 11月17日、京都府生まれ
- 1944年 京都一中（洛北高校の前身）5年在学中に海軍  
機関学校入学
- 1946年 京都帝国大学工学部入学
- 1949年 京都大学卒業後、同大学大学院特別研究生とな  
る（～1954年）
- 1953年 ブルックリン工科大学高分子研究所留学（～  
1956年）
- 1962年 京都大学工学博士
- 1959年 京都大学講師
- 1962年 ブルックリン工科大学客員教授
- 1963年 京都大学工学部助教授
- 1969年 京都大学工学部教授
- 1975年 京都大学学生部長
- 1979年 京都大学工学部学部長
- 1985年 京都大学総長（～1991年）
- 1991年 京都大学総長任期満了退官、同大学名誉教授
- 1992年 京都市大学21プラン策定委員会委員長（～1993  
年）、日本ユネスコ国内委員会委員長（～1995年）
- 1993年 日本化学会会長（～1994年）、日本WHO協会  
会長（～2006年）
- 1994年 日本学術会議副会長（～1997年）
- 1996年 財団法人京都府国際センター理事長
- 1998年 京都市立芸術大学学長（～2004年）
- 2003年 京都市産業技術研究所所長
- 2004年 京都市立芸術大学学長任期満了退官、同大学名  
誉教授
- 2010年 京都市立芸術大学学長（再任）
- 2010年 9月3日、逝去

#### 主な学位、名誉職、受賞

工学博士（京都大学）。京都大学名誉教授、京都市立芸術

大学名誉教授、ポリテニク大学（元ブルックリン工科大  
学）名誉理学博士、サセックス大学名誉理学博士、トロ  
ント大学名誉理学博士、シエナ科学アカデミー名誉会員、日  
本化学会名誉会員、高分子学会名誉会員など。英国化学工  
業会よりプレジデント・メダル受賞。2004年、瑞宝大  
章受章。

#### 追悼文

西島先生の訃報が届いたのは、インタビューからわずか  
1月半後のことでした。

西島先生のご専門は高分子化学で、光物理・光化学の分  
野を開拓し、世界的な評価を受けられました。京都大学総  
長のときには、国際交流センターや留学生センターを設置  
し、京都大学名誉博士制度を発足させるなどして大学の国  
際化や学術交流を図られました。また、人間・環境学研究  
科の開設による大学院と学部の再編整備など教育研究の充  
実にも力を入れ、新キャンパス構想の立案にも尽力され  
ました（現在、桂キャンパスとして実現しています）。ま  
た、日本の大学教育制度の問題にも積極的に取り組まれ、  
1987年には国立大学協会入試改善特別委員会委員長とし  
て、共通一次試験に代わる新テスト（現・大学入試センタ  
ー試験）案をまとめるなど、国立大学の入試制度改革にも  
大きく貢献されました。

今年の1月、京大新年名刺交換会の広い会場で西島先生  
にご挨拶したとき、思い切って『このころの未来』でのイン  
タビューのお願いをしました。「『このころの未来』？ それ  
は何ですか？」と問われるだろうという予想に反して、に  
こっと微笑まれた先生は、「ああ、喜んでお引き受けしま  
すよ。いつも送っていただいてありがとう」。初対面の緊  
張が、さっと消える思いがした一瞬でした。

今、インタビューを読み返してみると、先生が話してく  
ださった「このころ」のエピソードは、人と人がつながり、  
理解し合うことのすばらしさを教えてくれるものだったこ  
とに、胸を打たれます。1950年代、かつて敵国だったア  
メリカに渡り、さまざまな国籍の人たちとともに勉学に励  
んだ若かりし先生の経験が、エピソードのひとつひとつに  
裏打ちされています。そしてお父様の職人としての優れた  
技と気概を、楽しそうに語られる先生の姿は、「美と知を  
楽しむ心」そのもので、同席した鎌田教授、編集の原さん  
ともども、深い感銘を受けました。研究・教育に携わる者  
がもつべき心がまえ、そして高い理想に向かって歩むこと  
の大切さ。これは、後に続く私たちへの最後のメッセージ  
となりました。先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

吉川左紀子

# 〈モノ〉の表情・眼力の実証研究 ― 続 ―

渡邊克巳 (東京大学先端科学技術研究センター准教授)  
Katsumi Watanabe

## 千手観音の評定実験

前々号の研究プロジェクト紹介では、「〈モノ〉にこころを感じるのはなぜか？」という疑問に至った経緯と、それを実証的に調べるために、京都に多数ある仏像に注目したことを述べた。また、仏像の表情・視線・姿勢の多様性や、仏像写真の撮影の角度・照明の違いなどといった、実験心理学の視覚刺激としての統制のなさを避けるために、新たに蓮華王院三十三間堂の千体千手観音像の画像を、均一の距離・照明のもとで撮影したところまでを紹介した。ある程度満足できる統制がなされた刺激があれば、あとは純粋に労力と時間の問題である。有名な千体千手観音像たちは、どのように認知されるだろうか？

評定実験には94名の被験者が参加した。仏像の画像はランダムな順

番で呈示され、それぞれの被験者は画像を見ながら、①仏像が男性と女性のどちらに見えるか、②仏像が何歳に見えるか(0~100歳の範囲で推定)、③仏像の視線をどれくらい感じるか(どれくらい見られていると感じるか:5件法)の3項目について評定を行った。この一般的な評定とは別に、表情・魅力度に関する評定実験も行い、そこでは70名の被験者が①仏像が「怒り」「恐れ」「悲しみ」「喜び」「驚き」「嫌悪」の6つの基本表情をどれくらい表しているか(5件法)、②この仏像がどれくらい好きか(9件法)を答えた(図1)。

## 表情の評定結果

紙面の関係で実験結果をすべて説明できないので、ここではその中のいくつかを簡単にまとめる。まず、三十三間堂の千体千手観音の顔画像は、平均して「40歳前後の男性」



図2 最も典型的な仏像(評定年齢=40.7歳;男性=95.7%)

と判断される傾向があり、この傾向は比較的安定している。多くの仏像が30~50歳の仏陀を象ろうとしたものであることを考えると、この結果は仏像に転写されたイメージが時代を超えて共有されている証左とすることもできる(図2)。また、これらの仏像群は「悲しみ」「軽蔑」「怒り」「喜び」「恐れ」「驚き」の順番で表情が評定されやすい。ただし、評定値に関してはどれかひとつの表情だけが突出しているわけではなく、複数の表情が同時に存在していること(表情の曖昧さ)が見てとれる(図3)。

興味深いことに、撮影角度が評定値にさまざまな影響を与えることも明らかになった。同一の仏像を撮影した画像であるにもかかわらず、斜め下(14度)から撮影した顔は、正面から撮影した顔に比べて、「より歳をとって」「より男性的に」「よりこちらを見つめているように」「より魅力的でなく」「より怒っているように」「より蔑んでいるように」見える(図3:表情以外のデータは

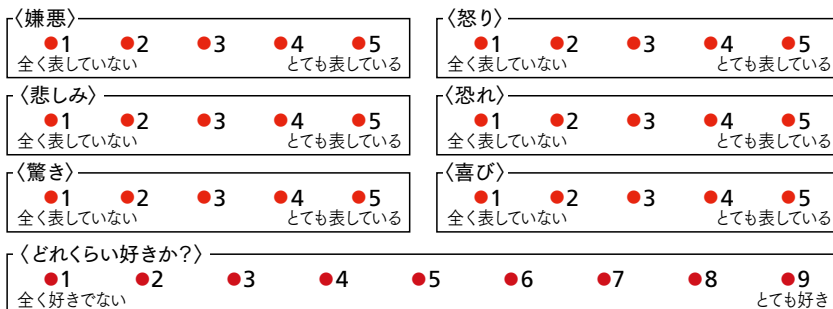


図1 評定実験の画面の例(表情・魅力度評定)(本稿の写真すべて撮影:三島淳)

Ariga et al. 2010等を参照)。これらの結果は、観察角度が同一の〈モノ〉を見る場合にも影響を及ぼしていることを示している。

さらに、それぞれの評定値の関係性を分析すると、仏像の魅力度を評定する際には基本的に「幸せ」と「怒り」の表情がプラスに働くが、それに加えて観察者が女性の場合には「悲しみ」がプラスの影響、観察者が男性の場合には「軽蔑」と「年齢」がマイナスの影響を持っていることなどが分かった(図4)。「幸せ」以外にも「怒り」の表情が仏像の魅力度を上げることあるというのは、新しい発見であるとともに、多くの仏像ファン(?)の納得の行くところでもあろう。

### 観察角度で見え方変わる

現在までに得られた成果は、基本的には実験心理学の立場から〈モノ〉(仏像)の表情・視線の認知を調査したものであり、心理実験やその発展としての生理反応の計測等は今後とも着実に進めていく予定である。加えて、こころの未来研究センターというクロストークの場において、研究の裾野をより広いものにしていく



図5 左:主に男性に好かれる仏像。中:どちらにも好かれる仏像。右:主に女性に好かれる仏像

ことも重要と考えている。1つの方向性は、仏像を左右の角度や陰影を強調することなく、正面から高い精度で撮影した画像データベースの詳細な画像解析である。これらの画像は本プロジェクトに限り使用許可を得たものであり、仏像の物理的な微細構造や特徴を探る上で貴重なものとなる。もう1つは、〈モノ〉の表情とヒトの表情の共通点・相違点を探る研究である。本研究では、同じ仏像を観察する場合でも、観察角度によって見え方が変わる可能性が示された。それでは人間の顔でも斜め下から観察すると「年配の魅力でない男性的が怒って(あるいは軽蔑して)こちらを見つめている」ように見えるのだろうか? だとしたらどうして? ヒトの顔を左右に回転させたときの認知への影響を調べるものはいくつか存在するが、顔の

上下回転や上下位置を考慮した研究は少ない。本研究のように仏像というドメスティックな〈モノ〉の表情研究が、本家本元であるヒトの顔研究につながることを期待している。

本プロジェクトは、仏像等に代表される〈モノ〉に転写したものととしての表情・視線等を、実証的に調査することを目的とした分野融合的なものである。本研究プロジェクトに限らず、こころの未来研究センターでの研究は、学術的な成果に加え、異分野間のインタラクションやネットワークの形成などの uncountable なものを常に志向するものと理解している。今後も、今回の成果をもとに、〈モノ〉に転写された表情・視線・姿勢などの実証的な研究を、「こころ」というキーワードを中心に置きながらの異分野融合(あるいは再融合、あるいは戦略的拡散)を維持して研究を進めていければと考えている。

#### 本研究に関する発表等

吉川左紀子 (2010/9/20) 顔知覚への多面的アプローチ, 日本心理学会 (シンポジウム), 大阪大学.

Ariga, A., Kitamura-Suzuki, M., Watanabe, K., & Yoshikawa, S. (2010) Perceiving the faces of Buddha statues: On the relation with viewpoint and affective evaluation. Proceedings of the Kansei Engineering and Emotion Research International Conference, 766-773. 吉川左紀子・有賀敦紀・北村(鈴木)美穂・渡邊克巳 (2009/8/27) 仏像の顔の認知: 眼が合うことの影響, 日本心理学会, 立命館大学.

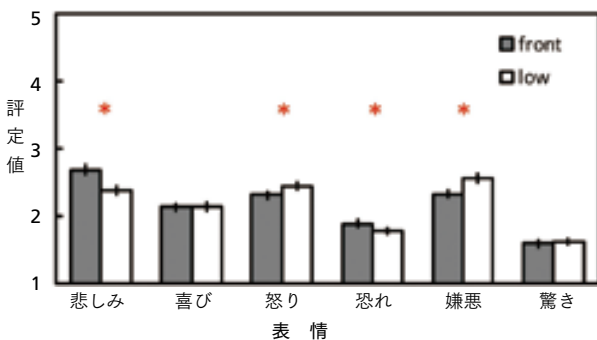


図3 仏像の表情評定 front=正面、low=斜め下14度。\*は有為な差が見られたところ。



図4 仏像の魅力度に貢献する要因

上下回転や上下位置を考慮した研究は少ない。本研究のように仏像というドメスティックな〈モノ〉の表情研究が、本家本元であるヒトの顔研究につながることを期待している。

仏像の顔の魅力度を決める因子が、男性と女性で異なるかもしれないことは既に述べた(図5)。そこで、個人差という観点

# 近代技術的環境における心性の変容の 図像解釈学的研究

秋丸知貴 (日図デザイン博物館学芸員)

Tomoki Akimaru

## 図像解釈学とは何か？

一般に、動物は、それぞれ種に固有の感受器官と反応器官が構成する、固定的な「環境世界」(ヤーコプ・フォン・ユクスキュル)に閉じ込められている。これに対し、本能が壊れた「欠陥動物」(アーノルト・ゲーレン)である人間は、環境「世界内存在」(マルティン・ハイデッガー)であるとともに、環境「世界開放性」(マックス・シェラー)も有している。

エルンスト・カッシーラーは、この世界開放性の鍵を「象徴形式」と見る。つまり、人間は、感受系と反応系の間象徴系を介在させ、「対象の代理」ではなく「対象についての概念の乗物」(スザンヌ・ランガー)として、抽象的・精神的内容を具体的・感性的形式で表現する、象徴形式を能動的に形成することにより、自然から自由になると同時に自然を制御する。

そして、この象徴形式の中でも、言語的「イデア」に先行する、図像的「アイコン」(ハーバート・リード)としての造形芸術、特に絵画こそは、最初に外界と内面を調整し、認識と行為を調和させ、環境への適応を達成させる、人間文化の最も基礎的で根源的な象徴形式である。

これを受けて、同一の文化圏におけるさまざまな文化事象との照合を通じて、可視的な具現的・感性的記号の造形と画題に、それを創出した時代・社会に通底する不可視的な心性的・精神的意味内容を解釈す

る美学・美術史学方法論が、エルヴィン・パノフスキーが開拓した、「<sup>イコノロジー</sup>図像解釈学」である。

## 近代技術的環境における 心性の変容——アウラの凋落

本研究プロジェクトは、この図像解釈学を近代西洋美術に適用し、その本質的特性である抽象主義に、近代技術的環境における心性の変容の反映を考察する。

まず、ヴァルター・ベンヤミンの「アウラ」は、原著に即して分析すれば、同一の時間・空間上に共存する主体と客体の相互作用により相互に生じる変化、および相互に宿るその時間的蓄積と読解できる。また、そうしたアウラを典型的に生み出す、主体が客体と同一の時空間上で原物的・直接的・集中的・五感的に相互作用している関係を「アウラの関係」、その場合の主体の客体に対する知覚を「アウラ的知覚」と定義できる。

基本的に、生来的身体と本来的自然に基づく「自然的環境」(ジョルジュ・フリードマン)では、技術は肉体の連続的延長であり、動力は天然自然力に依存しているため、人間は環境に物理的に内包され織り込まれていた。したがって、自然的環境では、一般的に、人間と外界の関係は密接的で沈潜在的なアウラ的関係であり、その知覚は持続的で充実的なアウラ的知覚であった。

そして、このアウラ的知覚を必須的前提として発達したのが、伝統西洋美術の根本的特徴である、自然主

義的なルネサンス的リアリズムである。なぜならば、その特質である緻密で具象的な再現描写には、対象との濃密で没入的な「感情移入」(ヴィルヘルム・ヴォリンガー)的相互関与が経験上不可欠だからである。

これに対し、日常生活のさまざまな場面で、主体と客体の間に「有機的自然の限界からの解放」(ヴェルナー・ゾンバルト)を招く各種の「近代技術」が介入すると、そうした主客の自然な心身の相互交流は現実的に阻害され、主体の「感覚比率」(マーシャル・マクルーハン)は捨象的に変更され始める。その結果、「近代技術的環境」では、主体には、アウラ的関係が十全に成立していない「脱アウラの関係」による「脱アウラ的知覚」が発生することになる。

そして、そうしたアウラ的知覚の衰退につれて、徐々に絵画においては、従来の主流であったルネサンス的リアリズムは妥当性を喪失し、動的・間接的・二次元的・抽象的な近代技術的環境に象徴的に適応することになる。すなわち、「アウラの凋落」(ヴァルター・ベンヤミン)と近代西洋美術における抽象主義は、軌を一にする現象である。

## 抽象絵画と近代技術—— こころの未来研究の一事例として

これらの過程は、「印象派と大都市群集」「セザンヌと蒸気鉄道」「フォーヴィスムと自動車」「抽象絵画と飛行機」「『象徴形式』としてのキュビスム」「抽象絵画と近代照明」

「抽象絵画と写真」等として主題化できる。

まず、蒸気機関による商工業・運輸交通の加速的大量化を背景に台頭する大都市群集では、大勢が足早かつ無関心に行き交うので、次第に個々の通行人は、実体を欠く単なる刹那的な視覚印象に過ぎなくなり、やがてそれら全体は、絶え間なく変化し続ける万華鏡的パノラマと化する。この大都市群集による、静態的具象性の希薄な流動的・疎外的な脱アウラの知覚を手法化したのが、印象派の斑点描法である（図1）。

また、蒸気機関と線路の結合による蒸気鉄道の車窓風景では、その脱自然的な速度と運動により、瞬間的刺激が増加し、大都市群集と類似する知覚変容が生起するとともに、さらにさまざまな視覚的歪曲が加味される。この蒸気鉄道による脱アウラの知覚を、一種の「感覚」として「実現」しようとしたのが、後印象派のポール・セザンヌと考えられる（図2）。

さらに、蒸気鉄道では、乗客の視覚はまだ平行的・受動的であるのに対し、自動車では、運転手の視覚はより前進的・能動的であり、その脱自然的な速力と駆動により、フロントガラスに映る事物は、触覚の減退と視覚の突出とともに、色も形も強烈に激動化する。この自動車による脱アウラの知覚を絵画化したのが、フォーヴィスムと解釈できる（図3）。

そして、これらの脱自然的な地上の水平運動に、文字通り離陸的な空中の垂直運動を付加する飛行機は、飛翔の心身解放によりさらに視覚を純粹化するとともに、高度上昇による地表の抽象化をもたらす。この飛行機による脱アウラの知覚も、抽象絵画の先駆者たちに大きく影響している。

また、こうした蒸気鉄道・自動車・飛行機等の移動機械は、その脱自然

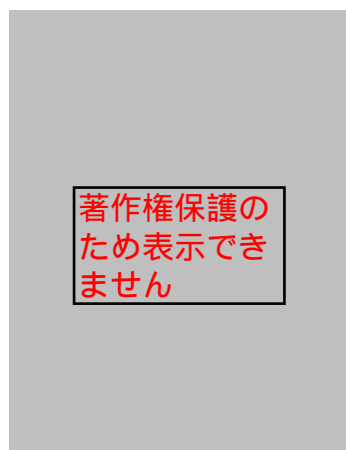


図1 クロード・モネ《カピュシーヌ大通り》1873年 油彩

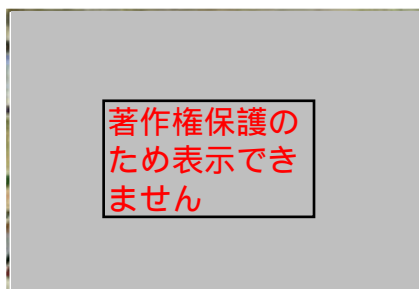


図3 アンリ・マティス《フロントガラス》1917年 油彩 ©2010 Succession H. Matisse / SPDA, Tokyo

的な急速的物品移動により、理念的に、あらゆる空間的遠隔地を時間的近接地と意識させ、旧来の自然で固定的な時空間概念を崩壊させる。また、電話、無線、X線、蓄音機、ラジオ、写真、映画等の伝達機械も、その脱自然的な超越的情報伝達により、想念的に、あらゆる個別的事象を臨在化させ、古来の自然で不変的な時空間概念を瓦解させる。こうした近代技術による、観念上の平面的・一覽的・モザイク的・相互貫入的な脱アウラの知覚を象徴化したのが、キュビズムと理解できる（図4）。

これに加えて、ガラス建築や人造光は、その一様で強力な照明により屋内から陰翳を駆逐し、天然の自然な形態感覚、立体感覚、空間感覚、時間感覚を攪乱するとともに、視覚的な感覚刺激を増強する。こうした近代照明による脱アウラの知覚も、抽象絵画の開拓者たちに広く反映している。

そして、写真は、被写体の外見のみを感光的に転写することで、写

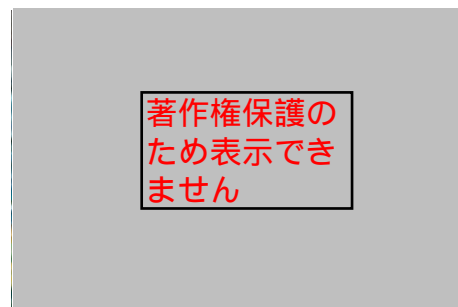


図2 ポール・セザンヌ《サント・ヴィクトワール山と大松》1887年頃 油彩

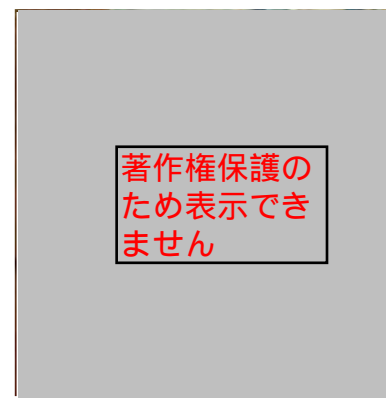


図4 パブロ・ピカソ《アヴィニョンの娘達》1907年 油彩 ©2010 - Succession Pablo Picasso - SPDA (JAPAN)

像から実物的要素を剥落させるとともに、観賞者と被写体を決して同一の時空間上で相互交流させないことで、情動的な感情移入も減衰させる。こうした、あらゆる事物を単なる形と色という自律的・非対象的な抽象模様に変貌させ、傍観者の感受性も涵養する、写真による脱アウラの知覚もまた、抽象絵画の推進者たちに深く感化を及ぼしている。

## 結論と展望

以上のように、近代絵画における抽象主義を促進した実際的・絶対的要素の1つが、近代技術によるアウラの凋落であると指摘できる。

本研究プロジェクトは、こうした近代技術的環境における心性の変容の図像解釈学的研究を通じて、「近代」のプラス面とマイナス面を批判的に検証するとともに、こころの未来研究における美学・美術史学領域の可能性を多角的に模索したいと考えている。



# こころと身体をつなぐメディアとしての味覚研究： 食の「質」をふまえた食教育の検討

荒牧麻子 (管理栄養士、女子栄養大学非常勤講師)  
Asako Aramaki

## はじめに

長々とした研究課題をご覧いただき、「何を」しようとしているチームなのかをすぐに連想いただくのは無理であろう。しかし、「食育」を解剖しようとしていると申したら、少しは可視化された一部を思い浮かべていただけるかもしれないと思う。

平成17年(2005)6月に成立した「食育基本法」には「子供たちが健全な心と体を培い、未来や国際社会に向かって……(略)」とあり、その基本方針のもと、地域、教育現場、家庭に向けた数々の試みが実用化されてきている。しかし、具体的に食の何をどのように子どもたちに教えることが適切なのか、特に「食とこころ」についてはその根拠を十分に議論されないまま今日に至っていると感じている。そのことへの問いを抛り所にし、大石高典さん(センター特定研究員)を筆頭に gourmand( gourmand) な研究者が集った末誕生したのが今の研究チームである。

研究の進め方については、吉川左紀子センター長、鎌田東二教授、山極寿一理学研究科教授、仏味覚研究所 J.Puisais 博士らのご教示をいただきつつ、年数回にわたり京都・東京・篠山で研究会を開催、2年目となる今年は篠山での合宿とフランスの研究者交流会開催も予定されている。

## 京大生と味覚教育

公募連携研究申請に至ったきっかけは、筆者がここ数年関心を寄せて

いる、EU諸国で8~10歳を対象として長年実践されてきている「味覚教育」がある。一口で説明し紹介することに常々苦勞しているが、フランス語では LE GOÛT、和訳すると「味覚」となる言葉、多くの人は美味しさの形容や味の味覚などという使い方を思い浮かべるであろう。実は、食・味わいの愉しみというような意味が込められているのだが、適切な表現を見つけ出せないまま今日に至っている。

すなわち味覚教育はその方法を学ぶあるいは教授することであるが、具体的な説明はフランスの小学校と保育園で収録した映像と邦訳版著作を紹介し言葉で補足するとともに、味覚授業を実際に体験して理解を深めているのが現状である。

異国で30数年にわたり実施されている教育実践活動の中にも前述の問いへのヒントがあるような気配を感じている。これらに携わる日仏の関係者や学校と平成15年(2003)から毎年交流を続けてもいる。現在、筆者は食物・栄養・調理・外食産業関係の学生に、デファクトスタンダードと化した「フードコーディネーター」と呼ぶ民間の食資格取得養成講座カリキュラムとして味覚教育と味覚授業を実施している。

一方、京都大学でも印象深く興味の持てる企画が実施された。平成20年(2008)12月に京都の日本料理アカデミーという料亭料理人・経営者の団体などとの協働による学生向け講座が組まれた。テーマ「本物のダシを味わうことは教養である」



図1 京都新聞掲載記事(2008年12月16日朝刊)



図2 フランスの幼稚園の味覚授業風景



図3 ダシに欠かせない「かつ」を節

との呼びかけに多くの学生が集まった。内容は、京料理の料理人によるダシの味わいに関する短い講義、料理人による料亭のダシの引きかた体験で、講義と実演・実習企画である。京都の一流料亭の料理人が作る吸い物を無料で味わえるまたとない機会であった。それぞれの名店で使われている金蒔絵の吸い物椀に、逸品と称されるダシの食材といい、まさにすべてにわたって「極上」を追求したひと時、「京大版味覚の授業」と受け止めた。

### 食の現状「食べることを問う」

心理学を1つの核としたこの研究センターに、人を対象にしているにせよ、異分野の研究者が集い情報交換をするには、前菜的と言うか、本題に向かう前に、浅いながらも食育の歴史的な経緯を整理する必要性があると思う、旧知の横浜国立大学教育人間科学部教授であり、同大付属小学校校長を務められている金子佳代子氏に、食育基本法の成立背景となった教育現場における「食教育・生活学習」の現状報告をお願いした。ここでは、嗜好の満足、共食、安全、安心、衛生、食文化、環境、経済性、簡便性、ファッション性など



図4 研究のきっかけとなった山極寿一『サルはなにを食べてヒトになったか』(女子栄養大学出版部)

食にかかわるいくつかのキーワードが組上に載せられた。

続いて、社会システムに組み込まれてはいないが教育に準じる現場からの報告を、山梨大学川村協平教授「野外活動の経験とこどもの感性・問題解決力」に託し、篠山チルドレンズミュージアム（兵庫県）のスタッフから「食関連イベント実施の現状」の報告、アメリカミネソタ州立大学で社会文化心理学を担当されている Norasakkunkit Vinai さんから「食の嗜好性発達の日米文化間比較仮説」と題し青少年の食嗜好・味覚形成について、さらに北海道大学大学院山内太郎准教授からは保健学の立場から「東南アジア半島部のこどもの栄養と成長」、大石高典特定研究員から「アフリカ熱帯林の社会における野外キャンプの意義とこどもの食生活」、鎌田東二教授から「京都の奉納文化と神饌」、東京大学大学院農学生命科学研究科藤原辰史講師から「ナチ・エコロジズムと台所政策」などの発表をいただき、現代社会の食を再認識した。

### ヒトと食の成り立ちと味覚

人類にとって、食は生存に欠かせない営みであると同時に社会的・文化的に大きな意味を持っている。そして、私たちは家族や仲間にとって「食の分ち合い」は精神的な確認作業でもあることを日常の食行動で実感しているわけである。食はこころと身体、個体と社会をつなぐ「メディア」という立ち位置。このような新しい食への切り口が吉川センター長との会話から誕生した。

もとより食は地域性と文化性の高い営みであり、その基盤となっているのはヒト（人）の嗜好性に代表される味覚であると考え、研究会は「味覚」に焦点を当てた報告とセ



図5 東京国立科学博物館人類展示「人類進化と食べ物」  
人類の進化と食のつながりが、子どもたちにも分かりやすい形で展示されている

ミナーへと広がった。神戸大学大学院農学研究科笹山フィールドステーションの布施未恵子さんからは「霊長類の昆虫食行動に見られる嗜好性」の報告、そして理学研究科人類進化論研究室とこころの未来研究センター合同でパリ自然史博物館から3名の研究者を迎えて「ヒトを含む霊長類の採食行動進化と発達」と題する最新成果の発表と論議があり、味覚と味覚行動の真髄に迫った。

### 促成栽培的「食育」としないために

さて、今年度も食行動と味覚に関する先行研究の情報交換を内外の研究者と行いつつ、子どもが集い、通い合うフィールドでの行動観察を実施し、食がもたらす「満足感」や「なごみ」を学際的に解き明かすことを進める。同時に、研究者自身の日常的「食」も研究対象にいれ、「自分で料理し味わうこと」「食の質を測る」などのテーマを掲げ、食の実践活動への批判的でありながら現場的な視点を討論し発表していく予定である。

さらに、発足の歴史は浅いながら、子ども（主に幼児期）の発達について専門家が論じあう日本こども学会など幼児教育に関係する研究の中で、従来の栄養・保健・小児科的視点とは異なる「味覚教育」「食べ物教育」がどのように位置づけられているかを整理したいと考えている。

# 発達障害への心理療法的アプローチ

畑中千紘 (こころの未来研究センター特定研究員)  
Chihiro Hatanaka

## プロジェクトの始まり—— 発達障害と心理療法

近年、発達障害という概念が急速に注目を集めている。自分は発達障害ではないかと心理相談機関の門をたたく人は急増し、神経症的な主訴で来談するケースのなかにもその背景に軽度の発達障害が認められるケースが少なくない。これに対し、発達障害には教育・訓練的アプローチが有効で、心理療法はいじめや不適応など二次障害にのみ対応できるものと考えられていることが多い。おそらくこれには、発達障害が「疾病」や「傷害」のように治癒可能なものではなく、永続的な「障害」と捉えられていることも大きいだろう。つまり、発達障害は根本的に「変える」ことが難しいものであるから、具体的なスキルを教えることで生活を円滑にすることが有効な援助と考えられているのである。

ところが実際には、京都大学心理教育相談室をはじめ、発達障害に対して心理療法が有効に働いていると考えられる事例に出会うことも多

い。もちろん、心理療法によって完全に発達障害が「治癒」するというわけではないが、発達障害の人が生きている世界のあり方が変化するような事例を目にすることはそれほど少なくないように思われる。

しかし、このような心理療法の成果はプライバシーの問題があって一般には公開されにくい。そこで本プロジェクトでは、専門家による継続的な事例検討会や調査研究を通じてそのエッセンスを抽出することを試みてきた。これによって一般に公開できる形で発達障害の特性とそれに対する心理療法的アプローチの有効性を示すことが目指されてきたのである。

## プロジェクトの成果 1 〈発達障害の本質を捉える〉—— 主体のない世界

発達障害へのアプローチを考えるにあたり、その特性を正しく捉えることが必要である。筆者は、発達障害の人には流暢に話ができる人であっても他者の言葉を受けとり損ねることが多いことへの着目から、軽

度発達障害の成人を対象に話の聴き方に関する調査研究を行ってきた。その結果、人の言葉を無機質な音声データとして取り入れていて、他者に対してコミットする主体が感じられない場合や、他者の話を自分の考えや印象と混在させて取り入れるために、自他の区別がなくなっている場合などがみられた。これは、彼らが言葉の意味や物語を受けとめる「主体」として他者の前に存在していないことを示唆していると考えられる。

一方で、彼らにはここにこと愛想よく話を聴いているようでもあり、ある意味では状況に適応しているようにも見えた。このような表面的印象と、相手の話の「意味」を受けとっていない実態とのギャップは、彼らが周囲からネガティブに評価される一因となっていると考えられた。発達障害の支援を考える際には、適応的言動・行動のための指導に重点が置かれがちであるが、彼らが他者や社会をどのように体験しているのかについて理解しておくことがまず重要であろう。

この成果は「話の聴き方からみた軽度発達障害一対話的心理療法の可能性」として京都大学大学院教育学研究科に博士学位請求論文として提出され、受理されている。

## プロジェクトの成果 2 〈心理療法的アプローチのポイント〉—— 主体の発生に立ち会う

従来、心理療法はクライアントの“主体”を前提としてきた。“主体”



事例検討会のようす



プレイルームには、たくさんのおもちゃがある

とは難解な概念であるが、これは“自分のことをみる自分”とも言い換えられる。心理療法では治療者が問題解決のために直接働きかけたり客観的なアドバイスを与えたりするのではなく、クライアント自身が“自分で自分のことを考える”場を提供し、そのプロセスを共に歩むことが大切である。子どもの場合でも同様で、セラピーの中で自由に遊んでいるうちにその子のテーマが遊びの中に象徴的に表れてきて、子どもは治療者と共に遊びながら自分なりに問題に取り組んでいくことになる。

しかし上記の調査でも明らかにされたように、発達障害においてはそうした“主体”を想定することが難しいためにこのような展開が起こりにくい。それでは発達障害の心理療法ではどのようなことがポイントとなるだろうか。

まず子どものケースについて述べると、“〇〇ごっこ”とか積み木や粘土で何かを作るような象徴的な遊びは行われず、延々と砂をばらまき続ける、棚のおもちゃを落とし続ける、ミニカーを並べ続けるなど、同じモノや動きへの執着がみられる場合がある。治療者側もそこに何かのイメージや物語を見出すことが難しく、毎回のセラピーが単調な繰り返しのようになることが少なくない。また、治療者がモノのように扱われて関係を築くこと自体が困難に思える場合もある。そこではバラバラ、ぐるぐるの世界が展開されて「中心」

としての主体が想定できないのである。

このような子どものセラピーにおいては「融合と分離」がポイントとなる。遊びの中で「融合」状態が作り出され、すべてが一体となったカオスに「分離」が生まれることが子どもの主体の発生の瞬間と捉えることができるのである。たとえば、砂や絵の具や水がどろどろと混ぜられる遊びの後に、それを別々の器に分けていくような遊びへ移行するときなどは、融合から分離が生まれるポイントと考えられる。

また、終了時間になっても子どもがなかなかプレイルームから出ようとしないことがあるが、その際にも時間通りに部屋を出ることが重要である。その際に子どもが泣いたり叫んだりするならば、それは時間の終わりという形でセラピーの時間と日常の時間の「区切り」を体験する主体が立ち上がる瞬間と考えられるからである。

次に大人のケースの場合であるが、対人関係や社会適応に困難を示しやすい発達障害の人たちとの面接でも、神経症のケースなどと同様に不安や葛藤の話がなされる。しかし、よく話を聴いてみると、訴えられる症状や不安は内的に作り出された心理的なものとは捉え難い場合が多い。たとえば雷恐怖を訴える一方で「耳をふさいでいれば大丈夫」と言う事例や、家族が重篤な病を宣告されて強い不安状態に陥っても、医師から「生存率は40%」と具体的な数字を呈示されると急に落ち着いてゲームを始めるような事例がそうである。不安とは本来、冷静にみれば大丈夫とわかっている、その人の心が不安を作り出し、客観的な理屈を超えてその人の主体に迫ってくるものである。発達障害ではそうした不安を作り出し、巻き込まれる中核としての主体が欠如しているために不安に内的必然性がなく、雷が聞こ

えるまさにその瞬間に直結するものであったり、客観的情報によって簡単に消去されうるものであったりするのだろう。

このようなケースに対して、治療者がクライアントの洞察を待つようなメタレベルからのアプローチはあまり有効でない。むしろ質問に直接答えたり率直に意見を表明したりして治療者の方が存在をかけてぶつかるような対応が大切である。そのような瞬間、クライアントが想定していなかった他者として治療者の存在が立ち上がり、それと同時にクライアントの主体も立ち上がると考えられるためである。

### おわりに—— 発達障害プロジェクトの未来

ごく簡潔にポイントを紹介してきたが、実際の心理療法ではこれらのことがさまざまな形で起こってくる。治療者のほうがポイントを逃さず、それぞれのケースに適切に対応することが重要であろう。これらについての詳細は河合俊雄編『発達障害への心理療法的アプローチ』として創元社より刊行される予定である。

また、現在プロジェクトチームによって発達障害の子どもを対象とした実践研究の計画が進められている。具体的で即効性のあるものを求める傾向が強まる昨今、発達障害に心理療法からアプローチする研究は主流ではなくなってきたが、心理療法が発達障害に対してどのような仕事ができるのかについて臨床データに基づいた成果を示すことができるのではないかと考えている。

こころの未来研究センターでは複数のプロジェクトが異なる角度から発達障害にアプローチを試みている。引き続き多角的な研究成果を発信していくことを目指したい。

# 平安京生態智と癒し空間の比較研究

鎌田東二 (こころの未来研究センター教授)  
Toji Kamata

## はじめに——研究の経緯

2007年より3年間、京都府の助成を受けながら「京都における癒しの伝統とリソース」(研究代表者:河合俊雄教授)の研究プロジェクトを進めてきた。「京都における癒しの伝統とリソース(資源)」とは、具体的に言えば、神社仏閣などのハード面と、そこにおける祭祀・儀礼や修行・修法や参拝・参詣・巡礼・観光などのソフト面を含んでいる。

実際、今なお京都の神社仏閣や祭りは国内外でも有数の観光の対象となっており、昨今の「パワースポット」ブームの影響もあって、広範な関心と人気を保っている。この、多くの人々のこころを惹き付け、安定や癒しをもたらすことのできるメカニズムや仕掛けとは何なのだろうか? 場所の力? ファンタスティックな建築空間? 荘厳なる象徴形式? エキゾチックなパフォーマンス? トランスする沸騰やそれとは対極の静寂?

このいわゆる「癒し空間」の研究は、臨床心理学、宗教学、民俗学、認知科学、地球科学、生態学などさまざまな方法と視点によりアプローチし、その空間の特質やそこでの身心変容を解明することを通して「臨床の知」や「臨地の知」を深めつつ、伝統文化に保持されてきた心の練り方や底力を現代にブラッシュアップし生かすことを目的としている。

研究成果の一部は、すでに、河合俊雄・鎌田東二『京都「癒しの道」案内』(朝日新書、朝日新聞出版、

2008年)、鎌田東二『聖地感覚』(角川学芸出版、2008年)、鎌田東二編『平安京のコスモロジー』(創元社、2010年)、渡邊克巳「モノの表情・眼力の研究」(「こころの未来」第2号・第5号、2009年3月、2010年9月)などの出版物や論考、またシンポジウム「平安京のコスモロジー」(2008年11月)「物語の発生する場所とこころ——『遠野物語』と古典」(2009年11月)などにより社会発信している。

これらの研究活動を踏まえて、本年度より新たに「癒し空間の比較研究」を始めた。ここでの「癒し空間」とは、伝統的な神社仏閣のみならず、広く、「オタクの聖地・アキハバラ」や「冬ソナの聖地」や高校野球のスタジアムなども含む。今年度は、相模の国(現在の神奈川県)の一ノ宮の寒川神社からの寄付金などにより、すでに、「平安京生態智・寒川神社研究会」との合同研究会を3回、フィールドワークを3回実施している。

## 癒し空間の比較研究——事例研究としての御所と首里城の比較

そもそも「宗教学」という学問は、19世紀後半のヨーロッパにおいて「比較宗教学」として発展してきた。比較言語学、比較神話学、民俗学、文化人類学・社会人類学など、関連する学問諸領域と連動しつつ、宗教現象や宗教思想の比較研究が蓄積されてきた。そこにおいて、聖地や霊場などの「癒し空間」や参詣・参拝・

巡礼の研究も積み重ねられてきた。日本では、熊野や伊勢や四国遍路などの参詣・巡礼研究には相当の蓄積がある。

しかしながら、そうした「癒し空間」がどのような個性や共通性や特性を持っているかの比較研究はそれほど多くはない。近年、民俗学者の内藤正敏らによって、江戸と京都の宗教空間の比較などがなされるようになってきたが、まだまだ部分的な個別の比較研究の段階であるといえる。

そこで、本研究プロジェクトにおいては、自分たちの研究と生活の拠点である京都(平安京)を比較の基軸と定点に据えながら、そこと、例えば、平城京・奈良、江戸・東京、琉球・首里、伊勢、吉野・熊野、出雲、アイルランド、バリ島、パリ、ローマなどとの、地域内比較・地域間比較・国際比較を進めていきたいと考えている。どこまで、どの程度の範囲と精度で比較研究をするかについては、時間と労力と費用と方法論な



鎌田東二編『平安京のコスモロジー』(創元社、2010年)

ども関係するので、全体像を視野に入れながら、できるところから着手していているというのが現状だ。

特に本年度に関心を持って進めつつあるのが、大和の国・藤原京・平城京、琉球・首里城、江戸・江戸城と平安京・御所との比較研究や、相模の国の延喜式内社と山城の国の延喜式内社の比較研究である。藤原京や平城京と平安京との比較については、前掲『平安京のコスモロジー』の中の拙論で少し考察したが、琉球・首里城と平安京・御所のコスモロジーや宗教空間の比較をしてみればどうなるか。首里王府と平安京を、宮都（都城）、最高司祭、神聖地、神聖歌謡、始原の島、始祖の神々などの観点から比較すれば、どのような共通項と差異性が見えてくるか、少しく紹介してみたい。

首里城は内郭が15世紀初期、外郭が16世紀中期に造られ、西面している。それに対して、御所は南面している。つまり、玉座に向かう時に東面するか北面するかという違い。換言すると、北上位と東上位の違いである。

御所の建築思想は天皇が北極星を背にする不動の位置にあるという思想に基づいており、それは中国の天子南面思想の受容によるものであるが、古代日本ではその北上位思想に先行する思想と信仰として東上位の思想と信仰があったと考えられる。沖縄の首里城は築城年代こそ15世紀以降と新しいが、それを支える建築・方位思想と信仰は大変土着古代的である。

首里城が東上位であるということは、琉球王が北極星ではなく太陽を背にして座るということであり、ここには明らかに太陽信仰、それも東から差し上げる朝日に対する信仰がある。東の海上にはニライカナイと呼ばれる海上他界があると考えられたが、そのニライカナイから届く冬至の光が沖縄本島の東南に位

置する久高島を經由して、<sup>せうじょう</sup>斎場御嶽、<sup>ひんけ</sup>弁ヶ岳（弁ヶ大嶽・弁ヶ小嶽）、首里城へと至る。朝日に刺し貫かれた軸線上に御嶽と呼ばれる「癒し空間」すなわち聖地と城が点在する。

沖縄の風水地理は、①南方に位置する小禄と豊見城<sup>とみ</sup>連峰が青龍、②西方に位置する慶良間島<sup>けらまじま</sup>が朱雀、③北方に位置する読谷村<sup>よみたんそん</sup>・北谷山が白虎、④東方に位置する弁ヶ岳が玄武とされる。だが通常、青龍が東方、朱雀が南方、白虎が西方、玄武が北方を護る霊獣である。つまり、琉球と中国や日本の風水地理は90度ずれている。琉球風水は東上位を基軸に成り立っており、これは藤原京が建都されるまでの古代日本の方位信仰と同じだったと思われる。要するに、北上位の前に古く東上位のコスモロジーがあったということだ。

それゆえ、「神の島」と呼ばれる東方の久高島を望む沖縄本島東南部の知念村や玉城村の聖域である御嶽や城を巡拝する神拝行事を「東御廻い」と呼ぶのも、「東」が上、すなわち「アガリ」だからである。この「アガリウマーイ」は14カ所の御嶽や城などの「癒し空間」をめぐる巡拝行である。この東上位思想が今も沖縄の人びとの世界観の中に息づいている。

次に、琉球神話と日本神話の始祖神を比較してみよう。袋中著『琉球神道記』（1605年）では、『古事記』（712年）や『日本書紀』（720年）におけるイザナギノミコト（男神・夫）とイザナミノミコト（女神・妻）に対応する始祖神は、アマミキヨとシネリキヨである。日本神話ではイザナギ・イザナミが男と女でその順番に登場するが、琉球神話では女神のアマミキヨ、男神のシネリキヨの順番に登場し、天から降りてきて島に木や草を植えて国土を作ったとされ



首里城公園 第2次世界大戦で破壊された首里城は、1992年に正殿などが復元された。（提供：首里城公園管理センター）

る。つまり女性優位。そして、この二神は風によって妊娠し、長男が王や按司などの支配者、次に長女が間得大君やノロやツカサなどの女性司祭、三番目の子が一般庶民となっていたという。

このように、首里城や御所の構造とそれを支えるコスモロジーや神話的思考や祭祀体系を比較すると、それぞれが持つ特質が浮き彫りになってくる。それを概括すると次のような表にできるだろう。

表 琉球王府と平安京の比較

地域	琉球王府	平安京
祭政の中心	首里城	御所
最高司祭	間得大君	斎王
聖域	御嶽・城	神社・寺院
歌謡	おもろそうし	古事記・万葉集
始原島	久高島	淡路島
始祖神	アマミキヨ・シネリキヨ	イザナギ・イザナミ

### おわりに—— 「癒し空間」の衰退と未来

このようなコスモジカルな思考は、明治維新以降の近代国家システムの中では捨象ないし変形されてきた。そして今、沖縄は基地問題で大揺れに揺れ、京都では葵祭の葵は自生せず、また深刻なナラ枯れが進行している。両者の「癒し空間」は極度に疲弊し、衰退しつつあるのだ。矛盾するようであるが、そんな全体状況の中での「パワースポット」ブームである。この事態そのものが、日本の現代の混乱を象徴しているといえよう。

## オペラが描く「こころ」

佐伯順子 (同志社大学大学院社会学研究科教授)  
Junko Sacki



(提供:京都新聞社)

間のこころのあり方を問い続けている歴史であるといえる。「小説」も「文学」も近代の概念であるが、現在、そうしたカテゴリーに含まれている、文学や演劇を含めた人間の創作活動は、人間のこころの動きという不思議なものを表現するために費やされてきたといっても過言ではない。

逍遙は西洋文学の影響のもとに、明治小説の新しい課題として恋愛を掲げたが、心、特に男女関係を描いてきた歴史は、『源氏物語』はもとより、日本文学も西洋文学も変わらない。筆者は明治文学を中心に、作家たちが当時としては新しい「恋愛」の問題にどう向き合おうとしたかを研究してきたが、現在、ドイツのベルリンに在外研究で滞在中であるので、本稿では、現地で見聞した最新のオペラ、オペレッタの描く「こころ」の問題を紹介しながら、東西の文学、芸能が「こころ」の問題にどのように取り組んでいるかを比較してみたい。

### 愛情か金か—— 『ペリコール』が描く恋愛

「オペラの首都」(2010年のベルリンの三劇場のオペラ公演の宣伝文句)と自負するベルリンでは、ベルリン国立歌劇場、ベルリン・ドイツ・オペラ、コーミッシェ・オーパーの3つの劇場がそれぞれに工夫をこらした演出でオペラを上演しており、役者の衣裳をスーツやパンク風など現代的にアレンジして、現代社会への問いかけとしてオペラを上演しようとする姿勢が顕著に見てとれる。特にコーミッシェ・オーパーはユニークで斬新な演出で知られており、シーズンが終了する7月には、

フェスティバルとして、ウェルカム・ドリンクつきの連続公演(2010年7月13日から18日)を行っていた。オペラの物語の多くも恋愛を軸にしているが、コーミッシェ・オーパーのフェスティバルで上演された『ペリコール』(オッフエンバッハ作曲)はちょうど日本の幕末から明治期にあたる作品であり、恋愛を主題にしたオペレッタであるので、まず『ペリコール』の描く恋愛を明治文学と比較してみたい。

物語の舞台は南米のペルー。タイトル・ロールのペリコールはリマの大道芸人(歌手)で、同じく大道芸人の恋人ピキーヨがいるが、貧しくていつも空腹に悩まされている。ペルーの総督ドン・アンドレスは市民の現状を知るため、自身の誕生日でわくりマの街に変装して繰り出す。市民は総督の正体を悟っており、誰も彼の前で本音を吐露することはない。唯一、ペリコールのみが、率直に貧しさに苦しむ市民の不満を総督の前でぶちまけたので、意気にほれた総督は、彼女を自分の愛妾として宮殿に迎え入れようとする。ここから生まれるペリコールとピキーヨと総督の三角関係のどたばたが、オッフエンバッハらしい軽快な音楽によって展開してゆく。

素朴に演出すれば他愛ない恋愛喜劇なのだが、コーミッシェ・オーパーの演出はこの物語の政治性を強く前面に打ち出し、まずは舞台中央に、大きな赤旗を手にした男を一人登場させ、「労働者よ！」と叫ばせて観客の度肝を抜く。ここで客席からは早くも失笑がもれる。男は1871年のパリの民衆蜂起による、パリ・コミューンを象徴していることが台詞で明示されるが、1989年に壁が崩れたベルリンという土地では、もちろん別の比喩としてもリアリティをもって受け取られたようだ。

「労働者よ、立ち上がれ」とこの

「小説の主脳ハ人情なり」と、坪内逍遙が『小説神髓』で宣言したのは明治18年(1885)のことであった。明治時代の新しい「小説」を産みだすにあたって、逍遙は「人情」、つまりは「こころ」の問題を中心に据えたことになる。逍遙はさらに、「人情」のなかでも女と男の関係こそが、もっとも重要であると続け、男女の仲、今でいえば恋愛を描くことを自作の課題としてとりくんだ。「恋愛は人情の活動中、最も清く最も美はしく且つ最も貴きものの一なり。沙翁も近松も、愛の詩人なりき」(高山樗牛「女性作家に望む」『太陽』明治29年2月)と、明治の作家たちの間では、「人情」、なかでも恋愛の問題は小説の最重要課題という認識が共有されていた。

確かに、文学の歴史は、連綿と人

男は市民に熱っぽくよびかけ続けるのだが、巷にあふれる市民たちは誰も立ち上がらぬどころか、かえってわざとらしく倒れこむ。革命を空虚と批判するかのような、彼らの冷淡さ。市民たちの服装は、一様に灰色の地味な装いであり、かつての中国の人民服を連想させるものだ。彼らはおりにふれて、顔の前に黄色いスマイルのマーク（一定の世代以上の日本人にとっては、かつての流行がなつかしい！）を掲げ、支配者への“作り笑い”をする（図1）。

本音を隠す市民たちの間で、ペリコールの奔放さは際立ち、彼女の魅力を引き立てるが、そんな彼女とて空腹には勝てない。総督の目にとまり、贅沢な暮しをとるか、ピキーヨとの愛情をとるかの選択に迫られたペリコールは、愛情だけでは生活できないと見極め、ピキーヨに別れの手紙をしたためる。絶望したピキーヨは首をつろうとするが、総督の側近におしとどめられ……。

愛情か、金か。この問いは、恋愛を主題とする文学には東西を問わずあらわれてくるテーマのようだ。新聞連載小説として人気を博した明治の恋愛文学の代表作のひとつ『金色夜叉』<sup>こんじきやしや</sup>（明治30～35年連載）は、女主人公の宮が貫一を捨てて銀行家の息子と結婚する。「ダイヤモンドに目がくらみ…」というこの作品のキャッチ・フレーズは、愛情よりも経済力を選ぶ女性の姿勢を揶揄し、自暴自棄になった貫一の悲惨さを描くことによって、純粋な愛情の重要性を訴える。同じく新聞連載で当時注目された小説『魔風恋風』（明治36年）でも、貧しい女学生と男子学生の恋愛が描かれ、男子学生は貧しい恋人の繁を捨てて、結局、裕福な婚約者を選ぶ。金か愛情かの選択のなかで、裏切られた恋人が絶望する展開もよく似ている。ピキーヨは自殺を試み、貫一は高利貸しとして

金の亡者と化し、繁は気落ちして病死してしまう。

だが、明治日本の小説が、捨てられた恋人たちを不幸の底に陥れるのに対し、『ペリコール』は、恋人たちが再び結ばれる工夫をほどこした。総督の愛妾は、形として既婚者である必要がある

ため、独身のペリコールを既婚者に仕立てるために、選ばれた花婿がまさにピキーヨその人だったのだ。変則的な形とはいえ、ペリコールとピキーヨは結婚するのである。

もっとも、二人はすんなり結ばれるわけではなく、ペリコールが総督の愛人になったと怒ったピキーヨは騒ぎ立て、牢屋に入れられてしまう。ピキーヨを救うべく牢屋に赴いたペリコールは、いったん牢番に変装した総督に捕らえられてしまうが、長年脱獄の準備をしていた囚人に助けられて何とか脱出。最後には総督も、愛情の大切さを悟って二人の仲を認め、物語はハッピー・エンドとなる。

雑談めくが、アメリカでイタリア出身の女性研究者と話をしていたとき、私がある悲劇が好きだというと、「どうしてああいう悲しい話が好きなの？ 日本人は悲劇が好きね」と言われたことがある。確かに、日本の恋愛（色恋）ドラマの代表的事例のひとつといえる近松の心中ものは、基本的に悲劇であり、能の場合は男女が結ばれる結末もあるが、嫉妬や恋の恨みを描く例も少なくない。明治小説が裏切られた恋人を救わないのは、男女の「こころ」をめぐる文化的な嗜好の違いがあるのかもしれない。



図1 『ペリコール』 主人公のカップルと、背景の、スマイル・マークの市民たち（『ペリコール』パンフレットより）

## 恋愛と権力

明治文学とオペラの描く恋愛劇の差異は、恋愛と権力との関わりにも見られる。コーミッシュ・オーパーの演出は政治性を強調していると述べたが、『ペリコール』の結末では、ペリコールとピキーヨの絆の深さを目の当たりにした総督が、最後に自らの頭に銃口を向けて拳銃自殺を遂げる。愚かな支配者は、滅びなければならぬ……現代の演出は権力に厳しい目を向けているようだ。

だが舞台では、支配者のみならず、いったん結ばれて幸福になるかに見えた主人公のカップルも、どこからともなく向けられた銃声に倒れる。主人公らが倒れ伏した背後では、冒頭に登場した男の顔がスクリーン上に映し出され、パリ・コミュニケーションの民衆蜂起の様子を語る。現代の演出は単純に愛の成就を賛美するのではなく、政治的混乱のもとに命をおとした市民たちの姿をも描き出そうとしているようだ。

支配者のみならず、主人公らも銃撃の犠牲者になることで、演出家はさまざまな政治体制に懐疑や批判の目をなげかけている。（この姿勢は同じく、コーミッシュ・オーパーで上演された『後宮からの逃走』でも





図2 『ペリコール』 市民に身をやつして巷に繰り出した総督。網タイツ姿で登場し、揶揄的に表現される(『ペリコール』パンフレットより)

含まれていたからこそ可能になったと思われる。市民に身をやつして巷に繰り出した総督は、自分の支配体制がうまく機能しているのかどうか、社会の実態はどうなっているのかに強い関心を抱き、支配者としての“自分さがし”をする姿勢を鮮明に打ち出していた。また、舞台の中盤では網タイツ姿(図2)で登場し、文字どおり“裸の王様”然とした姿で権力の虚しさを体現する。オペレッタの描く権力は、無傷ではいられない。

### 『フィデリオ』にみる 恋愛と政治

変わらず、後宮から逃れて恋を成就したはずのカップルや周辺の人々は、最後に結局殺されたり、自死したりする)。“純粋な愛”はしばしば、権力への対立項として賛美されることがあるが、“権力の横暴に対する愛の勝利”という単純な二項対立では、現代の観客は確かに満足しないだろう。権力や経済力に左右されない愛、または権力=悪、愛=善という図式自体を、演出家は相対化しようとしている。

コーミッシェ・オーパーの演出はさらに複雑な入れ子構造になっており、赤旗を手にしていた男は最後にタキシードで登場して自分自身をパロディ化し、また、物語全体を通じて、漫才師さながらの派手なステージ衣装を身につけた二人組の男がストーリーに茶々を入れ、劇中劇のような印象をかもし出している。

どのような支配体制も、どのような愛も、理想とは言い切れない……現代のオペレッタの演出は、価値の相対化が際立つポスト・モダン的なメッセージを伝えており、それはそもそも、素材となったオペレッタ自体に、すでに一定の政治性が

恋愛と権力を結びつける問題意識は、同じコーミッシェ・オーパーで『ペリコール』の前夜に演じられた『フィデリオ』にも認められた。モーツァルトの『フィデリオ』(1805年)は、やはりタイトル・ロールのフィデリオの恋を主軸にした物語。フィデリオは女性であるが、スペインの国立刑務所に収監されている夫フロレスタンを救うため、男性に変装して獄卒をしている。刑務所の所長ドン・ピツァロは、政敵フロレスタンを不当に収監しており、司法大臣が刑務所を訪れて彼の不法を暴こうとしているという報告に、戦々恐々。行進曲に導かれ、馬に乗って登場するピツァロは、明らかに“悪玉”の位置づけであり、その権力の不当性を象徴するかのよう、彼が乗るのはおもちゃの馬(図3)である。対照的に、ピツァロの不正をあばき、フロレスタンらを牢から解放する大臣は、コーミッシェ・オーパーの演出では、真っ白な本物の馬に乗って姿を現した。理想的世界を暗示するかのよう純白の馬と、虚偽の象徴であるかのような茶色のおもちゃの馬。両者の鮮明な対比は、観客に善

と悪の対立をわかりやすく印象づける。

偽りの権力を批判するという問題意識は、『フィデリオ』にも『ペリコール』にも共通している。しかも、悪しき支配の象徴というべきピツァロの出で立ちがナポレオン風! 手にしたトリコロールの旗も、明らかにフランス国旗を連想させるもので、ドイツとフランスの微妙な関係がうかがえる。プロイセン軍を破ったナポレオンへの恨み(?)はここまで影響しているのか……。しかし、隣国の元支配者をオペラでおちょくっても、さして深刻な政治、外交問題に発展しないのは、さすが双方大人の国というべきか。いや、最終的にはドイツの国旗もゴミ箱に捨てられ、どこの国旗の柄も入っていない白い旗を立てられ、客席の前列にも、白いパネルが回されていたので、国家、国民という枠組み自体を相対化しようとするメッセージを汲み取ることができ、フランスへのライバル意識(?)も解消される仕組みとなっている。

工事現場の音で幕を開け、作業着の労働者たちが客席の椅子を取り外して舞台上に移動したり、舞台のソデの照明を取り外したりといった作業に従事する、現代の労働者の姿を描く『フィデリオ』の演出は、権力批判を現代社会への問いかけにつながようとしているかに見えた(図4)。フィデリオに片思いするマルツェリーネの父親ロッコも、これらの労働者たちと同じ作業着姿であり、独仏戦争の記憶をおりませながら、権力と恋愛の問題を今日的に再解釈しようとする試みが興味深い。

### 臣下の行動規範を問う日本

台詞と歌曲からなる芸能であるオペラは、よく歌舞伎と比較される。確かに、オーケストラ・ピットのなかのオーケストラはさしずめ御簾のな



図3 『フィデリオ』 刑務所所長ピツァロはナポレオン風の衣装で、おもちゃの馬に乗っている(『フィデリオ』パンフレットより)

かの隠囃子であり、役者たちの台詞や歌は、義太夫の語りにも近い印象で、双方とも、歌われる言葉によって物語を進めてゆく。しかし、そこで語られる物語の内実はかなり異なっている。歌舞伎で演じられる恋物語は、市民の心中ものにしても、貴族や武将といった支配階級の男女関係にしても、権力自体を問題化する傾向は少ない。

ちょうど今年の7月はじめ、バリン・ドイツ・オペラで日本の東京バレエの公演があり、ベジャールの『ザ・カブキ』が上演された。『ザ・カブキ』は歌舞伎の『仮名手本忠臣蔵』をバレエに翻案したものであり、中心的な主題はもちろん、赤穂浪士の敵討である。そこにお軽と堪平の恋や、高師直の顔世御前への横恋慕がからんでくる。恋愛(色恋)は『忠臣蔵』においても不可欠な要素であるには違いない。

だが、お軽と堪平は、二人とも主君の敵討を第一に考えており、お軽は夫のために身を売り、堪平は敵討



図4 『フィデリオ』 主人公に片思いする娘の父親は労働者として描かれ、作業着で舞台のソデの照明を取り外したりといった作業に従事する(『フィデリオ』パンフレットより)

のためにお軽との生活を捨て、誤解から生じた罪を背負って切腹する。彼らの間には、主君の絶対性を疑うという発想は皆無であり、敵討のためには恋をあきらめても当然という行動規範が、恋人たちの間に共有されている。將軍の支配や主君の軽はずみな行動を批判するという問題意識はまったくなく、ひたすらご奉公のために自己を、なかならず恋を犠牲にするのが、彼らの美德なのである。敵討の主役となる大星由良之介の息子の力弥も、加古川本蔵の娘・小浪と恋仲であるが、本蔵は松の廊下で塩判判官を抱きとめたため、大星家にとっては一種の敵であり、若い二人の仲は一夜限りで引き裂かれる。敵討、つまりは主君への奉公という大目的の前には、男女の恋は二次的なものにすぎず、犠牲にされるのが当然とみなすのが、『忠臣蔵』の価値観である。

もちろん、オペラが作られた時代と歌舞伎の時代は異なり、歌舞伎は幕府を批判するメッセージを伝えることができなかったので、『忠臣蔵』の時代も鎌倉時代に置き換えられている。とはいえ、この舞台がいまだ歌舞伎の名作のひとつとして連綿と演じ続けられ、かつ現代のオペラにも翻案され(三枝成彰作曲)、新作バレエにもなって国際的に公演されているという事実は、この物語の世界観が、何かしら色あせないものとして観客に受け入れられ続けている証拠といえる。

『ペリコール』や『フィデリオ』

に限らず、オペラ、オペレッタでは、王や総督など、支配者の苦悩や“自分探し”が重要な要素のひとつとなっており、支配者は批判され、最後にはたおされることもある。だが、日本の芸能では、支配者は絶対的な価値をもつものとされ、それに対して臣下たちがいかに真摯に奉公するか、忠誠をつくすか——つまりは臣下の苦悩のみがクローズ・アップされる傾向がある。ワーグナーの大作『ニーベルングの指輪』でも、ジークムントとジークリンデ、ジークフリートとブリュンヒルデといったカップルの愛情のみならず、神々の長たるボータンの苦悩がていねいに歌われ、最後には神々の世界も没落する。

女と男の「ころ」の問題を、権力への一方的な奉仕や自己犠牲に終始させず、権力そのものを前景化し、問題視するオペラの世界は、王権の衰退や革命を生む社会の産物である。一方、権力の絶対性や苦悩をあまり問題にしない日本の芸能は、やはり日本社会の“伝統”を背景にしているかに見える。どちらが良くてどちらが悪いという価値判断には膨大な議論が必要だ。ただ、東西の舞台芸能における男女の「ころ」の描き方の対照性は、少なくともそれぞれの社会的、文化的心性を示唆しており、このことをふまえて「ころの未来」をどのように考えるかは、観客の自覚と問題意識にゆだねられている。

# 眠って見る「夢」を遊び楽しむ

高田公理 (佛教大学社会学部教授)  
Masatoshi Takada



な「ないものを見せてくれるしかけ」なのだ。

で、それらは「ない」のだから「虚」というほかない。しかし「見える」という点では「実」でもある。かつて歌舞伎や浄瑠璃の作者として活躍した近松門左衛門は、そんな微妙な境目、つまり「虚と実の間」に「遊び」が生まれるのだといった。

## 「眠って見る夢」と「将来の夢」

そこで、あらためて「夢」である。それは本来「夜、眠っているときに見る」ものだ。だから当然「現実」ではない。だが、夢のお告げ、正夢、予知夢などといった言葉もある。

現代に生きるぼくらは、

「そんなことは科学的にありえない」

と考えがちだ。それでも、やっぱり気にはなる。ときに夢のなかのできごとが、仕事上の問題や日頃の悩みを解くきっかけになったりもする。

そういえばニューギニアの高地民族は、夢のなかのできごとを、現実のできごとと区別しないのだそう。だから、夢のなかで誰かに悪さをしたら、目覚めたのち、

「さっきはごめん。悪かった」

とあやまる。あやまられたほうも、ごく普通に受け流すという。

べつだん彼らが遅れているわけではない。ぼくらと夢の理解の仕方がちがうだけだ。

そこで、月並みだが「夢」の語義を『広辞苑』で調べてみた。すると冒頭に「イメ(寝目)の転」と書いてある。本来それは「夜(寝ているときに)目(に見えるもの)」を意味した。これはそのまま「①睡眠中にもつ幻覚」という語義につながる。

ところが、最後に「④将来実現したい願い」という語義が出てくる。ただし『広辞苑』の第一版(1955年)、第二版(1969年)には、④の語義は記されていない。それが初めて登場するのは第三版(1983年)なのだ。

とはいえ、ぼくが小学校5、6年生だった1960年前後、作文の課題に「将来の夢」が出たという記憶がある。それは「将来実現したい願い」としての「夢」にほかならない。

こうした意味での「夢」の使われ方が、いつ始まったのか。残念ながら正確なことは分からない。しかし、社会の規範としての「身分の縛り」を振り切って、自由意志と能力で個人が、みずからの将来を切り開いていけるようになった明治以後、英語のdreamの翻訳語としての「夢」に、そうした意味が付与されたのではないかと考えられる。

それから百年余り、高度経済成長の進展に伴って、いよいよ「将来実現したい願い」に現実性が出てきた。そんな時代の風潮を捉えて『広辞苑』も、それを新しい語義として定着させたらしい。

同時に、最近の日本語では「夢」を「眠っているときに見る夢」の意味で使う機会は確実に減っているように思われる。実際、2004年(平成16)に至る10年間に発行された『朝日新聞』紙上で「夢」という単語を検索してみたところ、全体の約95パーセントが「将来実現したい願い」という意味で使われていることが判明した。

はたして、このことは「夢のある話」なのか、そうではないのか。「このころの未来」との関係で少し考えてみたい。

## 夢の働き——芸術の創造と科学上の発見を助ける

まずは「眠って見る夢」である。かりに毎日、だいたい8時間程度の

## 「虚」と「実」の「間」に遊ぶ

幼い子どもが、両手で持った丸いお盆を、右へ左へと回転させている。

「ぶるん、ぶつぶーっ、だっだっだっだっ一、ごとん」

ずいぶん調子が出ている。お盆をハンドルに見立てて、自動車ごっこに夢中になっているのだ。

しかし、本気で「お盆」を「ハンドル」だと思っているわけではない。もしそうなら、ちょっとおかしい。でも「なかばは本気」だ。そうでないと面白いはずがない。

「夢中」というのは「夢の中」……。もっとも、この子どもは眠ってなんかいない。でも、きっと視線の先に、自動車のボンネットの「幻」が見えている。「丸いお盆」は「ハンドル」の姿を映し出す「メディア」——「夢」「幻」「メディア」は、み

睡眠をとるとする。人はその間、4、5回に分けて合計90分ぐらいは夢を見ている。

最初の夢は、寝入りばなの「うとうと」が本格的な眠りに移るころ、色のついた光や幾何学模様が現れる。そのうちに人の顔、空を真っ赤に染めて沈む夕陽、燦々と陽の光が降り注ぐ林や野原が見えたりする。

20世紀の芸術に大きな影響を及ぼしたシュール・リアリズムの画家の1人、フランシス・ピカビア (Francis Picabia : 1879-1953) は、そんな寝入りばなのイメージを巧みに表現した「パピヨン」という作品を残している (図1)。

これは一見、馬を描いているように見える。しかし、しばらく眺めていると蝶のイメージが浮き出してくる。時間と空間の秩序が崩壊しているのだ。

入眠後しばらく経ったときに見る、そんな夢を巧みに描き出した作品として、この絵は睡眠学者によって高く評価されている。

その後、眠りは、徐々に深くなっていく。ところが、やがて筋肉がゆるんで、体は動かないのに、眼球だけが急速に動く時期がやってくる。そんな眠りを「REM (rapid eye movement : 急速眼球運動) 睡眠」という。このとき、人は本格的に夢を見る。

その夢が、ときに現実に大きな影響を及ぼすことがある。たとえば、のちに鎌倉幕府を開くことになる源頼朝と結ばれた北条政子 (1157-1225) は、夢の力を借りて高い社会的地位を得たという。史料はないが、『蘇我物語』に、こんな話が記されている。

いわく、政子の2歳年下の妹が「高い峰にのぼり、月と太陽を左右の袂におさめる」奇妙な夢を見た。それを耳にした政子は「なんと恐ろしい夢でしょう。禍をもたらす不吉な夢

著作権者・所蔵者の権利保護のため画像は閲覧できません。



図1 フランシス・ピカビア《パピヨン》1929年  
©ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2010

だから、私が買ってあげましょう」——当時、不吉な夢を見たら、それを他人に売ることによって禍から逃れられるという考え方があったらしい。

そこで妹は、政子が与えた小袖の代償として、いわば「夢を売る」ことになった。政子は「日月をつかむ夢」が、たいへんな吉夢であることを知っていたのだ。そして政子は、本来なら妹と結ばれるはずだった頼朝と結ばれ、みごと天下人の妻になる。

そうかと思うと、不吉な夢を見ても、仏様に祈れば、吉夢に変えてくれるという信仰があった。いまも法隆寺に所蔵されている「夢違観音」(観音菩薩立像) は、そんな事例の典型だろう。この仏様の顔は丸顔で、額に化仏をつけ、唇には優しい微笑みを浮かべ、左手に小さな水瓶を持っている (図2)。

こうしてみると昔の日本人は、さきに紹介したニューギニア高地の人々とは意味がちがうが、夢と現実との間に、なにかしらの関係を想定していたことになる。

ところが、少し時代を下って室町時代になると、夢と現実を峻別する考え方が力を持ち始める。たとえば南北朝の動乱を描いた軍記物語『太

著作権者・所蔵者の権利保護のため画像は閲覧できません。

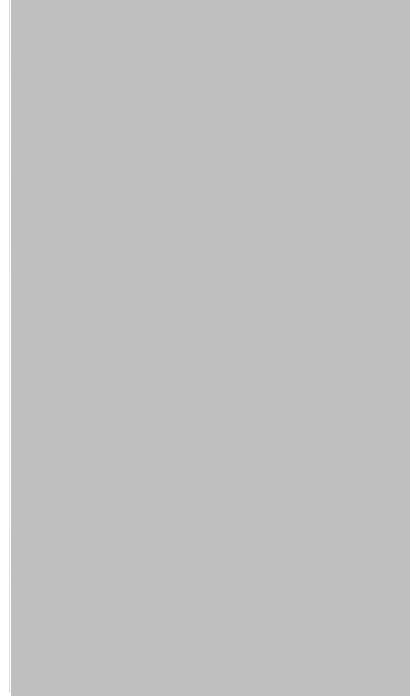


図2 夢違観音像 (所蔵:法隆寺、写真提供:奈良国立博物館、撮影:森村欣司)

平記』に登場する武士の青砥左衛門は、相模の守が見た夢のお告げをもとに、恩賞の領地を与えられそうになる。

でも、当の青砥は、これを固辞する。不思議はない。もし相模守が、まったく逆の内容の夢を見たら、所領を没収されることになるのではないかと考えたのだ。

そこには「夢と現実とは別世界のできごと」だと考える、ぼくら現代人に通じる思いが芽生えていたのだろう。

しかし他方、人間のさまざまな創造活動に夢が果たしてきた役割を否定することもできそうにない。

たとえば、ジュゼッペ・タルティーニ (Giuseppe Tartini : 1692-1770) というイタリアの作曲家は、ある夜、悪魔がみごとにバイオリンを演奏する夢を見た。その曲のあまりの美しさに、目覚めるとすぐメロディを楽譜に書き留める。バイオリン・ソナタ・ト短調「悪魔のトリル (Trillo del Diavolo)」は、こうして作曲された。



図3 アウグスト・ケクレ

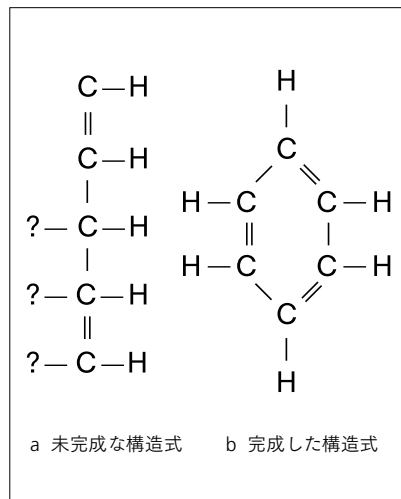


図4 ベンゼンの構造式



図5 ウロボロス

あるいは、時代が現代に近づいた19世紀にも、ドイツの化学者アウグスト・ケクレ (Friedrich August Kekulé von Stradonitz: 1829-1896) は、夢に見たイメージをもとにベンゼンの構造式を発見した (図3)。

すでにベンゼンという物質の分子式が  $C_6H_6$  であることは分かっていた。しかし、その構造式が分からない。図4aでは炭素 (C) の結合手が余ってしまって具合が悪い。そこで、この問題を解決するために、いろいろ考えていたある夜、仕事部屋の椅子でうたた寝していた彼は、つぎのような夢を見た。

私の眼前ではまたもや原子がめまぐるしく動いていました。……すべてはヘビのようにからみあい、回転しつつ運動していました。ところで、あれは何だろう？ ヘビのうちの一匹が自分の尻尾をくわえて、その象が私の眼前であざ笑うように旋回しているのです。私は、まるで電撃に打たれたように目ざめました。そして、こんどもまた、この仮説の帰結を仕上げするために、その夜の残りを費やしたのです。……皆さん、私たちは夢みることを学びましょう。そうすればおそらく真理を発見するでしょう」 (1890年のケクレ祭で

の講演。渡辺恒夫『人はなぜ夢を見るのか——夢科学四千年の間いと答え』化学同人、DOJIN選書、2010年より)

ここで「自分の尻尾をくわえたヘビ」とは、大昔から伝えられてきた「ウロボロス」という名の象徴性の高い図柄のひとつである (図5)。それがケクレに、図4bのような構造式を思いつかせるきっかけになった。

芸術の創造や科学の新発見などに関連する、こうした事例は枚挙にいとまがない。目覚めているときに、一所懸命、考えたり感じたりしていることが、眠っているときに見る夢のなかで一挙に解決されたり、素晴らしい創造に昇華されたりする。

どうやら夢には、そんな力が備わっているらしい。

### 「存在しないもの」を見たり、聴いたりする

ここで大切なことは、

「そこに存在しないものを見たり、聴いたりする」

ということだ。芸術家でも科学者でも、独創的な仕事をした人とは、一言でいうと「そこに存在しないものを見たり、聴いたりした人」だといえるのではないか。

たとえば、ゴッホの「星月夜」と

いう絵を思い出してみよう (図6)。こんな風景は、ゴッホ以前には誰も目にしたことがない。それを彼の「天才」は、夢の中なのかどうかは知らないが、いつか心のなかで、たしかに「見た」のだ。1960年代のイギリスから出て、20世紀の音楽シーンに巨大な革命をもたらしたビートルズだって、彼らの誰かが心のなかで「聴いた音楽」を演奏することで作品として定着したのだからいない。

つまり「独創」とは、特別な才能を持った人が、普通の人に先駆けて「見たり、聴いたり」したことを表現したものにほかならない。それが、夢のなかでは、ぼくら「普通の人」にも、ときに可能になる。ここで「普通の人」とは、その領域において「ごくあたりまえの常識人」といった程度の意味だ。ぼくたちは通常、あらゆる物事を、ごくあたりまえの常識どおりに見たり、聴いたりしているからである。

ところが、夢の中では、目覚めているときの常識の束縛がとり払われる。そして、本来は誰にもそなわっている自由な想像力が羽ばたき、飛び回る。そう、夢は人の心を「自由にしてくれる」——その結果、目覚めているときには見えないものが見えたり、聞こえない音や言葉が聞こ

えたりするのだ。

夢を見ているとき、人は誰もが「天才になっている」のかもしれない。

## 眠りと「人を天才にしてくれる」 夢を遊び楽しむ

では、人はなぜ、どのような脳の働きで夢をみるのか。眠っているわけだから、目で見たり、耳で聞いたりするわけではない。簡単にいうと、脳の視覚野や聴覚野という場所が、あたかも目で見たり、耳で聞いたりしているかのように働くのだ。

そのしくみは、ここでは詳しく説明しない。夢のメカニズムに関する知識は、この小論の冒頭に近い場所で紹介した、20世紀なかばにおける「REM(急速眼球運動)睡眠」の発見をきっかけに急速な進歩をとげた。それに関連する多数の書物が公刊されているので、それらをご覧ください。

ただ、ここでは、夢が「脳の働き」によって生じる点だけは強調しておきたい。「脳の働き」とは「心を動かす」ことにほかならないからだ。そして、その「ところ」は、人それぞれの過去の体験に基づいて、その人の未来のありようを決める上で決定的な役割を果たす。

こう考えると「夢」とは、そんな「ところ」が、みずからをさらけだして姿かたちを露わにすることを通して、自分が何者なのかを教えてくれるメディアだということになる。

それだけではない。最近の脳科学によると、睡眠や夢には、脳が受け入れた情報を整理し、記憶として定着させ、ときに新しいアイデアを生み出す力が潜んでいると考えられるようになった。睡眠や夢には大きな価値が潜んでいそうなのだ。

ところが、先に述べたように、いまどきの日本で「夢」といえば、そのほとんどが「将来実現したい願い」という意味で用いられる。実際、



図6 ゴッホ《星月夜》1889年

多くの仕事柄、つきあうことの多い20歳前後の若い人たちの関心は「自分探し」、その結果、見つかるかもしれない「(将来実現したい願いとしての)夢」、それを実現するための「こだわり」に集中しているように思える。

では一体「自分探し」とは何なのか。今そこにいるのは「自分ではない」のか。むしろ大切なのは「その自分」が「ほかの人たち」に対して「何ができるのか」を考え、実践に移すことではないのか。

そんなことを考えながら、彼らの話に耳を傾けると、「夢」といいながら、彼らは「眠るのがもったいない」と考えているらしいことに気づかされる。たしかに、いまどきの日本では、不夜城と化した街をはじめ、テレビやインターネットなど、さまざまなメディアが面白くて楽しい情報を矢継ぎ早に届けてくれる。だから「眠るのがもったいない」という気持ちも分からないわけではない。

しかし他方で「眠っているときに見る夢」が、一種のメディアとして果たしてくれる役割を思い出す

と、逆に睡眠をおろそかにするのは「もったいない」という気がする。

しかも、彼らが見つけた(と思っている)「夢」に「こだわる」——それは自らの未来を、現在の「自分探し」がもたらす思い込みによってせばめてしまう結果をもたらさないか。むしろ「眠って見る夢」を遊び楽しむ、想像力の翼を大きく広げることが、せまっ苦しい「こだわり」から解放された未来を切り開いてくれるのではないか。

そこで話が、最初に触れた「幼い子どもの遊び」に戻る。無心に何かを遊び楽しむことに「夢中」になっているとき、人の「ところ」は自由に解き放たれている。「眠って見る夢」もまた、それを見ている人の「ところ」を自由に解き放ってくれる。

そんな自分の脳が生み出した夢を優しく眺めるまなざしを大切にす。そこから人生そのものを自由に遊び楽しむ「ところ」が、少しずつ芽生えてくるのではないのか。

最近ぼくは、しきりにそんなことを考えている。

加藤忠史 (理化学研究所脳科学総合研究センター精神疾患動態研究チーム)  
Tadafumi Kato



## はじめに

「こころと脳」の関係については、「こころと脳は別のもの」という心身二元論と、「脳を見ればこころがすべてわかる」という極端な還元論のあいだにも、「こころは脳に依存しているが、脳には還元できない」とする機能主義や、「脳の状態がこころの状態を生み出すときにそれ以上の何かが生じる」という創発理論など、さまざまな考えがあるようだ。

筆者が研究者を目指したときは、もともと無意識のメカニズムを知りたいといった動機であった。しかし、今や、脳を調べることなしにこころのメカニズムを明らかにすることはできないと思い、脳研究を目指した。

心身問題として、2000年以上にわたって議論されてきたこの問題に、結論が出ることはないかもしれず、このようなむずかしい問題に口を出すのははばかられる。しかし、精神医学にとっては、これは決して形而上的な議論の対象ではなく、もっと深刻で抜き差しならない問題である。

## 「こころの病気」という誤解

筆者は、双極性障害、すなわち、従来躁うつ病と言われてきた病気を研究している。こうした精神疾患は、しばしば「こころの病気」と呼ばれる。しかし、「こころ」が「病気」になるだろうか？「筋肉」は病気になるが、「運動」が病気になるわけではない。脳という身体の臓器が病気になることがあっても、こころが病気になるわけではない。

にもかかわらず、いまだに「こころの病気」と呼ばれている。

脳の病気の症状が、こころに現れ

ているから、このように呼ばれるのであろうが、これが誤解の元である。こころに症状が現れているからといって、こころに原因があるわけではないのだが、あたかも原因までがこころの問題であるというように誤解されているのである。

## 双極性障害は脳の病気か？

双極性障害が脳の病気であることについては、たとえば、双生児研究から、遺伝子に関係していることは間違いないこと、リチウムなどの物質が有効なことなど、たくさんの証拠がある。

最近の研究では、多数のMRI研究の結果をメタ分析してみると、前部帯状回、および島皮質という2つの部位の体積が減少していることが報告されている<sup>\*1</sup>。前者は前頭葉の腹内側面に位置し、動物実験では、この部位の破壊によって、恐怖条件づけの消去が障害されることが報告されていることなどから、感情の制御に関与すると考えられている。また、島皮質も感情にかかわっている。

このように、双極性障害に脳の変化が関係していることは間違いなさそうであるが、こうした実証的な証拠を見るまでもなく、実際に患者さんと接してみると、これが脳の病気ではなくて何であろうか、と思わざるを得ない。何か月もうつ状態だった人が、たった一晚眠らずにいた後、躁状態となって、別人のように明るくなり、しゃべり続けるようすを見れば、とうていこころの悩みが原因とは思えない。

双極性障害という病気が存在することを知らない人は、むしろ、「この人って、本当はこういう人だったの!？」と思う人が多いようだ。それまで何十年とその人につきあってきたのに、「これが本当の姿なのか!」と思わせるほど、脳の奥底から変化してしまっている、ということなの

だろうか。

## うつ病

ただし、これがうつ病となると、少々微妙である。

本格的なうつ病の患者さんの場合、頭が働かず、まったく気持ちが晴れないことが、手に取るようにわかる。脳が働かないんだなあ、と強く感じるのである。もちろん、たとえば脳波をとって、音の変化に対する脳波変化を平均加算する「誘発電位」を調べたり、脳血流を測りながら心理課題をしてもらって、その間の脳血流変化を見たりすることで、こうした脳の変化を観察することは可能である。

しかしながら、現状では、うつ病の診断は、ほとんど問診に頼っている。「1日中ずっと憂うつで沈んだ気持ちですか?」とか、「ほとんどのことに興味がなくなってしまったり、いつもなら楽しめていたことが楽しめなくなっていますか?」といった質問への回答によって診断するのである。脳の異常を調べて診断するわけではない。

こころの悩みでも、1日中沈んだ気持ちになったり、いつもなら楽しめていたことが楽しめなくなったりすることはある。その程度が重くて、身体症状(不眠、食欲低下、疲れやすい、動作が遅いなど)も伴っているから、おそらく脳の病気だろう、というところに境界線を引いて診断しているわけであるが、どうしても曖昧さが残る。

そのため、今の診断基準でうつ病(正確には大うつ病性障害)と診断される人の中には、おそらく、こころの悩みというべき人も入っているであろう。

最近の精神科外来では、「最近、具合が悪いのです」とおっしゃるので、よく聴いてみると、普通の嫁姑問題だった、というようなケース

もある。患者さんのほうも、こころの葛藤を脳の問題であるかのように訴える傾向が出てきているように思う。

脳の病気の症状とこころの悩みは、問診に基づく診断では峻別できない。これを克服するためには、単なる悩みなのか、脳に何か病変があるのかが目に見えるようにするため、もっと研究する必要があるのだ。

## 記憶と脳

「こころ」には、「考え」と「気持ち」、すなわち「認知」と「感情」という2つの側面があるが、これまでの脳科学では、記憶、学習、言語といった、認知の領域に関する研究が大きなウェイトをしめてきた(図1)。

中でも、記憶・学習におけるシナプス可塑性の関与は、この40年間の神経科学における最大のテーマであった。シナプス可塑性は、1940年代に、ヘブ(Donald Olding Hebb)により予言された現象である。2つの神経細胞があったとき、繰り返し刺激が起きると、2つの神経細胞をつなぐシナプスでそのつながりが強くなり、これが記憶に関係する、と考えられ、ヘブ則、と呼ばれた。1973年に、ブリス(Timothy Bliss)とロモ(Terje Lomo)により、これに相当する現象、すなわち「長期増強」が発見された。強い刺激が与えられると、海馬のシナプスにおける信号伝達に変化し、これが長く続くことがわかったのである。

その後、このシナプス可塑性にかかわる分子として、NMDA受容体が注目された。NMDA受容体は、脳内で最も代表的な興奮性神経伝達物質であるグルタミン酸の受容体の1つである。シナプスで放出されたグルタミン酸は、次の細胞に働き、ナトリウムイオンを通過させることによって、膜電位を変化させ、この刺激が集まると、標的的細胞は興奮(脱

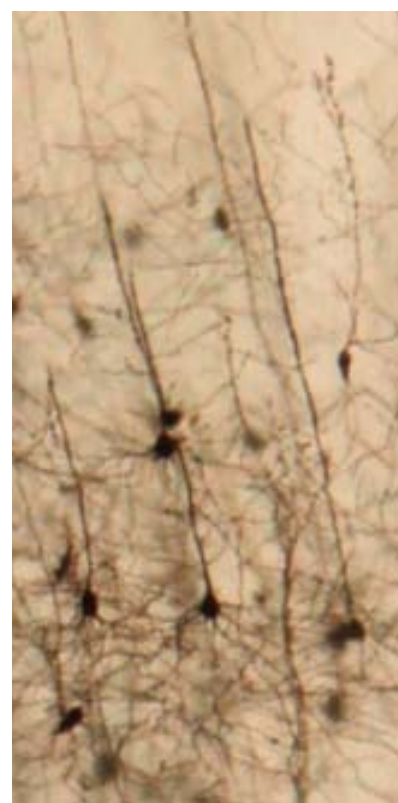


図1 ゴルジ染色法によるマウス大脳皮質の神経細胞

分極)する。この膜電位を変える作用を持つのは、グルタミン酸受容体の中でも、AMPA型と呼ばれる受容体である。一方、NMDA型のほうは、グルタミン酸が作用しただけではイオン透過性は変化しない。グルタミン酸刺激に加え、細胞が脱分極しているときだけ働き、カルシウムイオンを透過させる。通常、細胞内では、細胞外の1万分の1の濃度に保たれているカルシウムイオンが、NMDA受容体の作用により細胞内で急速に高まると、蛋白質をリン酸化させる酵素が作用し、最終的にはAMPA受容体の分布が変化するなどして、シナプスにおける神経伝達効率が変化する。

こうした可塑性が起きる場所は、1950年代に、海馬を手術により摘出後、重度の記憶障害を呈したH.M.さんの事例などから、海馬であろうと考えられた。そして、マー(David Marr)が、1971年に、海馬の神経細胞の構築を見て、この海馬の神経回



路が連合記憶にかかわる仕組みを推測した。

海馬の神経回路で、NMDA受容体によって分子レベルの変化が起きることが、空間記憶の神経メカニズムにかかわっていることは、利根川進博士らの研究で明らかとなった<sup>\*2</sup>。海馬の特定の神経細胞だけでNMDA受容体を失ったマウスでは、長期増強が起きなくなり、空間学習も障害されていたのである。

## 感情と脳

このように、脳科学は、記憶の神経回路を明らかにしてきた。

一方、感情に関しては、恐怖などの一次情動という、生理学的な変化を伴い秒単位で生じる情動の研究がさかに行われてきた。危うく死にそんな体験をした後、その場所に行くと、足がすくむ、という現象は、マウスでも観察できる。この現象、すなわち恐怖条件づけのメカニズムについて、さかんに研究が進められ、扁桃体におけるシナプス可塑性が関与すると考えられた。

一方、双極性障害やうつ病で障害されるような「気分」に関する研究は遅れている。恐怖であれば、動物でも客観的に観察することが可能であるが、気分という主観的な事象は、動物実験だけで明らかにすることは容易ではない。人間での研究からの手がかりが必要だ。

そして、実際に気分の脳内基盤の研究の手がかりとなったのが、抗うつ薬がうつ病に有効であるという発見であった。

## ここに働く薬

統合失調症の治療薬として開発されたイミプラミンが、うつ病に有効であることが詳細な臨床観察によって見いだされたことによって、抗うつ薬が生まれた。

イミプラミンが神経伝達物質であ

るセロトニンおよびノルアドレナリンの再取り込みを行う蛋白質（トランスポーター）を阻害することがわかると、これらが気分にかかわる神経伝達物質なのではないかと考えられた。そして、セロト

ニトランスポーターのみに作用する、選択的セロトニン取り込み阻害薬（SSRI）の抗うつ作用が見出されたことにより、この仮説は完成したように見えた。

しかしながら、この説にもさまざまな矛盾があることが明らかにされた。うつ病がセロトニン不足の症状であれば、セロトニンを増やせば気分がよくなるはずである。しかしながら、抗うつ薬で1時間もすれば脳内のセロトニンは増えているはずなのに、抗うつ薬の効果が現れ始めるには、2週間くらいかかるのはおかしいではないか、というのが、その矛盾の1つである。

そこで、抗うつ薬投与後、2～3週間後に脳内で起きる変化が調べられ、多くの抗うつ薬と電気けいれん療法（ECT）が、海馬でBDNF（脳由来神経栄養因子）を増加させることが発見されたのである<sup>\*3</sup>。

## うつ病と神経可塑性

BDNFは、神経細胞から放出され、隣の神経細胞の突起を伸ばしたりする働きを持つ（図2）。

先ほどのシナプス可塑性は、数分から数時間以内に生じる現象であるが、BDNFによる変化は、神経細胞の形にまで影響する。同じ可塑性でも「構造可塑性（structural plasticity）」と呼ばれる現象にかかわる分子であ

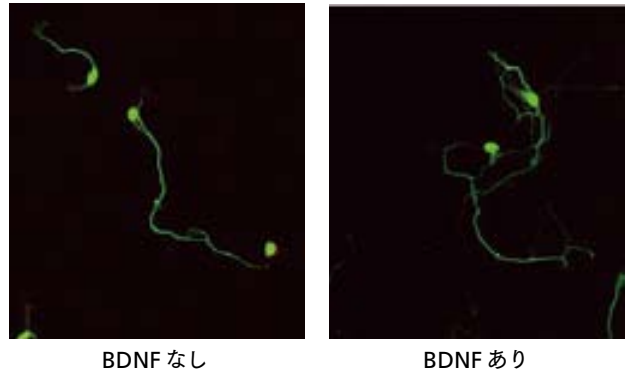


図2 神経細胞に対するBDNFの効果  
12.5日目のマウス胎児由来培養神経細胞を、BDNF (100ng/uL) あり/なしにて4日間培養後、pNeurofilament抗体にて染色した。BDNFを加えた神経細胞では、神経突起が長く、分岐が多い。

る。

これと前後して、ストレスによって、海馬で神経細胞死が起きること、神経突起が萎縮すること、そして神経細胞の新生が抑制されることが、次々と報告された。こうした所見と、BDNFを増やす治療がうつ病に有効であるという事実とあわせて、うつ病では、神経細胞の突起が萎縮したり、神経細胞の新生が低下するなど、神経回路の構造自体が変化している、抗うつ薬はこれを回復させる、という、「うつ病の神経可塑性仮説」が誕生したのであった。

## 気分と可塑性

一方、双極性障害に有効な薬剤であるリチウムにも、神経細胞死を抑制する作用や、神経新生を促進させる作用が見いだされたことから、双極性障害でも何らかの神経細胞の形態変化が関与する可能性が考えられている。

記憶にかかわる神経可塑性と、気分にかかわる神経可塑性は、まったく違ったタイプのものであると推定されるようになってきたのである。

記憶では、さまざまなデータから、海馬の神経回路が関与していることが明らかであるが、気分についてはどうだろうか。

うつ病では、海馬の体積が減少していることなど、海馬との関連を示



図3 マウスの手綱核 (Nissl 染色)  
MHb: 内側手綱核、LHB: 外側手綱核

唆するデータも多いが、海馬というとやはり記憶にかかわる機能のほう为中心的であると思われる。最近、うつ病と関連すると疑われているのは、むしろ、手綱核という場所である(図3)。ドーパミン神経が快感情と関係していることはよく知られているが、手綱核は、ドーパミン神経を抑制する働きがあり、よくないことがあると予測したときに活動する。そして、亡くなったうつ病のかたの脳では、手綱核の体積が減少していると報告されている<sup>\*4</sup>。

双極性障害の場合は、海馬についてはそれほどはっきりしたデータはない。前述の前部帯状回なども候補部位であるが、まだまだわからないことが多い。

筆者らのグループでは、双極性障害を伴うことのあるまれな遺伝病の遺伝子変異を脳だけに発現させるマウスを作成した。その結果、周期的に行動量が増減し(図4)、これがリチウムによって改善することを見いだした<sup>\*5</sup>。このマウスの脳のどこかに、双極性障害を引き起こす部位があるはずなのだ。現在、このマウスを使って、脳内のどのような部位の変化が双極性障害と関係するのか、調べているところである。

## ブレインバンク

十分に構造可塑性が関係している



図4 輪回しをする双極性障害のモデルマウス

かどうかを明らかにするためには、最終的には、うつ病や双極性障害の患者さんの脳で、候補となる部位の神経細胞に形態の異常があるかどうかを確認する必要がある。しかし、残念ながら、うつ病や双極性障害のかたの死後脳で、海馬の神経新生を調べた報告は1本しかなく、この論文では差はなかったとされている。一方、神経細胞の突起を調べた報告はほとんどないに等しい。

うつ病や双極性障害の患者さんの脳を調べる研究はほとんど行われていない。多くの患者さんはうつ病や双極性障害を精神科で治療中に亡くなるわけではなく、内科、外科で亡くなる。そして脳を見ても精神疾患はわからないと思われているので、もし病理解剖されても「異常なし」ということになってしまう。

このままでは、うつ病や双極性障害の原因解明は停滞する恐れがある。こうした研究を進めるには、うつ病や双極性障害のかたに登録していただいて、亡くなられた際に脳を大切に保存して研究に役立てるといって「ブレインバンク」が必要である。

しかし、患者さんに、「亡くなったら献脳してください」などと言ってもまわることにはできない。自発的な意思があつてこそ、である。特に、脳には魂が宿っている、という考えがあるだけに、脳の解剖に抵抗がある人は、今も少なくないと思う。筆者のような研究者にできることは、

「原因を解明し、根本的な治療法や診断法を開発するためには、亡くなったかたの脳を調べる研究が必要だ」と説明することまでである。この先は、当事者のかたがたの考え次第である。

## おわりに

このように、こころのメカニズムを知りたいと思って脳研究を始めた筆者であるが、最近では、患者さんのDNAを調べて原因となっている遺伝子変異を探索したり、動物の脳を観察して、どこに異常があるかを調べたりする研究だけでなく、ブレインバンクについての啓蒙をしたり、患者会を支援したりと、社会との接点も増えてきた。こころと脳に取り組むということは、人間社会の最も奥深くに入り込むことなのかもしれない。

「こころと脳」というテーマであれば、デカルトの心身二元論からチャーチランドの神経哲学まで、考察すべきことは山ほどあろうが、筆者にとって、「こころと脳」の問題は、かように現実的な課題である。

## 参考文献

- 1) Bora E, Fornito A, Yücel M, Pantelis C. Voxelwise meta-analysis of gray matter abnormalities in bipolar disorder. *Biol Psychiatry*. 2010 Jun 1;67 (11) : 1097-105.
- 2) Tsien JZ, Huerta PT, Tonegawa S. The essential role of hippocampal CA1 NMDA receptor-dependent synaptic plasticity in spatial memory. *Cell*. 1996 Dec 27;87 (7) : 1327-38.
- 3) Nibuya M, Morinobu S, Duman RS. Regulation of BDNF and trkB mRNA in rat brain by chronic electroconvulsive seizure and antidepressant drug treatments. *J Neurosci*. 1995 Nov;15 (11) : 7539-47.
- 4) Ranft K, Dobrowolny H, Krell D, Bielau H, Bogerts B, Bernstein HG. Evidence for structural abnormalities of the human habenular complex in affective disorders but not in schizophrenia. *Psychol Med*. 2010 Apr;40 (4) : 557-67.
- 5) Kasahara T, Kubota M, Miyauchi T, Noda Y, Mouri A, Nabeshima T, Kato T. Mice with neuron-specific accumulation of mitochondrial DNA mutations show mood disorder-like phenotypes. *Mol Psychiatry*. 2006 Jun;11 (6) : 577-93.

# ロボットを通じて考えるココロの未来

## 認知発達ロボティクスの挑戦

浅田稔 (大阪大学大学院工学研究科教授)  
Minoru Asada



### 1 まえがき

こころの未来を語ろうとするとき、こころの過去と現在はどこにあるのだろうか？ と考えるのは理系筆者の特色だろうか？ しかし、それを語らずして未来は語れない。ここでは、過去や現在を既存の分野からの捉え方で論じるのではなく、「ロボット」という、一見、こころとは距離のありそうな人工物を通じて考えてみる。「こころ」の表記に関して、筆者は、個人的かつ意図的に以下のように使い分けている<sup>\*1</sup>。

- ・心：人間の大人の正常な心。
- ・こころ：未熟もしくは、こころらしきものがあると考えられる動物のこころなど。
- ・ココロ：人工物の心もどき、もしくはこころもどきが近いかもしれない。カタカナは四角くて、いかにもである。

上記に従えば、本稿は、ココロを創る試みを通して、赤ちゃんのこころの発生なぞに迫ろうとする。以下では、まず最初に発達マップと認知発達ロボティクスについて再考し、そのうち、われわれのプロジェクトの研究成果からココロの形成に関連するものを紹介し、ココロからこころへの橋渡しの可能性を論ずる。

### 2 発達マップ

発達の様相に関しては、文献<sup>\*2</sup>の第7章に論じているので、参照していただくとして、その多様相を踏まえた発達マップを考える。大きく2つの様相がある。はじめに、個体ベースの認知発達で主に初期、そして、個体間の相互作用による社会性の発達で主に後期である。脳科学／

神経科学（内部メカニズム）は主に前者、認知科学／発達心理（行動観察）は主に後者と関係する。本来、認知発達としてシームレスであるが、理解の対象の表象レベルに大きなギャップがある。認知発達ロボティクスは、その溝を埋めるだけでなく、新たな分野の創出を狙う<sup>\*3</sup>。以下では、認知発達ロボティクスを概観し、そのうち、ココロの設計に関連する研究を提示し、こころへのつながりを考察する。

ヒトの脳脊髄系の概要と大まかな機能構成は、進化を反映した階層構造となっており、脊髄、脳幹、間脳、小脳、大脳辺縁系、大脳基底核、大脳新皮質からなる。浅田、國吉ら<sup>\*2</sup>は、これらが、行動のための知能の各階層に対応するとしている。ここでは、非常にラフな提案として、この構造が個体としての時間的発展（発達）にも適用可能と考える。図1の中央に、これに対応する機能的流れとしての反射、感覚運動、知覚、随意運動、高次認知を示している。

### 3 認知発達ロボティクスのアプローチ

個体ベースの認知発達で、計算論的には、個体内の学習・発達メカニズムが焦点となり、個体間の相互作用による社会性の発達では、他者を含む環境設計が課題となる。また、これまで、認知発達ロボティクスでは、認知発達の計算モデルの構築が主であったが、人間自身の発達過程の理解を深める上で、人間を知るための新たな手段の提供も考慮されるべきであろう<sup>\*4</sup>。まとめると、

#### A 認知発達の計算モデルの構築

1. 仮説生成：既存分野からの知見を参考にした計算モデルや新たな仮説の提案
2. コンピュータシミュレーション：実機での実現が困難な過程の模擬（身体成長など）

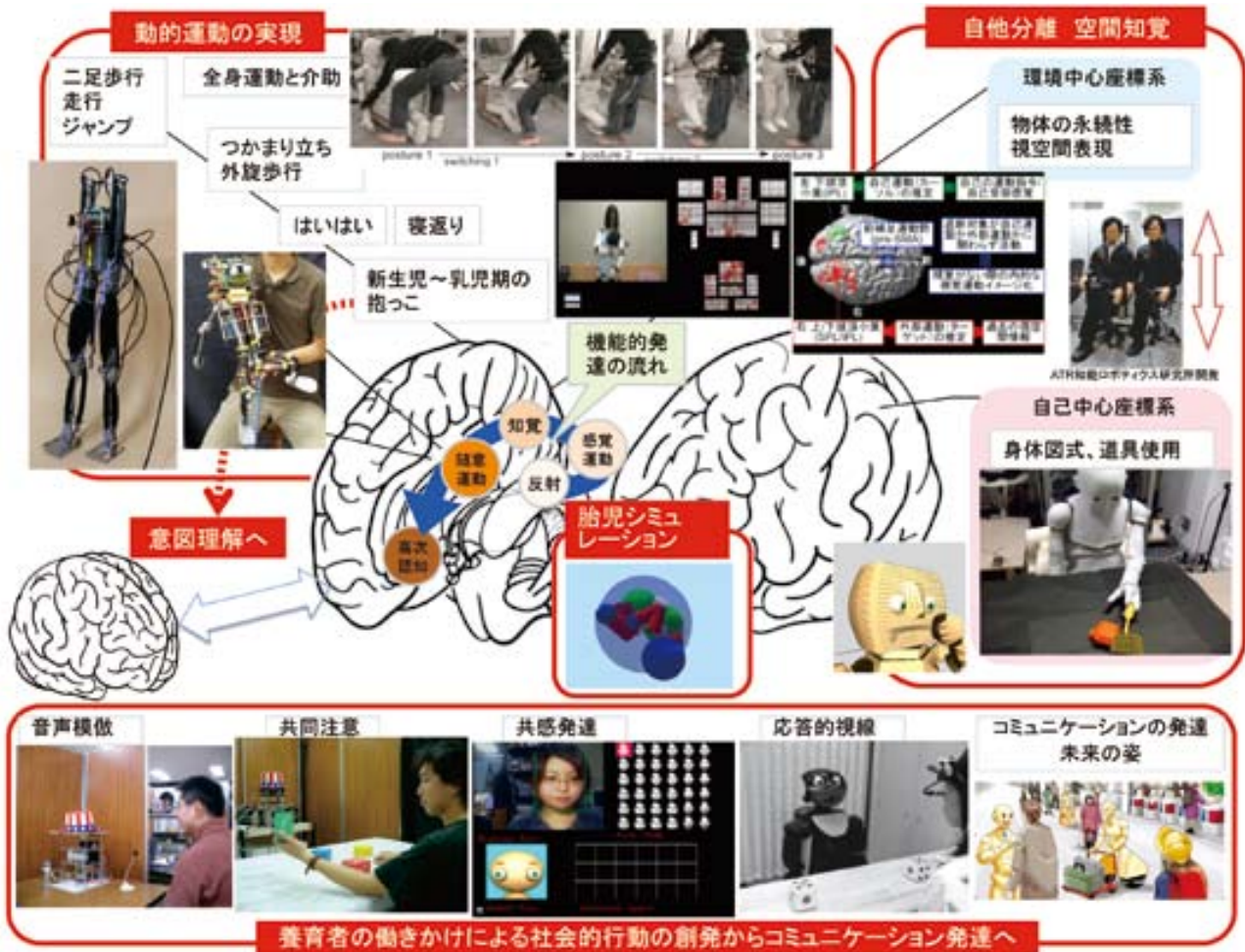


図1 認知発達マップ(文献\*4のFig.3を拡充改編)

3. 実エージェント（人間、動物、ロボット）によるモデル検証→1へ

B 人間を知るための新たな手段やデータの提供→結果のAへのフィードバックやAからの結果のフィードバックもあり。

1. イメージングによる脳活動の計測
2. ヒト、動物を対象とした検証実験
3. 新たな計測手段の開発と利用（提供）
4. 再現性のある（心理）実験対象の提供

筆者が総括を務めるJST ERATO 浅田共創知能システムプロジェクトでは、上記に従った各種の研究を実施している。図1に示された機能的流れの周囲に、それぞれのテーマ

と実施研究を示す。以下では、おもにココロに関連する話題をとりあげる。

## 4 自己身体感覚から空間知覚へ

### 4-1 胎児・新生児の筋骨格・神経系発達シミュレーション

運動制御の初期のレベルは、脊髄と脳幹による反射と定型行動パタンの生成であろう。上位中枢を経由しない脊髄反射、延髄による身体各部を協調させた一定行動パタンの生成機能、上位中枢による脊髄がパターン化した運動の単位を利用した動作組み立て、大脳の頭頂連合野による感覚運動情報の統合、身体や空間の表現・認識、大脳の運動野による運動のさまざまなパタンのレパートリ表現や大脳基底核と連携したさまざま

な運動パタンの切り替え、および組み合わせ実行などの機能に発展していく（書籍<sup>\*5</sup>などに基づく）。

この時期における研究課題として、身体表象の獲得過程があげられる。身体表象獲得は、身体性に基づく認知発達にかかわる最も基本的な問題である。ボディスキーマやボディイメージと呼ばれている身体表象がどのように獲得されるかは、大ミステリーである。なかでも、新生児模倣のミステリーが著名で、生得論と学習発達論の議論はつきない。後者に関しては、胎児の母胎内での動きの可視化により、少なくとも14～15週あたりから、顔や自身の身体への接触運動が始まっており、これらの知見に基づく学習問題が扱われているが、胎児から新生児期の感覚運動創発の構成的アプローチとし

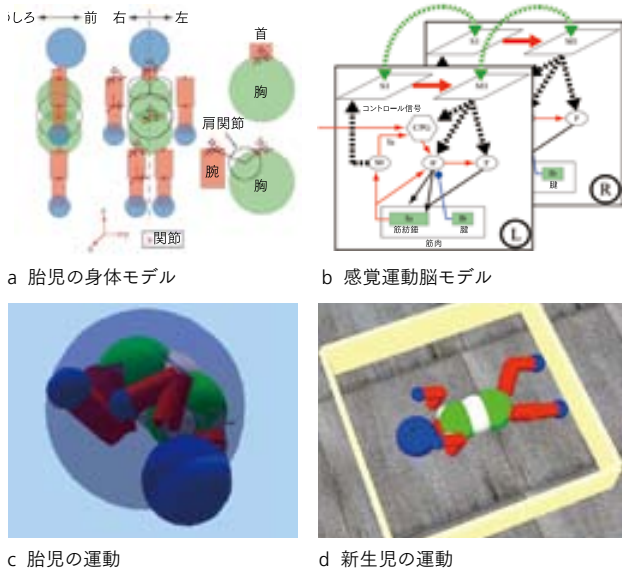


図2 胎児の感覚運動マップ学習

て、Kuniyoshi and Sangawa<sup>\*6</sup>の研究がある。彼らは、人の身体、神経系の生理学的知見に基づく個々のモデルを組み合わせ、1つの赤ちゃんモデルとした。そして、このモデルを用い、母胎中の胎児の発達および誕生後の行動をシミュレーションし、人の運動発達の理解を目指した。図2aに球や円筒で近似した胎児モデルを、bに脳のモデルを示す。

このシミュレーションでは、ヘブ学習や自己組織化マッピングにより、図2bの点線部分の全結合（解釈としては結合が未完）が、構造化され、結果として、体性感覚マップが構成され、それに準じて行動が徐々に秩序だったものに変化したと報告されている。現在では、詳細なパラメータ調整や各種の運動の構造化に関して、詳細精緻化され、種々の研究テーマとして展開されている（文献<sup>\*7,8</sup>など）。

#### 4-2 空間概念の獲得

身体を環境との関係で認識する場合、最も基本となる環境情報は空間概念である。サルを使った実験では脳内においてはVIP野において頭部中心座標が表象されていることが知られている。われわれは赤ちゃんがしきりに手先に注意するというハ

象するニューロンが自己組織化的に生じるモデルを提案した（図3）。さらに、この頭部中心座標を表象するニューロンモデルを基盤として、手で顔に触るときの感覚情報の統合を行い、実際にVIP野で観測されるニューロンの振る舞いと同等な性質を持つニューロンを自己組織化的に構成した（図4）<sup>\*9</sup>。

#### 4-3 顔表象の獲得

赤ちゃんは早い時期から新生児模倣に見られるような顔に対する身体表象を持っていると考えられるような行動を示す。特に顔についての身体表現の獲得において興味ある問題は、a) 身体表現は、触覚情報・視覚情報・体性感覚情報を統合したマルチモーダルな表現となっていると考えられるが、顔の視覚情報を直接得ることはできないということと、b) 口や目、鼻などの顔のパーツの情報をいかにして切り出すか、という問題である。

ンドリガードの経験が、頭部中心座標を構成するときの重要な因子として働いている可能性を考え、手の姿勢情報をリファレンスとして、さまざまな網膜位置と眼球角度の組み合わせにもかかわらず頭部からの相対的關係が同じ位置であることを表

a) については、見えない部位の視覚情報をいかにして見えている部位の視覚情報と統合するかが問題となる。われわれは手先をプローブ（探針）として、視野内で腕を動かして、運動中の関節角度の変化量と手先位置変化量の間を関係づける写像をニューラルネットによって学習し、その結果を用いて視野外でも腕の関節角度を通して手先位置を推測するモデルを提案した。

b) については、すべての触覚センサを同一のものと捉えているが、一様な触覚センサの中から目や鼻などの「パーツ」という特徴的な部位を検出することが必要となる。そこで、われわれは接触運動中の各種センサ入力値に発生する不連続性をもとに、顔表面からパーツを構成する特徴的な触覚センサ情報を抽出するモデルを提案した。さらに抽出した

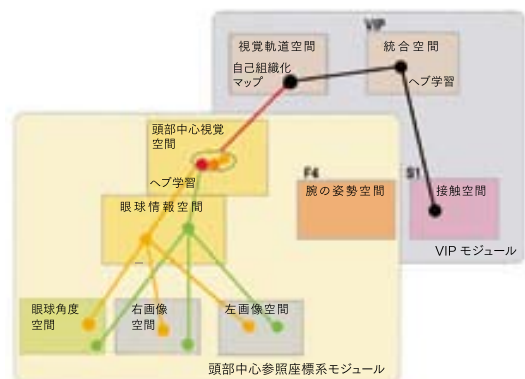


図3 VIPニューロンモデル

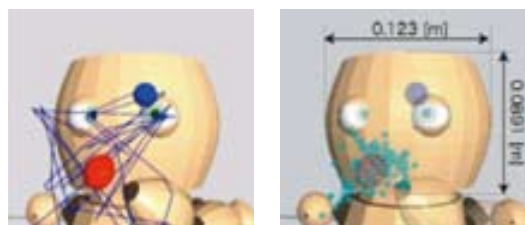


図4 実験の様子と推定された位置

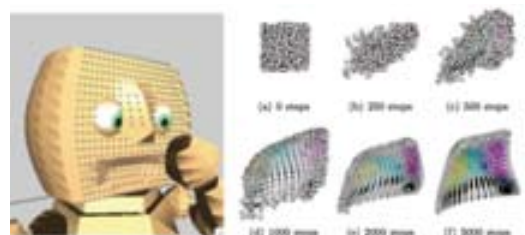


図5 顔表面の触覚分布(左)と分布推定の学習過程(右)

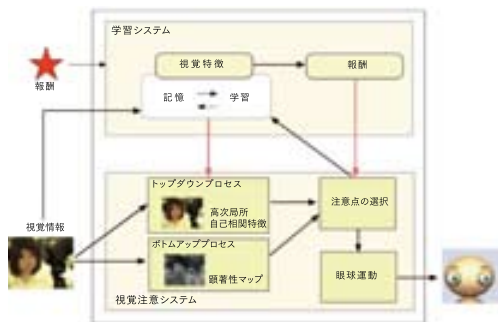


図6 アイコンタクト獲得モデル

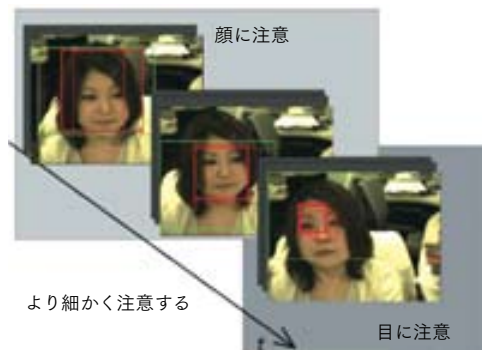


図7 モデルによるアイコンタクトの獲得

顔の情報を、他者の顔の視覚情報から抽出される特徴的な視覚情報と対応関係をとることにより、顔の模倣の基盤となるモデルを提案した<sup>\*10</sup>。

図5に実験の様子を示す。同図左にシミュレーション用の顔面を示す。21×21の触覚要素が格子状に並んでいるが、その配置は未知とする。同図右の学習過程により、最初ランダム配置であったが、徐々に自己組織化され、左眼(マゼンダ)、鼻(シアン)、右眼(イエロー)、口(ブラック)の位置関係が獲得された。

### 5 養育者の働きかけによる社会性行動の創発からコミュニケーション発達へ

社会的行動創発にむけたポイントとして、環境因子としての養育者の働きかけに注目する。それらの例として、共同注意、共感発達、音声模倣を挙げる。

#### 5-1 共同注意の発達

共同注意は、養育者と乳児が同じ対象に視線を合わせることで、コミュニケーションの始まりと言われているが、養育者の応答による自身

の行動との因果性発見が視線合わせを導くことがシミュレーションで示されている<sup>\*11</sup>。さらに、随伴性の発見と適用の繰り返しによる新たな随伴性発見が共同注意に関連する行動の発現順序を規定することを示した研究もある<sup>\*12</sup>。その際、養育者の応答レベルにより、期待される行動の発現が左右されるシミュレーション結果が示されている。

赤ちゃんは生得的に顔に対して選好性を持つと言われているが、顔の詳細なパターンの認識やそのコミュニケーションにおける意味づけは、後天的にコミュニケーションを通じた学習によって獲得されると考えられる。そのようなコミュニケーションを通じたカテゴリ化の例として、コミュニケーションにおいて報酬予測が最も正確にできる情報を抽出することを目的として学習することによりアイコンタクトを獲得する学習モデルを提案した<sup>\*13</sup>。システムは大きく分けて画像処理システムと学習システムからなる(図6)。

画像処理システムでは、ボトムアップとトップダウンの2つのプロセスによってカメラ画像の中でロボットが注意すべき場所が計算される。ボトムアップなプロセスでは画像の顕著性に基づいて注意点の候補が選択され、トップダウンなプロセスでは学習システムで学習された画像特徴量を検出して注意点の候補とする。学習システムでは、ロボットが報酬を得たときに、その前後の画像群を記憶し、それらの画像群を識別する画像

特徴量を学習する。本モデルをバーチャルなロボットに実装して、実際に人間とインタラクションすることにより、ロボットの注意がだいに顔から目に移っていく結果を得た(図7)。

#### 5-2 直感的親行動による情動マッピングの獲得

人間は幼児時代に養育者による「直感的親行動(intuitive parenting)」と呼ばれる行動を受ける(図8)。直感的親行動とは、養育者が自分自身の経験と幼児の経験を対応づけるように幼児を促し、その経験の感じ方、表現の仕方などを実況解說的に教える行動である。直感的親行動を受けることによって、幼児はその経験から得た状態と表現すべき人間の表情の関連性を強固にすると考えられる。われわれは、ロボットにダイナミクスを持つ情動モデルを組み込み、養育者が幼児に行う直感的親行動を基にして、変化した情動状態とそのとき表出されている他者の表情との結合を強める学習モデルを提案した(図9)。学習後、ロボット

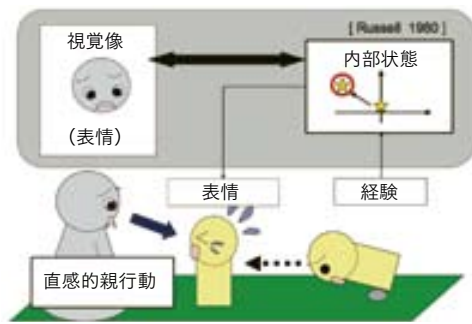


図8 直感的親行動の状況

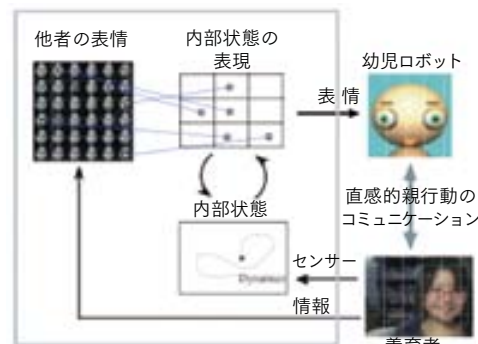


図9 直感的親行動モデルの動作

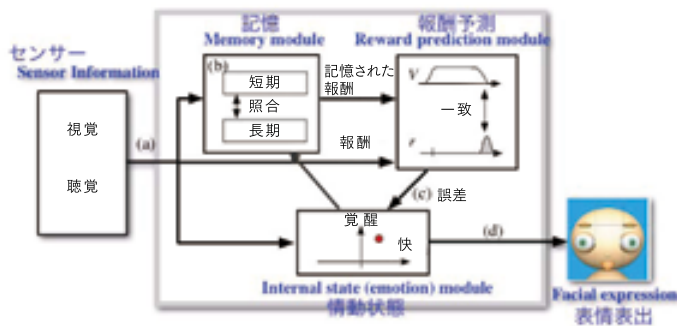


図10 初期コミュニケーション獲得モデル

は内部状態空間中で基本的な表情の範疇を見出すことが可能となり、入力された表情から情動状態を推測し、推測した人間の情動状態によって人間に同調した表情の表出が可能となった<sup>\*14</sup>。

### 5-3 初期コミュニケーション行動の獲得：イナイナイバー

共感発達の研究では乳幼児の最初期のコミュニケーションのモデル化を行った。発達心理学においては、乳児は4カ月ごろを境として養育者が与える規則性のある行動に敏感になり、この時期に乳児は自分の母親のタイミングや相互作用における相対的な随伴性への調律を発達させ始めると言われている。本研究では、そのような直感的親行動によるコミュニケーションの1つとして「イナイナイバー」をとりあげ、その遊びが成立するための赤ちゃんに必須の条件を考慮して赤ちゃんの認知発達モデル化を行った(図10)。

モデルでは、報酬予測にかかわるドーパミンニューロンの機能と、海馬と扁桃体の相互作用に関する脳科学の知見を取り入れ、赤ちゃんロボットが情動に基づいて養育者の行動を記憶し、その記憶の報酬に基づいて養育者の行動を予測するモデルを提案した。このモデルをバーチャルなロボットに実装し、実際に養育者に見立てた研究者と相互作用をさせる実験を行った。

赤ちゃんロボットは記憶モジュールが機能しない段階では、養育者の

行動に対して驚きを示す覚醒レベルがあがるのみであるが、記憶モジュールが機能して、養育者の行動を記憶できるようになると、その記憶をもとに養育者の行動を予測し、予測と実際の比較から親の「イナイナイバー」によって快の情動が現

れること確かめた。本モデルは4カ月ごろの養育者との相互作用における赤ちゃんの情動変化のメカニズムについて示唆を与えるものである<sup>\*15</sup>。

### 5-4 音声模倣

生後2~3カ月ごろから始まるクーイングは、乳児の発声練習と言われているが、この時期の養育者の働きかけ、とくに模倣が乳児の発声頻度を高めることや、乳児も養育者を模倣することで、相互に模倣することが観察されている。また、生後6カ月までは、乳児はあらゆる言語の母音を識別可能だが、6カ月をすぎるところには、母語のカテゴリーが構築され、離散的な識別(マグネット効果)を行うと言われている。また、聴覚フィードバックによる発話の自己モニタリングは、音声生成において重要な役割を果たしているが、それが遅延することで、吃音が発声することから、発話の自己モニタリングにおいては、自己音声の音響的特徴と調音動作の双方が用いられている可能性がある<sup>\*16</sup>。

そこで、最初に養育者がオウム返しすることで、母音のカテゴリーを獲得させる音声模倣ロボットの学習

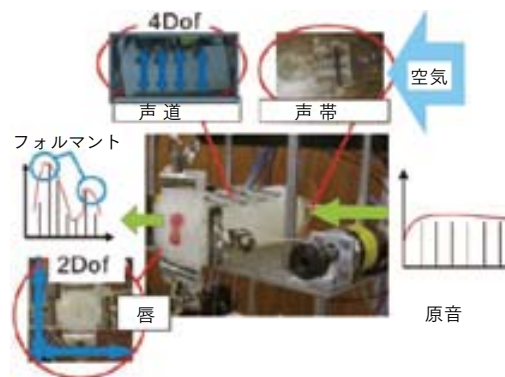


図11 発話のしくみ

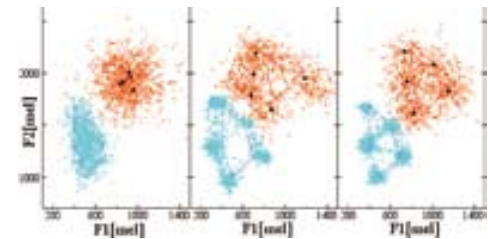


図12 再現された母音獲得過程

では、聴覚層と調音層をヘブ学習で連結させることで、話せることが聞くことに繋がることを示した<sup>\*17</sup>。

次に視覚による口唇形状模倣を含めた学習の加速<sup>\*18</sup>、そして、マグネット効果と相互模倣の期待効果によるバイアスを考慮した母音獲得<sup>\*19</sup>の構成的研究を行った。実際の養育者は、つねづね乳児の模倣をしていると限らないが、そのように仮定することで、模倣部分を検出し、その過程でより自然な母音を獲得する研究も行われている<sup>\*20</sup>。

図11に発話システムを示す。声道を模したシリコンチューブを変形させて、人工声帯の原音を調整し、母音らしい音声を発生する。図12に、Ishihara et al.<sup>\*19</sup>のシミュレーション結果を示す。第1(水平軸)、2(垂直軸)フォルマント空間で、水色が親の母音カテゴリーの五角形とその周辺の応答、赤が赤ちゃんの母音カテゴリー周辺の応答で、当初、互いがランダムに応答しながらも、マグネットバイアスと自己鏡像バイアスが適切に働くことで、乳児の母音カテゴリーが適正な形に収斂している様子が分かる。



図13 表出可能な表情の例

## 6 おわりに

赤ちゃんのところに繋がるロボットのココロの形成にかかわる身体表象や空間知覚、さらに初期社会性獲得としての共感発達、初期コミュニケーションの発達、共同注意からアイコンタクト、音声模倣などについて研究例を示し、その可能性を示した。個別の事例は、個別の機能を再現したが、内在するこころの要件に関しては、若干曖昧である。特に、近年話題を呼んでいるミラーニューロンシステムによる他者の行動から意図理解への道筋は本稿では触れていない。別項でその可能性を論議している<sup>\*21</sup>。乾は構成的認知神経科学の観点から、こころの要件とその発達の獲得過程の仮説を唱えている<sup>\*22</sup>。さらに、根源的な課題として、「情動」をどう扱うかが基本課題として残っている。今後扱わなければならない問題である。

われわれはCB2をはじめとして、一連のプラットフォームを開発し、発表してきた。認知発達のモデルを構築する上で人間のかかわり合いも研究対象であり、その意味で、養育者である人間が実際の赤ちゃんと同じような相互作用をおこす気持ちになる写実型の赤ちゃんロボットの開発に欠けていた。そのような動機から、愛着形成を通じた発達研究のための写実的な子供型表情表出口ボッ

ト Affetto を開発中である<sup>\*23</sup>。今後は、このようなロボットを使い、養育者側の行動の解析および発達モデルの精緻化を実施予定である。図13は、Affetto の多様な表情表出である。

本稿を作成するにあたり、日頃から討論を通じて、貴重なご意見をいただいている、JST 浅田プロジェクトグループリーダの乾敏郎教授（京大）、國吉康夫教授（東大）、石黒浩教授（阪大）、細田耕教授（阪大）、元研究員の荻野正樹助教（阪大）、吉川雄一郎講師（阪大）、プロジェクト研究員、参画している院生諸君に感謝する。

### 参考文献

- 1) 浅田稔『ロボットという思想——脳と知能の謎に挑む』NHK ブックス (1158), 2010.
- 2) 浅田稔、國吉康夫『ロボットインテリジェンス』岩波書店, 2006.
- 3) 浅田稔「認知発達ロボティクスによるパラダイムシフトは可能か？」日本ロボット学会誌, Vol. 28, No. 4, pp. 375-379, 2010.
- 4) Minoru Asada, Koh Hosoda, Yasuo Kuniyoshi, Hiroshi Ishiguro, Toshio Inui, Yuichiro Yoshikawa, Masaki Ogino, and Chisato Yoshida. Cognitive developmental robotics: a survey. IEEE Transactions on Autonomous Mental Development, Vol. 1, No. 1, pp. 12-34, 2009.
- 5) 丹治順『脳と運動：アクションを実行させる脳』共立出版, 1999.
- 6) Y. Kuniyoshi and S. Sangawa. Early motor development from partially ordered neural-body dynamics: experiments with a cortico-spinal-musculoskeletal model. Biol. Cybern., Vol. 95, pp. 589-605, 2006.
- 7) 國吉康夫、寒川新司、塚原祐樹、鈴木真介、森裕紀「人間的身体性に基づく知能の発生原理解明への構成論的アプローチ」日本ロボット学会誌, Vol. 28, No. 4, pp. 415-434, 2010.
- 8) 森裕紀、國吉康夫「新生児の原始歩行を誘発する胎児の子宮内触覚経験による脚間協調運動の自己組織化」第28回日本ロボット学会学術講演会予稿集, pp. CD-ROM, 2010.
- 9) Sawa Fuke, Masaki Ogino, and Minoru Asada. Acquisition of the head-centered peri-personal spatial representation found in vip neuron. IEEE Transactions on Autonomous Mental Development, Vol. 1, No. 2, pp. 131-140, 2009.
- 10) S. Fuke, M. Ogino, and M. Asada. Body image constructed from motor and tactile images with visual information. International Journal of Humanoid

Robotics (IJHR), Vol. 4, No. 3, pp. 347-364, 2007.

11) Hidenobu Sumioka, Yuichiro Yoshikawa, and Minoru Asada. Causality detected by transfer entropy leads acquisition of joint attention. Journal of Robotics and Mechatronics, Vol. 20, No. 3, pp. 378-385, 2008.

12) Hidenobu Sumioka, Yuichiro Yoshikawa, and Minoru Asada. Development of joint attention related actions based on reproducing interaction causality. In The 7th International Conference on Development and Learning (ICDL08), pp. CD-ROM, 2008.

13) Masaki Ogino, Ayako Watanabe, and Minoru Asada. Detection and categorization of facial image through the interaction with caregiver. In The 7th International Conference on Development and Learning (ICDL08), pp. CD-ROM, 2008.

14) Ayako Watanabe, Masaki Ogino, and Minoru Asada. Mapping facial expression to internal states based on intuitive parenting. Journal of Robotics and Mechatronics, Vol. 19, No. 3, pp. 315-323, 2007.

15) Masaki Ogino, Tomomi Ooide, Ayako Watanabe, and Minoru Asada. Acquiring peekaboo communication: Early communication model based on reward prediction. In Proceedings of the 6th IEEE International Conference on Development and Learning, pp. 116-121, 2007.

16) 田口明裕、笹岡貴史、乾敏郎「遅延聴覚フィードバックを用いた発話の自己モニタリング機構の検討」第5回日本認知心理学会, 2007.

17) Yuichiro Yoshikawa, Minoru Asada, Koh Hosoda, and Junpei Koga. A constructivist approach to infants' vowel acquisition through mother-infant interaction. Connection Science, Vol. 15, No. 4, pp. 245-258, Dec 2003.

18) Katsushi Miura, Minoru Asada, Koh Hosoda, and Yuichiro Yoshikawa. Vowel acquisition based on visual and auditory mutual imitation in mother-infant interaction. In The 5th International Conference on Development and Learning (ICDL06), 2006.

19) Ishihara Hisashi, Yuichiro Yoshikawa, Katsushi Miura, and Minoru Asada. Caregiver's sensorimotor magnetsguide infants' vowels through auto mirroring. In The 7th International Conference on Development and Learning (ICDL08), pp. CD-ROM, 2008.

20) Katsushi Miura, Yuichiro Yoshikawa, and Minoru Asada. Realizing being imitated: vowel mapping with clearer articulation. In The 7th International Conference on Development and Learning (ICDL08), pp. CD-ROM, 2008.

21) 浅田稔「ミラーニューロンシステムが結ぶ身体性と社会性」日本ロボット学会誌, Vol. 28, No. 4, pp. 386-393, 2010.

22) 乾敏郎「共創知能機構」第28回日本ロボット学会学術講演会予稿集, pp. CD-ROM, 2010.

23) 石原尚、吉川雄一郎、浅田稔「愛着形成を通じた発達研究のための写実的な子供型表情表出口ボット Affetto の開発」第28回日本ロボット学会学術講演会予稿集, pp. CD-ROM, 2010.7.



## 日本の若者の問題についての心理学的・社会学的考察： 日本における外国人研究者からの視点

トゥーッカ・トイボネン (日本学術振興会特別研究員、京都大学文学研究科)

Tuukka Toivonen

ビナイ・ノラサクンキット (日本学術振興会外国人研究員、ミネソタ州立大学心理学部/こころの未来研究センター)

Vinai Norasakkunkit

カール・カッセゴール (日本学術振興会特別研究員、イエテボリ大学・京都大学大学院文学研究科)

Carl Cassegard

マイケル・ジーレンジガー (ジャーナリスト、カリフォルニア大学バークレー校客員研究員)

Michael Zielenziger

内田由紀子 (こころの未来研究センター助教)

Yukiko Uchida

### はじめに

内田由紀子

2010年6月12日に、ワークショップ「Psychological and Sociological Perspectives on Japanese Youth Issues: Views from Foreign Researchers in Japan (日本の若者の問題についての心理学的・社会学的考察：日本における外国人研究者からの視点)」が京都大学グローバルCOEプログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」とこころの未来研究センター「青年期の社会的適応プロジェクト」との共同で開催された。

このワークショップは、京都大学に滞在している3名の外国人研究者の興味・関心が共通していることから企画された。3名の専門領域は、心理学・社会学と異なっているが、それぞれが「日本の若者の問題」について関心を抱いていたのである。同じトピックに関心を持つ者が集まり互いの視点を知ることで、新たに見えてくるものはないだろうか。また、外国の研究者が現在の日本社会を考察したときに見えてくる視点とはいかなるものであろうか。さらには、ニートやひきこもりなどの、今日の若者が抱える問題はどのよう

な枠組みで理解し、支援をすすめるべきなのだろうか。

ワークショップは文学研究科のトゥーッカ・トイボネン氏、こころの未来研究センターのビナイ・ノラサクンキット氏、カール・カッセゴール氏の3名の講演と、『ひきこもりの国』(光文社)の著者であり、日本の若者の問題に詳しい著名なジャーナリストのマイケル・ジーレンジガー氏をメインコメンテーターに迎えて開催された。社会学者のトゥーッカ氏の話題提供には社会心理学・文化心理学を専門とする内田由紀子・こころの未来研究センター助教が、心理学者のノラサクンキット氏の話題提供には社会学者である太郎丸博・京都大学文学研究科准教授が、社会学者のカッセゴール氏の話題提供には発達心理学者の近藤恵・こころの未来研究センター研究員がそれぞれコメントを行うなど、社会学と心理学の相互の連携を模索する会となった。日本の若者の問題に関心のある学内外の研究者が参加し、活発な議論が行われた。本稿では、各氏の話題提供とジーレンジガー氏の指定討論での発言の要約を掲載する。

### 話題提供 1

#### 若者問題は どう生み出されるのか？

トゥーッカ・トイボネン

今日は、若者そのものではなく、「若者の問題」の性質について考えてみたいと思います<sup>\*1</sup>。学術的分析においてさえ隠されていることが多い日本の若者の問題の成り立ちには、重要なロジックが存在します。このロジックを説き明かすための1つの方法は、次のように質問してみることです。例えば、「ひきこもり」という言葉はどのようにして広く関心を集めるようになったのか？ そのさまざまな定義はどのようにして生まれたのか？ ニートについては？ われわれはこうした問題とその「フレーム」を所与のものとしてそのまま受け入れるべきか？

若者の問題は「現実」の正確な描写ではないし、また正確な描写になりえないというのが私の立場です。むしろ、「公的な論争の場において、社会が『問題』であると見なした、『若者』を取り巻く推定上の状態」と定義することができます。社会が、ある状態を「問題」とすると認識す

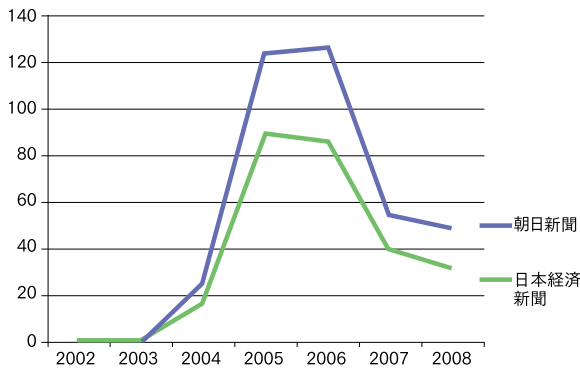


図1 「若者問題ウェーブ」の例

「ニート」について取り上げた年間記事数(朝日新聞、日本経済新聞、2002～2008年)

注:「NEET」か「ニート」のいずれか(もしくは両方)の表記を含む

るプロセスこそが若者問題を規定します。この理解に基づいて、私は現在の日本の文脈において、若者の問題が提起され、定義され、評価され、そして論争の対象となっている方法を形づくっている5つの「若者問題メカニズム」を紹介します。

### 「若者問題ウェーブ」

若者問題ウェーブ(youth problem waves)というコンセプトにより、全体像、すなわち特定の問題が生じてくるタイミングとその進化変遷を見ることができます。図1は、2002年から2008年までの朝日新聞と日本経済新聞にニート(NEET)という用語が含まれている年間記事数を示しています。これにより、2005年から2006年にかけて、この問題が特に強調され、「ニートウェーブ」として現れていることがわかります。この期間に起こったのは、われわれが初めてこの「問題」に気づいたということばかりでなく、それを特定の枠組み(「怠け者で、やる気がなく、自分自身の無気力に責任があるニート」として理解したということです。また、2つの新しい若者支援対策が2005年から2006年にかけて実施されましたが、これは若者の問題と政策の間の緊密な結び付きを示しています。

### 若者問題を囲む「業界」

これらのウェーブ(高まり)は一種の「業界」(すなわち、新しいト

ピックのまわりにフレキシブルに集まってくる組織、ネットワーク、個人のゆるいグループ)を生み出しつつあり、現在、その最大のものの1つが「婚活業界」です。そして、この「業界」は若者問題の論争を強化し、持続させています。(エキスパート、

学者、若者支援リーダーなどを含む)「専門家」グループ、その他の法人が特定の問題をめぐって生まれており、その問題の定義や意味合いを変えたり、そこから何らかの利益を引き出したりしています。親のグループはしばしば特定の若者問題をメディアに取り上げさせています。政策立案者や政府は一般に目立たないものの、強力な役割を演じています。これらのいわゆる「アクター」は相互にコミュニケーションしたり、業界外のアクターに圧力を加えたりしています。

皮肉なことに、若者自身は、若者問題「業界」の活発な役割を担っておらず、いわゆる声なきグループ(muted group)にすぎません。「大人」(親、メディア、あるいは政府)は彼らと語るのではなく、彼らについて語っているにすぎません。当事者(ニート、あるいはひきこもりと見なされる人など)であれ、その他の関係する若者であれ、彼らは一般に若者問題のシンポジウムや政策論争において声を上げることはほとんどありません。

### クレイム(申し立て)する人々・人た(claims-makers)

玄田有史氏、斎藤環氏、稲村博氏のような著名人を含む、所与の「問題」を訴える強力な人々から声があがっていることはよく知られています。彼らが分析する若者の問題は例

外なく常に「悪化」している傾向にあると主張されます。「問題あるグループ」が膨張し、社会秩序に対する脅威となっていると指摘されがちです。説得力のある証拠を示すために、クレームメーカーは非常にありきたりなやり方で調査を実施し、次のように主張します、「このグループを見よ、2002年から2005年にかけて50%、その規模が拡大している。今後10年のうちに何か手を打たなければ、今の2倍に拡大しかねない」。しかし、注意深く見れば、これらの推定上の増加は定義の方法によって説明できる場合が多いのです。さらに、一般にクレームメーカーの主張においては、社会的規範から若者が何らかの面で逸脱していることが強調されます。特定の若者が中産階級の基準に合わない(登校拒否は学校を避ける、ニートは仕事を拒否するなど)こと、それゆえ「ふさわしい青少年・社会人」ではないことを指摘しています。主なアクターやメディアはこのような挑発的戦術を活用しています。

### 職業間の綱引き

この用語は、若者の問題は一般に、自分自身の方略を売り込むために、「問題」に対する自分自身の見解を押し出すさまざまな「専門家」グループ(たとえば若者更正支援者、臨床心理学者、医師、学者など)の間で衝突の場になるという事実を指しています。米山尚子氏によると、この衝突を表す2つの主な言説は、「医学的言説」と「行動的言説」です。医学的言説は、基本的に若者は病んでおり、医学的または精神的治療が必要であると言います。主なアクターには、医師、心理学者、政府の一部、医薬品会社が含まれます。これに対し、メディアにおいて支配的な行動的言説は、若者が社会的な規範に従って行動していないことを批判します。この言説は明らかに強力な世代的要素を持っています。つまり

彼らの基準に従っていないといって若い世代を批判するのは古い世代です。パラサイトシングルに対する批判などはその非常によい例です。活動家や若者支援者は、医学的および行動的パラダイムの両方に抵抗する傾向があります。

### 中流階級バイアス

若者の問題に関する研究の蓄積により、若者問題とは中産階級の、中産階級による、そして中産階級のための問題であることが確認されています。ここでいう「中産階級の」とは、問題に強い関心を持っているのは中産階級であるという意味です。「中産階級による」とは、主に親の階層を指しています。人脈が広く積極的な中産階級の親は若者の問題に対する主な駆動力です。彼らは支援グループやプレッシャー団体を形成します。「中産階級のため」とは、若者の問題の論争から生まれる政策が中産階級の若者を対象としたものになるという意味です。新しい政策が確立されても、それは非常に高価であるか、間接的に中産階級の子どもをターゲットにしているのか、貧しい若者や親と一緒に住んでいない者はほとんどメリットを享受できません。困ったことには、最も「排除される」または「メリットを享受することのない」グループは、そもそも若者問題の定義そのものから排除され、メディアでの論争にも現れず、その存在さえも忘れられます。

### 結論

以上、私は社会的構築主義の視点から若者問題の成り立ちについて取り上げました。そしてそうした問題の下にある社会的メカニズムに光を当てようとしてきました。なぜなら、こうしたメカニズムを知ることによって、われわれは自分自身の研究プロジェクトにおける微細な、しかし重要なバイアスを乗り越えることができるからです。したがって、例えば、「高いリスクを抱えている」若

者 (at-risk youth) を取り上げる際、実際に誰が一番危険に直面しているのかについて当然視されている想定を、批判的に評価することができます。すなわち、われわれはどのような階層を想定しているのか？ フリーターはニートやホームレスの若者よりも「リスク」があるのか？ さらに細かく分類することが必要か？あるいはむしろ、さまざまなカテゴリー間の境界を壊すことが必要か？

最後に、次のように聞きたいと思えます。政策プロセスで実際に声を上げる場合、若者が自分自身のことについて「問題」として取り上げるのでしょうか？若者が政策プロセスに完全に含まれているとしたら、「ニート」や「ひきこもり」のようなカテゴリーをわれわれは持つのでしょうか？私は政治学者ではありませんが、若者の政治参加や政治的影響力に強い関心があります。こうした課題について再び議論できる機会があればと思います。

\*1 ここでは、著者個人の研究とともに、『日本の若者の社会学』(Goodman, Imoto & Toivonen) という暫定タイトルで出版を予定している共著に基づいてお話しする。本稿の詳細版は、著者のホームページ <http://users.ox.ac.uk/~grec1254/> から入手できる。

### 話題提供 2

#### ポスト経済産業時代の アノミーの心理的影響： 日本の若者の自己や 動機付けにおける考察

ビナイ・ノラサクンキット

私は、ひきこもりなどのリスクのある若者と就労・教育においてうまくいっている若者の間の相違を見るための実験的証拠と調査証拠を紹介したいと思います。また、リスク因子としての家族におけるダイナミクスの問題を取り上げます。

マーカスと北山の理論 (Markus & Kitayama, 1991) によれば、個人的目標を優先する社会は、自己が相対的

に他者や環境から区別される「独立的自己観」を発展させる傾向があります。そして、東アジアなどグループ志向の目標を発展させる社会は、他者や状況に依存した「相互協調的自己観」を発展させる傾向があります。相互独立的自己観では、自己を他人と区別し、自己のポジティブな側面を強調する傾向があります。これは自己高揚動機と呼ばれます。

これに対し、相互協調的自己観では、人々は社会的調和を維持しようとし、自己を状況や基準そして関係に合わせようとします。したがって、個人的行動と社会的に期待される行動の間のギャップを縮めるために、自分自身の欠点に注意を払い、その欠点を直そうとします。これを自己向上動機と呼びます。

相互協調的自己観において焦点が当てられている自己向上動機では、自己にかなりの可塑性があることが想定されています。なぜなら自己は社会的状況に調和するために柔軟でなければならないからです。これに対して相互独立的自己観において優勢な自己高揚動機では、個性的でポジティブ、他の人々とは違う自己の不変の性質に焦点が当てられます。

人々が成功と失敗のフィードバックにどのように対応するかについて、このモデルを適用して考えてみると、平均的日本人はより相互協調的自己観を持っているため、自己は可塑性が高いと想定され、失敗した後にはいっそう努力すると考えられます。なぜなら、他者にあわせて社会的調和を保てるように自分の欠点を直すこと (= 自己向上) に力を入れるからです。また、このパターンは相互独立的自己観においては逆になると想定されます。

先行研究において、ハイネらのグループは2つの条件を日本人と北米人にランダムに割り当てた実験を行いました。1つの条件では、参加者は非常に難しい課題を行い、失敗し

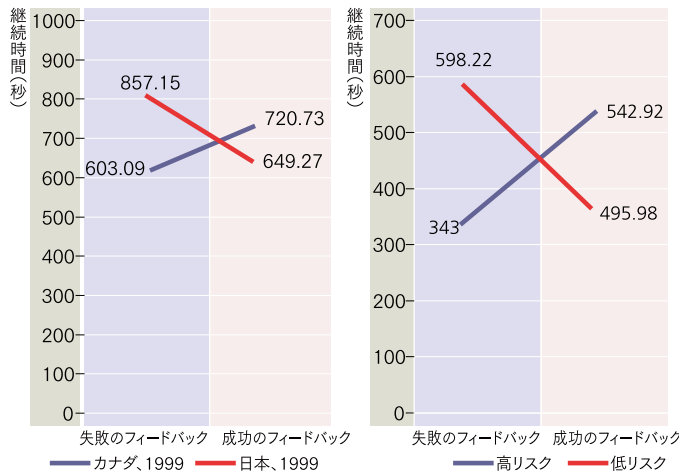


図2 失敗のフィードバックと成功のフィードバック  
比較文化研究(左)と今回の研究データ(右)

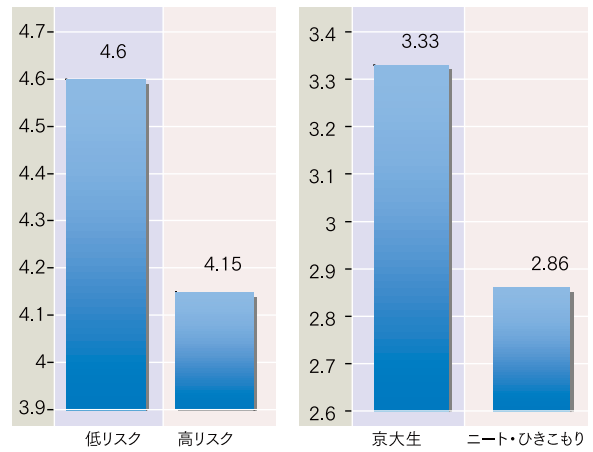


図3 相互協調の平均値

図4 適応能力に対する自己意識の平均値

たというフィードバック (=自分の成績は平均の下の方である) を受け取り、もう1つの条件では、参加者は相対的にやさしい課題を行い、成功のフィードバック (=自分の成績は平均より上の方である) を受け取りました。成功または失敗のフィードバックを受け取った後、彼らは同じような課題を遂行するように求められ、その課題への持続時間が測定されました。

予測どおり、日本人は失敗のフィードバックを受け取ると、成功のフィードバックを受け取ったときよりもその課題を長い時間継続して行いました。北米人の場合はその逆でした (図2左)。

心理的傾向における文化差を示すこのような調査は文化心理研究では一般的なものです。しかし、文化心理学と社会心理学における制限の1つは、われわれは常に社会の中心、すなわちその社会で適応的であり、それゆえ社会の中心的な心理的傾向を内部化している人からサンプリングする傾向があるということです。そのようにすると、文化の動的側面を理解することは困難です。

文化が変化していると想定する場合、社会環境の変化により、ますます多数の人が社会の中心から社会の周辺に移動しているということになります。われわれは、ニートやひき

こもりはこうした人たちを表しており、文化的変化や心理的傾向へのグローバル化の影響を捉えるには、こうしたグループについて検討する必要がありますと考えました。

ニートとは彼らが社会に完全には参加しておらず、それゆえ日本社会の文化的習慣や日常に適合できないことを示していると考えられます。言い換えれば、彼らは日本における中心的な心理的傾向からより逸脱している可能性があります。したがって、彼らは相互協調的自己観も低いと考えられます。相互協調性が低い結果、彼らは自己の可塑性も低いと考えていると思われます。すなわち、彼らの動機付けのパターンは、一般的な日本人のものよりも北米人のものに似ているということが予測されます。この仮定をテストするために、われわれはニート傾向において高いリスクを持つ学生と低いリスクを持つ学生でハイネの研究を追試する研究を行いました。学生はわれわれが開発したニート/ひきこもりリスク尺度に従って高リスク群と低リスク群に分類されました。また、相互独立的・相互協調的自己観の程度なども測定されました。

予測どおり、高リスク群は低リスク群よりも相互協調性がかなり低いことが示されました (図3)。

また、予測どおり、難しい課題

における持続性に関して、低リスク群は成功のフィードバックよりも失敗のフィードバックを受け取った際により持続的に取り組むことがわかりました。それは自分自身の欠点に注意を向けること、その問題に対する自己の能力に可塑性を想定してさらに向上するよう努力することが動機づけされていることを示しています。他方、高リスク群は、北米人のように失敗のフィードバックよりも成功のフィードバックを受け取ったときのほうがより持続的でした。それは自分の欠点に注目して自分を変化させるのではなく、固定的な自己のポジティブな側面を強化することに動機づけられていることを示していました。こうした結果は、高リスク群の学生は典型的な日本人のパターンとは対照的に、マイナスのフィードバックよりもプラスのフィードバックによって動機付けられ、より可塑性が低い自己観を持っているというわれわれの仮説を裏付けています。この相違は高リスク群は低リスク群よりも相互協調性が低いためであり、必ずしも彼らが相互独立性が高いということを意味していないと考えております。

2番目の調査において、われわれは大学生とNPOから集めた28人のニート・ひきこもり状態にある人たちの比較を行い、彼らがパーソナリ

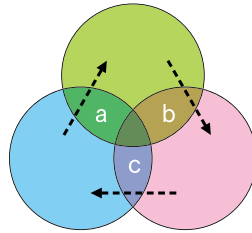
ティの性質をどれだけ可塑性があると考えているかを測定しました。たとえば、努力は実際にどの程度人の中心的な性質を変えることができると思うかなどを尋ねました。予測どおり、学生は、パーソナリティをより可塑性が高いと考え、ニートはパーソナリティをより固定したものと考えていました(図4)。これは先の動機付けに関する実験結果で分かったことと一致しています。

また、リスク因子としての家族関係にも関心があるため、親や仲間によって受け入れられていると感じている度合いを測定しました。

こうした測定から得られたデータを統計的に解析し、リスクの因果関係を調べました。このモデルは、ひきこもりタイプのニートとフリータータイプのニートには相違があることを示唆していました。主にNPOで支援を受けているのはひきこもりタイプであり、低い自己評価がリスクの強い因子となっていました。低い自己評価はポジティブな家族関係を持たないこととも結び付いているようです。驚くべきことに、仲間からの受け入れのレベルはリスク因子としては現れてきませんでした。

結論として、高リスク群の学生とニート／ひきこもりの間での動機付けのパターンは、日本の若者が自分を定義する上での文化的変化を表していると言えます。ひきこもり・ニートのリスクが高い人たち、または実際にそのような状態にある人たちは、相互協調的自己観や、懸命に働こうという動機に影響する要因(この場合は自己の可塑性に対する信念)を拒否しているといえます。ニートやひきこもりの動機付けパターンや態度は、現在日本人の間に広まっている傾向の極端な例を表しているのではないのでしょうか。家族の要因は、ひきこもりは家族がうまく立ちゆかなくなることから生まれたことを示唆し、これがフリータータイ

## B 自然としての近代性(プライバシーへのひきこもり)



A ショックとしての近代性 (威圧的なシステムとしての社会) C 歴史としての近代性 (オルタナティブ空間)

遊戯は従属的なグループの強化にどのように貢献しうるか。強化が起こるためには、オルタナティブ空間が関係性での遊戯的な相互作用のためのエリアを開くだけでは十分ではない。必要なことは、遊戯的な態度が、こうした空間から広い社会へ広がり、遊戯がcへと転置されるための行動の自由が提供されることである。

図5 オルタナティブ空間と3つの概念

プのニートと区別される要因です。こうしたリスクを持つ家族が増えつつあるという事実は、おそらく社会や文化レベルでの構造的な変化と関係があるのではないのでしょうか。

### 話題提供 3

#### 遊技とエンパワーメント：社会活動におけるオルタナティブ空間の役割

カール・カッセゴール

本日、私は無力感への対抗、権限付与(エンパワーメント)、政治的アクターとしての人々の自信強化を行うような社会運動としてのオルタナティブ空間の役割を取り上げます。この問題に対する私の関心は、登校拒否者、ニート、ひきこもり、またはフリーターなどのさまざまなサバルタン(下位)なグループの問題に対応するさまざまな運動の現在の動向にあります。

オルタナティブ空間は、まわりの社会の知覚の様式によって特徴づけられます。ベンヤミンが開発した3つの概念——ショック、自然、歴史によってこの点が明確にされます(図5)。「自然」とは、運命によって与えられ規定されるものとして人々が経験するものです。「歴史」とは、人間の行動によって作成される変更可能なものすべてです。しかし、ベンヤミンにとって、近代の特徴的な経験はショックです。ショックとは、人間が歴史の可能性において自

分の信念を失うときに感ずる痛みです。

ショッキングな敗北と自然に対峙することへのあきらめが、近代に関するベンヤミンの見解を特徴づけるものです。しかし、社会運動が「独立系のカフェ」、サロン、音楽シーン、サークル、または「フリースペース」を確立すると、それはしばしば「歴史」の感覚を蘇らせ、社会の圧倒的な力が剥がれ落ちるような空間を意識的に作り出すこととなります。

オルタナティブ空間が無力感という感情に対抗するには、3つの課題を解決しなければなりません。第1に、それまで従属的であった人たちが、もはや従属的ではなくなるような場所を提供しなければなりません。第2は、こうしたオルタナティブな空間自身の強化と拡張です。第3に、人々が社会において確立した秩序に対決しており、社会的変化のために働いていると感じさせることです。

オルタナティブ空間において繰り返し発生する問題は、抽象的でも具体的でもある相互作用の形式をいかにして作成するかであります。抽象とは、ある人が所与の社会的現実の1つまたは複数の面を体系的に無視するプロセスを指しています。具体とは、かかる面が再度呼び起こされ、相互作用を導くのに使われるプロセスです。下位の者が他と対等に参加できる空間を作成するのに抽象が必要である場合、具体は社会に変

化をもたらすためにまさに必要なものとして現れます。問題は、抽象と具体の間での調和のとれたシフトはどのようにして行われるのかということです。人々の再生を促進するためにあまりに多くのエネルギーが抽象空間を提供する課題に費やされる場合、社会的変化の願望は背景に押し戻される危険があります。逆にまわりの社会に対決するという課題が過度に強調される場合、活動家以外の者の参加が難しくなるかもしれません。最後にオルタナティブ空間自身の強化にあまりに多くのエネルギーが費やされる場合、下位ばかりでなく広い社会の公的エリアとの結び付きが衰える恐れがあります。

運動や運動のネットワークがこの困難とどのように関係しうるかを示すために、日本の3つの現代的運動を取り上げます。

NAM (New Associationist Movement) は、「資本、民族、国家への抵抗」のための運動を形成するために柄谷行人氏によって2000年に設立されましたが、3年後に組織は解散しました。その短い期間に、NAMはその最大のエネルギーをオルタナティブ空間自身の発展に、特にオルタナティブ経済の発展に注ぎました。これに対して、周辺グループの参加はほとんど重視されず、公的対決や抗議はまったく省みられませんでした。

次の運動は、千葉のニュースタートと富田のニュースタート関西（それぞれ1993年と1998年に設立）を中心とするネットワークに基づいています。どちらも、その主要な目的としてニートとひきこもりの支援を持っています。このビジョンの核は効率、利益、成長に対する要求を低減するような、「スロー」という理想を持つ社会の実現です。言い換えれば、活動の目的は既存の社会への人々の再適合ではなく、よりよい社会のために働くことです。

これら2つの組織のどちらも公的対決を行うことはなく、オルタナティブ空間の3つの課題のうち、「従属者の支援またオルタナティブ生活の舞台構築」が最も強調されました。支援活動が「もう1つの働きかた」の政治的ビジョンと結合されるということは、特にニュースタート関西の場合において活動家とその支援を受けている若者たちの間に明確な違いを見えるということです。言い換えれば、オルタナティブな社会に関する運動のビジョンと、従属者の回復に貢献するというより直接的な目標の間に「ギャップ」があるということです。

2004年から、東京や日本の大都市の通りは新しい種類のメーデーデモの光景、ストリートパーティを提供しています。デモ参加者はほとんどが定職を持たない若い男女、すなわちフリーターです。デモ参加者は自分たちを「プレカリアート」（非正規雇用者および失業者など、不安定な雇用・労働状況下にある人たちの総称）と呼びました。

プレカリティ運動（プレカリアートによる労働運動）は、従属的なグループの公的場面への参加を促す面では成功したところもあります。ひきこもりや障害者ばかりでなくニートもデモに参加しました。「場所」も重要な役割を果たします。これは、高円寺の「素人の乱」の中核となっている多数のグループに明らかです。彼らは「通り」を、芸術的ハプニングを思い起こさせるヒューモリストティックで、時には粗野な悪ふざけのためのシーンとして使っています。その場合、「通り」そのものがオルタナティブな空間になることが可能でしょうか？ すなわち、遊戯形態が「通り」に持ち出され、「対決」そのものが遊戯の特徴として想定されているかということです。

私を取り上げた3つの運動のうちで、オルタナティブ空間の3つの課

題を結合する努力を見て取れるのは、プレカリアート運動です。なぜでしょうか？

遊戯形態が社会的現実からの抽象を前提としているという考えは、遊戯の一般的な定義、すなわち「現実」から切り離された活動であることと一致しています。しかしこの定義が問題にされる必要があります。なぜなら遊戯は社会的現実からの区別においてのみ展開できるというならば、現実との対決においてどのようにして成長が可能になるのでしょうか？

この問題は次の問題と関連しています。プレカリアート運動のストリートパーティで実施されるふざけた対決でわれわれが見るものは、抽象的あるいは具体的相互作用として分類されなければならないのでしょうか？

具体と抽象がそれぞれ、所与の社会的現実が注意されているかどうかということによって定義されたということをお考えください。したがってそれらの間の対決を相対化する可能性は、この所与の現実が固定の外観を失った場合に現れます。これはまさしく歴史が再出現するときに行われることです。

遊戯はどのようにして社会との対決を可能にしているのでしょうか。遊戯はしばしば言われているような現実の反対にあるものではなく、無力感の反対にあるものです。遊戯は現実との分離を想定している「見せかけ」の活動としてではなく、まわりの環境に対する楽しい相互的な応答と見なされなければなりません。こうした広い定義は、遊戯が権限付与にどのように貢献しうるかを理解するのに役立ちます。オルタナティブ空間が楽しい相互作用のためのエリアを開くだけでは十分ではありません。必要なことは、これらの空間から広い社会へと広がる楽しい態度のためのチャンネルが開かれること

です。

## 指定討論

マイケル・ジーレンジガー

京都大学こころの未来研究センターにより、この複雑な問題について、外国人や日本人が相互に対話する機会が提供されたことに感謝します。社会科学やジャーナリズムで働いているわれわれは、「臭いものに蓋をする」、あるいは明確な問題についても語らない傾向を日本人が持っていることを知っています。以前、コミュニケーションが不足しているという家族問題が、家庭内でさえあまり取り上げられないという事実が指摘されました。これは、公開性全体が非常に問題となっているこの社会において、心理学および社会科学研究を行うことへの主な障害になっています。したがって、こころの未来研究センターが着手した仕事に感謝し、ここから野心的な計画が生まれることを希望します。

近代日本の非常に複雑な現実について新しい理解をもたらすために、まずはボトムアップ研究（フィールドワークとも呼ばれる）からはじめ、モデル、関連性、理論を見つけないと思えます。そこで重要になる示唆的な観点として、私自身は、日本社会は他の社会とは、特に西欧の社会とは、非常に異なっていると考えています。

私の著書『ひきこもりの国』(図6)での基本的議論は、私が調査した「ひきこもり」のような社会的障害や、特に日本的な機能障害は、ここ1、2年の景気悪化の後ではなく、この10年から12年の経済停滞の後に目立つようになったということです。日本でバブルが崩壊してから20年以上が経過しており、現在の大学生は日本経済が活況を呈していた時代の記憶を持っていません。

かつて日本のすべての人が豊かに

なっていたとき、社会的機能障害、あるいは不幸せを訴える人々や、社会の中での危機感を持つ人たちについて調査する理由はほとんど見あたりませんでした。結局のところ、私たちは皆が豊かになりつつあり、社会的成功が明らかであるかのようでした。人々は不幸であったかもしれませんが、飲み屋のつけを払うことができました。したがって、誰もがとにかく基本的にはなんとかやっていけました。しかし現在では事態はまったく異なっています。

ひきこもりは日本における多くの深刻な問題を理解するために重要であると考えて、私は本を書きました。自殺率の上昇から、女性子どもを持つことを拒否すること、そして結婚して子どもを持つことを自らの意志で拒否した女性であるパラサイトシングルまで。これらはみな、無理にでも総意を保とうとする社会から「抜け出よう」とする表現です。

私のアプローチは非常に共感的です。ひきこもりとは何であるかに関して基本的に2つの見方があると指摘してくれたのはトゥーッカ氏でした。1つの見方は、「医療的見解」と呼ばれるものであり、ひきこもりとは精神的疾患であり、よくなるには薬や集中的な医療行為が必要であるというものです。もう1つの見解は、「社会的」説明であり、基本的に彼らは怠け者であり、わがままな子どもであり、仕事に押しやるには背中をどやして追い出す必要があるというものです。これらは2つの極論です。

長時間ひきこもりの人たちと話をし、私はひきこもりとは何であるかを理解するための第3の方法があるのではないかと感じました。いじめへの恐怖や世間体のために、日本の社会では自分の真の自己を表すことができないと感じている彼らは、高度に知的で過度に共感的そして情緒的であり、ひきこもることで個人



図6 ジーレンジガー『ひきこもりの国』(光文社)

の抗議を表しています。彼らは自分がどのように振る舞うべきかについて他の人に合わせなければならないと感じています。その課題は非常に難しいため、活力を失い、そのため彼らを「真の自己」以外のものにしてようとしている外界に対処するのではなく、自分の部屋に閉じこもります。

重要なことは「個性化」のこの感覚であり、この一種の「自己強化」は日本における21世紀的なコンセプトです。本日のプレゼンテーションについての包括的なコメントがあるとしたら、それは現在の心理学的・経済的問題が表面化した理由は、一定期間問題なく動いていた古いシステムがもはや機能しなくなったということです。古いシステムは、若い日本人がよく知るグローバル化からもたらされたさまざまなモデルによって、異議を申し立てられています。そしてそれらは古いシステムにどのように適合させればよいのか、まだ明らかではありません。

外の世界の人がどのように思考し、行動し、振る舞っているかを理解する若い日本人の能力は以前よりずっと高まっています。同じように、日本のビジネスマンは日本以外の会社や社会がどのように動いているか

よく知っています。かつて問題なく動いていたものと、今や破綻の兆候を見てとられている日本との間での現実的な弁証法的課題が存在しています。日本人は今や外の世界がどのように動いているのか、そして一昔前の古い世界とどのように異なるのかをよく知っています。それだからこそ私はひきこもりを日本独特の症候であると思います。

現在われわれが見ているものの多くは、ある意味でかつて問題なく機能していた日本と、他の国が異なるシステムでわれわれを追い越そうとしているという感覚の間の弁証法的な緊張です。しかし、日本人はどのように振舞うべきか、どのように対処すべきか、まだ迷っています。

部分的に言えば、これは日本の基本的同質性によります。

アメリカ人はとてつもない異質性が存在している社会で成長します。バスで自分の隣に座る人はラテンアメリカ、ヨーロッパ、スペイン、あるいはアフリカで成長した人かもしれず、それはわかりません。あらゆる肌の色、人種が混ざっています。そしてアメリカでは自分とは異なる人をどのようにして信頼するかを学ばなければなりません。したがって、アメリカ人は実際に見知らぬ人に対して素朴な信頼感を持っています。

しかし、日本では人はすべて同じであると考えられているので、知っている人と知らない人を分けなければなりません。「人を見たら泥棒と思え」という私の好きな言い回しがあります。知っている人でなければ、道ばたで会う人は泥棒かもしれないということです。もしあなたがその人と人間関係を持たないならば、その人には関心を持ちません。そして日本人は知らない人である他人についてどのように考えているか。その人に対しての信頼感はなく、リーダースクリーン上にないという不信感があります。



ワークショップ参加者

後列左から2番目から Tuukka Toivonen、Vinai Norasakkunkit、Michael Zielenziger、Carl Cassegard、前列左から4番目、内田由紀子の各氏

皮肉なことに、日本は同質性が高いことによって信頼性が低くなってしまっている社会です。

この同質性は日本人が世間体の重圧に耐えること、世界が創造性と個性を求める時代に、創造的な「個人」であることを困難にしています。「日本人」を規定する文化的価値をどのように守るか、そして同時に現在の社会が好調で幸せな社会とは言えないことについてなんらかの形での根本的再構築が求められていることを認めること。また、「他人」との深い信頼関係をどのようにして構築するのか、そして根本的な違いをどのように受け入れるか。これらは日本社会に突きつけられている課題です。

これは今後何年もかけて社会学者と市民の両方が考えなければならぬ課題ではないでしょうか。

## おわりに

内田由紀子

3氏の話提供と、ジーレンジガー氏による指定討論を受けて、ひきこもりやニートなどの日本の若者を取り巻く「問題」は、はたして社会的に構成されるものなのか、それとも精神状態や心理的な問題なのかについて議論が重ねられた。社会学の立場からは、「問題」の社会的な構成プロセスが指摘され、心理学の立

場からは個々の動機づけに関わる若者の様相について指摘された。しかし社会と心は簡単に切り分けられるものではなく、社会的現実が心の現実になり、そのようにして形成された心がまた社会の現実を再生産するとすれば、この2つのアプローチはそれぞれに重要であり、連携が必要であろう。このワークショップを受けて、心理学の側は社会の変化をどのように捉えるべきか、人々の心に変化をもたらすような社会の構造上の変化はなぜ起きているのか、日本の教育や雇用に関わる経済情勢なども視野に入れて見極める必要があると再認識した。また、社会学の側からは、政策や組織が個人の内的な動機付けにどのように影響するのか、どのようにすれば個々人のモチベーションが高まり、働くことの概念が変化するのかについて取り組む必要があり、そのためには心理学のアプローチと連携して理論構築を行っていくことの重要性が呈示された。

ジーレンジガー氏が指摘するように、日本の社会のシステムも、社会の変化に非常に敏感な若者の心も、従来の価値観とグローバルな価値観の間で迷っているともいえるのかもしれない。日本社会の心を考えていく上でも重要な示唆を受け取った。



●2010年4月23日、第8回注意研究会を開催しました(於:京都大学大学院人間・環境学研究科棟地下講義室 B23A)。話題提供:鯉田孝和先生(豊橋技術科学大学エレクトロニクス先端融合研究センター特任准教授)「色の認知とサル下側頭皮質ニューロン活動」。

●4月27日、2010年度第1回こころの未来研究センター定例研究会を開催しました。「こころ観の思想的・比較文化論的基礎研究」(鎌田東二教授)、「こころとモノをつなぐワザの研究」(大石高典研究員)。

●5月17日、第9回注意研究会を開催しました(於:京都大学稲盛財団記念館3階中会議室)。話題提供: Avi Sadeh先生 (Professor, Department of Psychology, Tel Aviv University Director, Adler Center for Research in Child Development and Psychopathology, Tel Aviv University, Israel)、「Sleep, Neurobehavioral Functioning and ADHD in Children。」

●5月25日、2010年度第2回こころの未来研究センター定例研究会を開催しました。「社会的ネットワークの機能と性質:『つなぐ』役割の検証」(内田由紀子助教)、「カウンセリング対話で何が起きているか——非言語行動の分析」(長岡千賀研究員)。

●5月27日、第10回注意研究会を開催しました(於:吉田南総合館東南棟1階101演習室)。話題提供者: Gianluisi Mongillo先生 (Rene Descartes University, Paris)、「Synaptic theory of working memory。」

●6月8日、こころの未来講演会を開催しました(於:京都大学稲盛財団記念館3階大会議室)。講師: John Wachtel先生(スタンフォード大学医学部婦人科医・教授)「医療のこころ構え——自発的改善の実現」。

●6月12日、ワークショップ「Psychological and Sociological Perspectives on Japanese Youth Issues: Views from Foreign Researchers in Japan」を、グローバルCOE「親密圏と公共圏の再

編成をめざすアジア拠点」とこころの未来研究センターの「青年期の社会的適応プロジェクト」の共催で開催しました(於:時計台会議室4)。詳細は本誌 p40～47。

●6月22日、第33回こころの未来セミナーを開催しました。講師: J.Baird Callicott先生(ノース・テキサス大学哲学科教授)「環境問題に関するアメリカの倫理・政治・法律——その成果と失敗」。

●6月24日、第1回人間・環境学研究科・こころの未来研究センター交流会を開催しました(於:人間・環境学研究科棟地下講義室 B23A)。吉川左紀子センター長、河合俊雄教授、鎌田東二教授からの研究報告が行われました。人間・環境学研究科からさまざまな領域の先生方にご参加いただき、「こころ」についてのディスカッションを通じた研究交流を行いました。

●6月25日、第11回注意研究会を開催しました(於:京都大学大学院人間・環境学研究科地下講義室 B23B)。話題提供: 北岡明佳先生(立命館大学文学部人文学科心理学専攻・教授)「錯視と注意と脳」。

●7月9日、2010年度第1回こころの科学特別レクチャーを開催しました(於:稲盛財団記念館3階大会議室)。講師: 村井俊哉先生(医学研究科精神医学)「社会の中での意思決定、その障害と治療について」。

●7月15日、第2回わく・湧く・ワークショップ「イメージワークとメディテーションのタベ」を開催しました(於:京都大学稲盛財団記念館3階中会議室)。

●8月1日、京都府・京都大学こころの未来研究センター共同企画、第7回こころの広場「聞くことの本質——プロカウンセラーの聞く技術」を開催しました(於:京都大学稲盛財団記念館3階大会議室)。第一部、講師: 東山紘久先生(帝塚山学院大学専門職大学院教授・元京都大学副学長・臨床心理学)「聞くことの本質——プロカウンセラーの聞く技術」、第二部、座談・質疑

応答、司会進行: 河合俊雄教授。

●8月15～16日、「慶應義塾大学グローバルCOE論理と感性の先端的教育研究拠点」との共催で、「負の感情」研究会を開催しました(於:京都大学稲盛財団記念館3階中会議室)。テーマ: 「負の感情」とはなにか? ——「底つき感」の通文化比較とその手法としての映像。発表は宮坂敬造先生(慶應義塾大学)「底つき感と文化」、Karl Heider先生「ニューギニアおよびインドネシア先住民社会における負の感情と映像人類学」、大石高典研究員「感情の文化間比較への民族人類学・民族生物学的アプローチ: カメルーン東南部の焼畑農耕民社会と狩猟採集民社会の比較から」、鎌田東二教授「日本の精神文化史において仏教受容が負の感情に与えた影響」ほか。

●8月17日、第3回わく・湧く・ワークショップ「イメージワークとメディテーションのタベ」を開催しました(於:京都大学稲盛財団記念館3階中会議室)。

●8月19日、第1回「進化と文化とこころ」ワークショップを開催しました(於:京都大学稲盛財団記念館3階小会議室1)。話題提供: 竹澤正哲先生(上智大学)「制度アプローチから考える文化の維持」、鳥山理恵先生(トロント大学)「文化伝達: 模倣から社会学習まで」。

●9月6日、第1回「進化と文化とこころ」研究会を開催しました(於:京都大学稲盛財団記念館3階中会議室)。話題提供: 森島陽介先生(Institute for Empirical Research in Economics, University of Zurich)「神経経済学から見た社会的選好の個人差とその神経基盤」。

●9月7日、第12回注意研究会を開催しました(於:京都大学大学院人間・環境学研究科地下講義室 B23A)。話題提供: 楠真琴先生(Oxford University, Department of Experimental Psychology, Research Scientists)「連合学習課題遂行中のサル前頭野ニューロンの反応」。

## 編集後記

今号も読みごたえのある論考が集まりました。ご執筆の先生がたに心からお礼申し上げます。インタビューの前、西島先生を京大病院の待合室にお迎えに行きました。稲盛財団記念館に向かおうとタクシーを止めると、先生はさり気なくドアに手を添えて私を先に乗せてくださいました。レディーファーストが身に付いた、先生のやさしいしぐさと笑顔が、今も胸に残っています。(吉川)

この夏、京都の山でナラ枯れが大量に発生した。たびたび比叡山に登っているのでナラ枯れの状態を目撃するのはつらいものがある。山歩きを通して自然と人間との共生は生易しくないことを痛感している。さて今回、本号は、ナラ枯れとは反対に、豊かな果実を実らせている。原稿をお寄せくださった先生方に心よりお礼申し上げます。(鎌田)

いわゆる“ロストジェネレーション”に属する者にとって、今号の「日本の若者の問題」についての記事は他人事ではない。すでに「若者」などとは言ってられない年齢となったわが世代の「未来」がどこに向かうのか。などとメタ視線で眺める余力もないまま、諸事に追われる内に「こころの未来」も5号発行となっていた月日の早さに驚かされる初秋の一日である。(平石)

西島先生のお話から、困難な状況にあっても、これまでの蓄積を生かしてのびやかに新しい創造へむかうところを教えていただきました。今号から編集のお手伝いをさせていただくことになりました。どうぞよろしく願いいたします。(森崎)

初めてお会いした西島安則先生は、懐が深く、熱い志をもった方で、そのお話にこちらの心がかき立てられる思いがしました。完成した本誌をお見せできなかったのが悔やまれます。西島先生弟の西島昭様、京都市産業技術研究所の橋田章三様、京都市立芸術大学美術学部の辰巳明久教授、同大学事務局の近藤恵様はじめ、お力添えをいただいた皆様に心より感謝申し上げます。(原)

本誌4号25頁、60頁のe-Leaningはe-Learning、36頁「社会契約論」(1962)は「社会契約論」(1762)の誤りでした。お詫びして訂正いたします。(編集委員会)

こころの未来  
KOKORO RESEARCH CENTER  
KYOTO UNIVERSITY

第5号

発行日……………2010年9月30日

発行……………京都大学こころの未来研究センター

〒606-8501

京都市左京区吉田下阿達町46 京都大学稲盛財団記念館内

電話 075-753-9670 FAX 075-753-9680

<http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/>

編集委員……………吉川左紀子+鎌田東二+平石界+森崎礼子

表紙写真……………大石高典 コスモスと蝶(京都大学理学部植物園)

編集・制作……………編集工房レイヴン 原 章

デザイン……………鷺草デザイン事務所 尾崎閑也

印刷……………株式会社NPCコーポレーション